DEVIL'S TRIAL

マスオカさん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＤＥＶＩＬ'Ｓ　ＴＲＩＡＬ

【Ｎコード】
Ｎ７４６５Ｓ

【作者名】
マスオカさん

【あらすじ】
首が、ないんだ。……なあ、どうすれば救われた？

００：登場人物紹介

亜種要（アダネ カナメ）

母親を生まれた時に亡くした。父親との関係は冷めきっている。親の目がないのを良いことに好き放題している。父親が干渉すると酷くうざがる。学力良し、器量好し。好んで高いハードルに挑もうとする。

佐藤茉莉耶（サトウ マリヤ）

自分を孤立無援の弱者とみなしている。弱気でうつむきがち。何をするにも自信が持てない。要の彼女。要に出会うことでようやく平穏な日々を得た。中学時代のいじめはハードで親とも話題にしたくないほどの黒歴史。

名主みな（ナヌシ ミナ）

なにかと要にちょっかいを出し、茉莉耶を遠ざけようとする。誰が見ても美少女。はつらつとして明快な性格だが謎めいたものが大好物という不思議系な面も。茉莉耶を事件の犯人ではないかと疑う。

亜種原典（アダネ ゲンテン）

最愛の人、伊吹を亡くして以来、ずっと打ち沈んでいる。息子の要をどう扱えばいいのかわからず、結果放任主義になっている。心中では要と茉莉耶の結婚を望んでいる。

多田野一十（タダノ ヒト）

不況のせいで社内圧力に屈した父親が二年前に自殺した。母親が新興宗教にのめり込み、一十自身も少しずつかぶれ始めたこの頃。弱者救済を目指し、茉莉耶の過去を知りつつ普通に接する者の一人で

もある。

01：万引きと逃避行

†

「お嬢さん」

スーパーを出た時、不意に、俺は腕を捕まえられた。俺の足を止めたのは、共に歩いていた佐藤茉莉耶で、その彼女を、いかにも高圧的な猫なで声が呼び止めたのだ。俺と茉莉耶は同時に声の主に振り返る。痩せて背の低い、手足に無数のしわを寄せた老人だった。定年を過ぎているのだろう、社会人らしい仰々しさはさほど感じない。それでも彼が気迫に満ちた老人であることは、その抜け目ない眼光を見ればすぐに知れた。社会人の間に鍛え上げた、上下左右から訪れる荒波の中倒れないように確固たる地位を築こうとあがく脚力はそのままに、今は余生としての解放間に身を浸して自由気ままな立場を満喫している。言い換えれば、どこからも圧力がない状態で脚力が放し飼いされているという事だ。つまり、鬱憤の溜まった権力誇示の気配を、学生である俺たちにひしひしと感じさせてしまうのである。

「なんですか？」

茉莉耶を横に押し、背後へ匿うようにして俺は尋ねる。隙を見せないよう、正面から向かい合う。

老人は、ラクダ色をしたゴルフジャケットのポケットから、几帳面に折り畳まれた腕章を取り出して俺たちに見せる。

「読めるかね？」

しゃくに障る応答だった。俺は目だけで、茉莉耶は声に出してそれを読む。

「店内私服警備員」

「おっさん版Ｇメンってことだろ」

店を出た瞬間という状況から見て、何となく予想はついていた。
「で、それが何のようだ？」
「いや、ね」
老人は染みの浮いた額を、このくそ寒い季節だというのにハンカチを押し当てて拭う。汗はかいていないから、おそらく習い性だろう。外気温は氷点下に達したか否か。足下には今朝降ったささやかな雪が雨に変わって水たまりを作っている。たじろいだ茉莉耶が黒いぬかるみのひとつに足を突っ込み、革靴と靴下の裾に泥を跳ねさせた。ぬかるみは月の見えない夜空を映じたように底知れず、スーパーをはじめとする町明かりを星屑のように蓄えている。俺は首に巻いたマフラーを少し引き下げた。
「おれはそこのお嬢さんに用事があるんだよ」
俺から視線をはずし、茉莉耶だけに定める。茉莉耶は臆してさらに俺の陰に隠れた。俺は部外者だというわけだ。
「ああ、お嬢さん、名前を教えてもらえるかな。どこの高校で、どこに住んでいるんだ？　制服から見たとこ、D高校らしいな」
「佐藤茉莉耶です。D高校の一年生で、住所は」
「茉莉耶」
俺は彼女の頭を軽く叩いて個人情報公開を止めさせた。
「知らない人に何でも教えるもんじゃねぇよ」
「教える理由ならあるよ」
老人は茉莉耶の鞄へ顎をしゃくった。
「その中に店の商品が入っている。携帯裁縫セット、グロス三本、チーク、板のチョコレート」
断定的に列挙され、茉莉耶がさっと表情を青ざめた。俺は不味い、と口の中で舌打ちする。案の定、老人はなけなしの礼節をかなぐり捨てて勢い込んだ。
「ほら！　やっぱり！　身に覚えがあるなら言い逃れせずに素直になりなさい。鞄の中、見せてごらん、ほら、さっさと！」
「おっさん、俺はこいつとずっと一緒にいたんだ。化粧品コーナー

なんて行ってないし、こいつが万引きなんてする奴じゃないことも知ってる」
胡乱げな瞳が俺を見る。
「ふん、あんた、彼氏さんかい？」
「ああ」
「なら、その証言は信じられないね。一応、あんたの名前も聞いておこうか。名前は？」
ゴルフジャケットから手帳とボールペンを出し、日時、茉莉耶の名前、在学校名、万引きした商品を書き留めていく。この老人の中で、完全に茉莉耶が万引き少女として定義されていることが許せないを通り越してあり得なかった。そしてまた茉莉耶は、こういう一方的な関係の押しつけに弱い。自ら鞄を差し出し、屈辱の瞬間から楽になろうとしている。買い物を目的として集った人々が、すれ違いざまに俺達の人相を確認して行く。ダッサーという女子高生の嘲笑も、娘や息子に悪い教科書として俺達を差し出す浅慮な親たちの愚弄も、老人の調子を後押しし、俺の矜持を蹂躙し、茉莉耶の精神力を切り刻む。多対二で俺たちは惨敗の寸前だった。
「お前に教える必要なんてない」
俺は一歩前に出て老人を威圧し返す。だが、それすらも彼の気に入ったようで、老人はにやりとボールペンの先を舐めた。もし対峙している相手が通例通りおばさんのG面だったら、俺の反抗的な態度に挑発され顔を真っ赤にし、ヒステリーを爆発させていたかも知れない。だが、相手は百戦錬磨の老人だった。社会で相手の腹を読むのにも読まれるのにも長けた、男だった。
「みんな言うんだよねえ、捕まりたくないばっかりに、嘘の名前をさ。万引きするような頭の軽い子たちでも浅はかなりに悪知恵をいっちょまえに働かせるわけよ。それが、あんた、おもしろいねえ。真っ向から名前を言わないと言うなんて。幼稚園児を相手にしている気分だよ。かわいいねえ」
言っていることは優しい。簡単な見え透いた挑発。それこそ、俺

でも思いつくような文言。俺と老人の間に、この挑発が人生経験の少ない俺たちに絶大な効果を発する絶対的な相違点があるとすれば、それは、姑息なほど秀逸に添えられた表情と声音による感情表現だっただろう。事実、俺は彼の落胆した肩の落とし方、手応えのなさに導かれる張り艶が消えしぼんだ口蓋、果ては一周回って現れた慈愛に満ちて光る瞳に屈辱を感じ、奥歯が欠けそうなほど歯ぎしりをした。

「そうだな、隠す必要なんてどこにもねぇんだよな」

可能ならば、若者を裁いて愉悦する事に老後の生き甲斐を見いだした労害の顔面を、還付なきまでにへこましてやりたかった。本当に砕けたような気のする奥歯の欠片を飲み込む。

「亜種要だ。ほら、さっさとご自慢の手帳に書けよ」

「最初から素直になりなさいって。口八丁の脳なんかないんだから。近頃の若い者は安っぽい挑発をするのが好きなのかねえ」

怒りで血液が脳みその中に溢れ、目眩がした。たたらを踏んで茉莉耶に支えられる。挑発好きはてめぇだろうが、と言ってやる。そう息巻いたがどうせ涼しい顔で言い逃れするのだろうと思うと、それすら馬鹿馬鹿しい。恐らく、俺が「老人に対して」、大人の対応をしてみせるしかないのだろう。

「おじさん、俺も茉莉耶も身に覚えがないんだよね。一方的に疑われる俺たちの気分ってのも考えて欲しいんだけど。ああ、鞄の中見せろとか、ノーサンキューだから。よく考えてみてよ、無抵抗な女の子の鞄ひっくり返すんだぜ？」

「それがどうした？　店のもの盗まれた、まじめに働いてる人たちのこと考えてみたのか？　あんたらみたいに親の庇護下でぬくぬくしてらんないんだよ」

ボールペンの尻が俺の胸を突く。親の庇護下という言葉が腹がよじれるほど滑稽に響いた。

「ガキどもの都合じゃないんだ、ほら、さっさと見せてごらん。不当な扱いはしないから。抵抗するようならこの場ですぐ警察を呼ぶ

がね」
俺たちは清廉潔白なのだから、警察の登場はむしろ望むところだ。そう悠々と構えかけた俺の胸を裏切って、茉莉耶が鞄を老人に差し出す。警察の一言が、面倒事を起こしたくないという彼女の背中を押した。
「やめろって、そんな」
俺の制止は半ばで途絶える。老人の背後、スーパーの駐輪所に人影を見つけた。シルエットは制服姿の少女ふたり。自販機の明かりを横から浴びる意地の悪い彼女達の顔は、俺の記憶に生々しい。自販機と闇の狭間でよじれて歪む彼女達の姿に、嫌な予感が全身を駆け抜ける。老人がついに見せたジョーカーが、予感を鮮やかに的中させてくれた。
「親切にも教えてくれた子達がいたんだよ。あんたがとった商品もね。心配していたよ、あまり友達を困らせるもんじゃないね」
なんて言いぐさだ。遠くから高みの見物を決め込む少女ふたり。片方は確か林悟実とか言った名前だったと思う。悟実は中学時代、茉莉耶のいじめの、陣頭指揮を執っていた女子だった。ふたりの少女はにやにやと口元をほころばせ、互いに腕をつつきあっている。子どもの正義感と友情ごっこにロマンを抱く老人を利用して、茉莉耶を万引き犯人に仕立てあげようとしているのは明らかだった。これは仕返しだ。茉莉耶と俺に対する、いや、俺に対するかも知れない、報復だ。悟実の持つ陰湿さから考えれば、茉莉耶の鞄の中には盗品がきっちりたっぷり仕込まれている事だろう。
「茉莉耶、やめろ、見せるな」
茉莉耶の腕を引いて鞄の開示を阻止しようとしたが遅かった。
「ほら、しっぽを出しよった」
俺が腕を引いた弾みにか、老人がわざと受け取り損ねたのか、すでにふたの開けられていた鞄が落下しひっくり返る。中から未開封の商品がこれ見よがしに転がり、夜道にきらきらと飴のような色彩をばらまいた。同時にノートや教科書も滑りでて、ぬかるみの中に

吸い込まれる。
「ほら」
と老人が勝ち誇った。
「それは茉莉耶がとったんじゃない、あんた、騙されてんだよ、あいつらが勝手に鞄に入れたんだ！　ガキに担がれて悔しくねぇのかよ。いいように利用されてプライドねぇのかよ」
「利用？　おれは商品が持ってかれるのを止めようとしているだけだね。実際に盗ったのが誰か、調べようがないだろ。なら商品を持ってる子を捕まえるだけさ。さあ、佐藤さん、事務所の方まで来てもらえるかな」
自分の鞄から、身に覚えのない犯罪の記録が飛び出したことを、茉莉耶は少しも怪訝に思っていないらしい。真っ青になった後、紙のように真っ白になって、ごめんなさいと頭を下げている。地面に這いつくらんばかりだ。老人はふんぞり返り、利用されたことすらわかっているのかいないのか、醜いくらい奢り高ぶって滔々と茉莉耶に向けて善を説き始める。
狂ってる。あり得ない。だが、都合よく生きる事に長けた人間は、必要最低限の事実をつまびらく事すらせず、裁きたいものだけ裁き、裁きたくないものは全力で弁護して養護して、あげく無視を決め込み遠ざける。この時も全くその例に漏れず、真の万引き犯に対し「感謝」と言う逃げ道を用意してそれ以上罪科を言及しない。眼前の老人は善人の面を巧妙にかぶった浅ましい怠け者だ。最悪の部類の大人だった。俺は茉莉耶の肩を自分の側へ抱き寄せる。彼女はふらふらと老人の方へ歩きかけていた足を空中でぶらつかせた。もっとまともな、物事を知り、理解した大人はこの世に五万といるだろうに、なぜ、この労害は、低次の域で成長を止めてしまったのだろうか。それでも、彼が振り回す正義感は絶対で、どこまでも鋭く綻びを持たない。
「あんたがこの子をそそのかしたんじゃないのか？　ほら、泣いて見せたって何も変わんないんだよ、お嬢さん。こっちだってねえ、

身を切るように働いてるんだ。見逃す事なんてできないんだよ。さ、」
老人が、王子のように茉莉耶の手を引くから、俺は思わず叫ぶ。怒鳴りつける。
「見逃す、見逃さないっててめぇに都合のいい御託並べてんじゃねぇよ！」
本当は、慎重にタイミングを伺い、彼が決定的なぼろ、分かりやすいものなら手を挙げるとか、を待つつもりだった。待って、それを足がかりに行き過ぎた正義に逆転するつもりだった。けども、どんな愚かでも、そんなあからさまなすきを見せるはずがないのだ。
「あんた、見逃してんじゃねぇか。あいつらだよ、あそこにいる奴らがはめたに決まってるだろ。いい年して人を見る目があんのか！？　あるなら、俺たちか奴らか、どっちが根本が何かもわかるだろ！」
ぎょろり、と老人の目が動いた。どうでもいいものをみるように感情表現が侮蔑のみに偏った目。
「ああ、わかってるよ。お嬢さんはともかく、あんたは言って頼んでも商品を返してくれる善良な子どもじゃないって事をね。さ、佐藤さん、わかってるね、万引きは犯罪なんだ。警察は呼ばないといけない」
「っざけんな、盗ってねぇって言ってんだろうが！」
「も、もういいですよ、あたしが悪いんですし……警察を呼ばれても仕方ないですよ」
「だから、茉莉耶はどうしていつもそう、諦めるんだよ」
じれったい。壊れてしまえばいい。無用の長物でしかない正義感など。茉莉耶をおとしめる従順さなど。誰が決めたんだろう。目に見える善を善と。目に見える悪を悪と。そう簡単に判別さえすれば、目に見えない隠された善も悪も認められ正当に罰せられるのだと。この大人は複雑に物事を考えることができない。単純に割り切る術だけが身に染み着いている。

俺は靴の先で地面に転がるきらきらした奇妙なものを示した。泥水にまみれ、表面にまつわった水滴が、光を乱反射している。
「持ってけよ。盗まれるなんて間抜けだなあ。笑っちまうよ」
「それ以上店のものを粗末にすると、厳重注意どころじゃすまされないぞ」
老人が押し殺した声でドスを効かせた時。
「すみません、それ、いくらですか？」
俺を押し退けるようにして人影が現れた。
「おい、何言ってんだよ」
見知った頭部が視界の一部を封鎖する。多田野一十。一緒にスーパーへ来たのだが、用事があって一足早く店から出ていたのだ。
「そんなもの、おれが知るわけないだろ」
老人がへらへらと愛想笑いをする一十へ唾を飛ばす。同じ高校の制服を着ているため、一十も万引きグループの一人だと見なしたらしい。おまけに一十は俺と違い長髪で、首周りのコテで縮れた髪には脱色した後が斑に残っている。眉も薄く剃り上げ、制服もネクタイは締めないしシャツはズボンからだらしなくでているし、ズボンのベルト位置もアフリカだかどこだかの若者の反骨精神に倣って固い頭には理解不可能な低い場所にあった。はれぼったい瞼からのぞく小さな黒目が決め手となって、どう見てもガラが悪い。彼は顔にかけた唯一なけなしの優等生小物である黒縁眼鏡を外し、上着のポケットに引っかける。
「万引きを見つかったから買います、じゃないんだ。反省して二度としてもらわないようにしないといけない」
「ああ、でもこれなんか、もう売り物にならないですよね」
一十が持ち上げたのはチョコレート。水たまりに落ちた食べ物は逆立ちしたって売れないし人に提供できない。チョコレートは包装紙のがふやけて、糊付け部分がゆるまりはがれていた。ふやけた包装紙から銀のアルミが覗いて瞳を灼く。老人がチョコレートに寸分の興味を見せて顔を寄せた瞬間を逃さず、一十は彼にチョコレート

を持たせた。老人の手から茉莉耶が解放される。一十はそっと茉莉耶を、彼女自身も気づかないような絶妙な力加減で俺の方に押した。一十の意図を解し、俺達は茉莉耶と老人の間に自分達の体で壁を作る。

「だから、弁償しないとまずいんじゃないですか？」

茉莉耶の鞄へ散らばった筆記用具を戻す。泥水をかぶって無惨な状態になっていた。もう、これでノートを取るのも問題を解くのも不可能だろう。改めて怒りがわく。今度の怒りは腹の底をじっくりと温め怒号の吐き気を催すものだった。丁寧に砂利や水分を拭う。ポケットから出したティッシュペーパーでは追いつかなかったから、手と制服の袖も使用した。無実の少女の持ち物をめちゃくちゃに壊しておいて、万引きをするだのしないだの、偉そうに説いて語る老人はやはり屑以下の生き物だ。汚れのひどいものは鞄の中に入れれば、無為に鞄を汚してしまうだろうと判断し、腕に抱える。水が染みた紙を抱くと、シャツを通して肺が濡れた。すっと冷たい。俺はその冷たさに悲しさを覚える。一十とやりとりをする老人の姿を、在ってはならない醜くおぞましい未来のように感じた。

「多田野」

小さく呼ぶ。一十の耳が、聞き届けた証拠にぴくりと動いた。それが、ピストルの発砲音。逃走の号笛。

「茉莉耶、走って」

耳元で願うと、茉莉耶も弾かれたように足を回転させた。彼女は本当に、愚鈍と言わねばならないほど、与えられた役割にみずみずしく順応する。

「あ、こら、待ちなさい！」

背を向けて遠ざかり始めた俺たちに反応し、初めて老人が金切り声を出した。胸のつかえが本の少し取れる。いいざまだ。万引き犯を取り逃がした事で、周りから百も千も責められろ。

俺たちは初冬の夜を、寒風を突っ切って走り抜ける。耳が冷えて痛い。耳から入り込んだ寒気が首の随を絡め取って痛い。今日の終

わりにあった出来事が余りにも未来を暗く占っていて心臓が痛い。だけど、これが恐らく、現実の一端なのだろう。振り返れば、息を切らしてかけてくる老人の姿があった。かぶっていた毛糸の帽子をはずし、手に持ち、必死に追いかていける。俺は嫌なものを見た気分で、忘れるために目を逸らした。

胸の奥がざわついている。不快に、だが、軽快に。不安を伴って。

「茉莉耶、もう少し速度上げれるか？」

「うん！」

「飛ばしますか！」

一十が泥水をまき散らしてジャンプする。俺は限界まで全身の筋肉をよじり、茉莉耶も息を詰めて走りのギアを上げた。ぐんぐんと老人が遠ざかり、一瞬にして人の群に飲まれていなくなる。

ほっとしたように、茉莉耶の頬に体温が戻った。

こうして逃げ出せた事で、俺はこのことに不満足ながらも溜飲を下げた。そのつもりだった。

†

2.

パートで忙しい一十の母親の代わりに食材と日用品を多田野家に運び、簡便な夕食を用意した後、俺は茉莉耶とも別れ日付変更線の迫った夜の町を歩いていた。首を絞めるマフラーをほどいてまき直し、紺のウールの内側に鼻先と耳を埋める。吐き出した息がマフラーを通して夜気に広がり、白く拡散して消える。道路には外灯が落ちるだけで人の気配はない。今日在った出来事を反芻し、俺は怒りに全身を総毛立たせ、寒さを払う身震いとともに彼方へ追いやった。

前方にバイクの振動するエンジン音を関知して瞼を上げる。帰宅経路上にある木造アパートに横づけるようにしてバイクは停車した。黄色いヘッドライトと赤いテールライトが濡れた地面に色を添えている。騎乗した人物がヘルメットを外すと、俺の瞼が驚きに見開かれた。

老人だ。スーパーで万引き犯を捕まえることを生業としている趣味の悪い男だ。彼はヘルメットをハンドルにかけエンジンを切る。バイクを押し、子供用自転車とママチャリの間に残された狭小なスペースにバイクを押し込んだ。自転車の停め方について荒い語気で悪態をつきながら、ヘルメットを小脇に抱える。横をのろのろとした歩みで通り過ぎながら、その動作をつぶさに眺めた。

「ちょっと、待ちなさい」

老人の声が俺に気づいて止まれと命じたが、俺はポケットに両手を突っ込んだのろくさとした足取りのまま、それを右耳から左耳へ投げ捨てた。老人が憤慨した足取りで追いかけてくる。彼の歩速にあわせて俺も少し歩くピッチを上げた。

「おい、待ちなさい。聞こえてるだろう」

百メートルも歩けば諦めてくれるかと思ったが、百メートルをすぎ二百メートルをすぎ、道を曲がって歩道橋を渡ってもついてくる。まるで足を止めない俺が駄目な人間であるかのように、彼の呼び止める声は語調と大きさを増して行く。しばらく自宅とは逆方向に歩いて逃げ続けたが、ついに赤信号に捕まってしまった。車の通りが多い国道。行き交う車は深夜帯、一トン越えのトラックが多く、おまけにかなりの速度を出している。途切れ目なく連なるトラックの合間を縫って合計八本の車線を渡るのは命がけの綱渡りに等しい。左右へ道を探したが、どちらも袋小路か道なき道を行く獣道で、そんなところを進んでまで逃げる気にはなれなかった。

「待ちなさいと何度言わせればわかるんだ？　待てという言葉の意味すら理解できないのか？」

ようやく俺へ手の届く距離まで近づいた老人は、荒い息をして唾をまき散らした。闇雲に歩いた結果足を何度もぬかるみに突っ込んでしまった俺は、靴の中が冷たく濡れて気持ち悪い感覚を覚えながら首だけを背後に向ける。老人の執念が得体の知れないものに思えて気味が悪かった。どうじに、いわれのない責めを受けているという事がどうしても受け入れられず、前歯で噛んだ下唇が疼くほどに腫れる。こんな老人の存在は意識から殺してしまい、適当にあしらっておけばいいのだろう。ちょっと我慢するだけ。そうすればこれ以上不愉快な思いもしないですむ。わかっていても、俺はどうしてもそれをすることができなかった。やろう試みようと、ここにくるまで何度も足を止めかけたが、そのたびふつふつと新しい怒りがわいてきて、体を動かさずにいられなかった。正当な理由で習い倉でも立ち止まっていただろうと思う。いくらでも頭を下げただろうと思う。だからこそ、俺は老人を許せなかったのかもしれない。

老人の手が俺の肩に触れ、強引に向き直らせた。

俺はむくれたような無表情のまま、彼を見下ろす。老人の瞳が国道を行く車のライトに当てられて、チカチカと瞬いた。

「離せよ」

俺の喉から出た低い声が、最優先事項の要求をする。
老人は逆らってか。両手で俺の肩を押さえ込んだ。
「さっきのことだが、ちょっとは反省したか？」
「反省？　何を？」
せせら笑いたい来もしたが、俺はポーカーフェイスを保ったままだった。おそらく、怒りが頂点を突破していたため、表現すべき感情が互いを押し合いへし合いしていたのだろう。俺の聴覚はそばを行くトラックから流れる等次をの音声を明瞭に聞き取り、資格は老人の額に浮いた染みやしわや浮き出た青筋をカメラよりも性格に抽出し、触覚は耳とつま先を凍らせる冷たい冬と、肩に掛かった老人の手の暑さを読みとっていた。五感が拡大し、逆に思考は次第に閉じて行く。一つの思考だけが脳を支配し、血液にのってぐるぐると全身を巡り始める。
「離せ」
さっきよりも、もっと低い声が出た。その低さは、俺の鼓膜すらたじろがせる。
「反省したんなら離してやる」
老人が嫌らしい笑みを浮かべて、俺をしたからのぞき込んだ。
「おれは心配なんだよ。あんたみたいな小がこれからの社会を担って行くのかと思うとねぇ。ほら、あの子も。いかにも子ども社会からすら落後した感じじゃないか」
背後を鳥獣料急のトラックが、高らかな暗く損をならして走り抜けた。俺たちに陰が落ち、視界が全くの闇に閉ざされる。
耳の中で、いつまでもその警笛が鳴り響いていた。
俺は去らない轟音を払うため、目を閉じ、首を振った。
足下で、パキパキと、凍った土が鳴る。
ゆっくりと、花びらが散るように、トラックの陰が薄れて消える。
見る力を取り戻した目で、俺は辺りを見回した。どこかで、異質な音を聞いた気がした。
鈴、の。

凛とした。
高らかな音が。
俺の肩に掛かっていた圧力が消えている。正面を確かめれば、驚いた顔で時を止めた老人が、虚空に飲まれるようにして消えていった。

3.

†

鈴の音が響く。

俺は低めの商業ビルが建ち並ぶ国道沿いを歩きながら、額からだらだらと冷や汗を流していた。喉が渇き、手の平が疼き、足は棒きれがごとく冷えている。ビルの窓は暗く、商店のシャッターは陰鬱に閉ざされ、広々とした八車線もある車道は更地並に空っぽで、俺の前にも後ろにも人の気配はない。俺の耳に届くのは、ヒステリックな自分の呼吸音と、一定の間隔を置いて聞こえる鈴の音。視界を、吐き出した息が白くこごって背後へ流れて行った。俺は息につられるように背後へ首を巡らす。外灯だけがポツポツと点り月すらない深遠な夜が何百メートルも彼方へ続いている。濃密な闇が収束する一点に、俺に対する氷のような憎悪と殺意がこもっているような気がした。

再び鈴の音がせき当てるように届き、俺はあてどもなく逃げ出す。

むしゃくしゃとした感情が体の内側で渦を巻いていた。断片的に何かを思い出す。「反省しろ」という言葉が何度も記憶の中で繰り返された。

ああ、そうだ。老人だ。

俺は、言われなき罪をかぶせられ、老人に追いかけられていたのだ。

苛立ちと焦燥がない交ぜになった感情の発端を見つけ、俺は長々と息を吐いた。走るようにして歩いていた足を止め、老人に「俺は反省する必要なんかない」と告げようとする。

よくよく考えれば、さっきこの世界は無人であることを確認したのだから、振り返っても老人の姿などないはずなのだが。

俺は乱暴に体の向きを逆転させ、予想外のものを目にし、喉をえくり、と動かした。唾液が湧かず乾燥した喉が苦しげに捩れる。
鈴が鳴った。俺をあざ笑うようにしゃらしゃらと軽やかに。
俺は目を凝らす。離れた位置にある人影を注視する。女性のようだった。柔らかそうなふくらはぎが左右を入れ替えつつこちらに近づいて来る。スカートの裾が、生臭い風にあおられて膨らむ。長い黒のストレートヘアがヌエの尾のようにたなびいた。
俺の知らない人の姿だった。
彼女はゆっくりと、だが安定した足取りで進んでいる。外灯の下を通る度、顔の造形の一つ、表情の雰囲気の一部でも伺いしれないかと思ったが、黒い影がべったりとその顔に落ちていて叶わない。
しゃらしゃらという微鳴が彼女の身から円球場に発せられていた。これもまた、鈴の音だと気付く。彼女が携えた長杖の上下への動きに合わせて響いているようだった。
俺はじっと彼女を見ている。彼女もまた正面を向いて、じっと俺の目を見ている。逸らすことなく、興味深げに、熱心に。
俺は息苦しい胸を押さえてその視線が持つ圧力に耐えた。甘い唾が奥歯の間から染み出る。会った事も見た事もないはずの少女なのに、なぜか狂おしいほどの親しみが胸を支配していた。彼女が俺を見ている。彼女が俺に関心を払っている。彼女は俺に何かを伝えようとしている。彼女は俺に、
笑いかける。
真っ暗なその顔に、白い亀裂が横断した。逆三日月型に割れ広がり、真っ白な歯列だけがケタケタと振動する。
ぞっとした。笑い声が慈愛に満ちて聞こえた。悲嘆に聞こえた。嘲笑に聞こえた。そして、無機物の振動に聞こえた。臓腑が収縮する。俺は背筋に大量の汗が流れ落ちるのを覚え、その不快なぬめりに背中を押される。地面に溜まった泥水へ足を突っ込み、俺は逃げ出した。
鈴の音が届く。徐々に、距離が縮まる。絶対的な意志を感じさせ

る速度で。
首に、冷たいものがふれた。
白銀に光る細く長い物が背後から突き出されている。骸骨の震動に似た笑い声が耳元で弾ける。
白銀が首に食い込んだ。それは鋭利な剣だった。
ゆっくりと剣が首の内奥へとずれて行く。
俺はあがいた。捕まれているマフラーを引き、少女を全身で突き放し、突き飛ばす。
これは、悪夢だ。きっと、悪い夢を見ているだけだ。あまりにも非現実的な妄想。ただの夢でしかないのなら、目を覚ますまで逃げ回るしかない。
俺は息の続く限り、足の持つ限り、全力で走り続けた。早く夢よ覚めろと念じながら。汗を散らし、腹筋の痛みに歯を食いしばり、だらしなく腕で空を掻いて。俺の念が通じたのか、少女はもう追ってこなかった。

02：赤ん坊の夢

†

これは夢だ。すぐにわかった。なぜなら、目の前に血まみれの人間が横たわっているからだ。

一メートルはあろうかと思われる大きな、しかし細身の剣で乳房を貫かれた女性。剣の塚には組み紐が結び付けられ、先に小さな鈴が、文字通り鈴なりにぶら下がっている。それらは、今まさに突き立てられたと言わんばかりにゆらゆらとわずかに渦を巻いている。しゃらしゃらと風に紛れるその音は物寂しく持ち主の消失を憂いていた。鈴の狭間を縫い落ちる赤い液体が、ぽたりぽたりと生々しく空に去る。滴は風に煽られ、微細な粒子となり、そのまま地に落ち着くことはない。粘っこく生臭い血のにおいだけを残して、大気と同化する。

女性の顔を直視することは出来なかった。直視することが怖い。その人が誰であるのかを知りたくない。寂しさだけが、悲しさだけが、歯痒さを知るどうしようもないこの感情だけが、後から後から現れて、鼻の奥を痛く塩辛くさせた。目を逸らしたまま彼女の臀部をなぞる。そこもまた剣で引き裂かれ、内蔵がこぼれ出ていた。しまいそびれた、鮮血を浴びて桃色の腸。もう彼女は生きてはいまい。腸を傷付けまいと細心の注意を払いながら指で摘み上げる。白濁した脂肪にまみれ、よくぬめり、指先だけでつまむには神経を必要とした。幾重にか重なった腸物の下にうごめく気配がある。血に濡れた肉塊が飛び出してきて自分の手を蹴り飛ばした。命の鳴動を受け止めて、このような状況にもかかわらず心が喜びに震える。ついえた命の代わりに芽吹いた命。両者の鮮明な対比に難しい意味もなく心が動かされた。奇跡のようなものを感じたのかもしれない。全く

失われたかに見えた未来が、新たな形で吹き返そうとしている。自分は薄い肉袋の内側から丁寧に赤ん坊を取り出した。顔面に付いた血を服の袖で拭き取る。口の奥に何かが詰まっているようだったので、背中を叩いた。血液混じりの透明な痰が飛び出して腸の間に消えた。

赤ん坊が泣く。

真っ赤な腕の中で体を震わせて全力で泣く。顔を歪め、手足を曲げて拳を握り、張り裂けんばかりに喉を腫らす。

周囲の状況を全く介さず、それどころか図太さすら感じさせる泣き声は、自身の存在と命を全力で主張していた。泣き声がびりびりと伝わり頬を波打たせる。

命の対比がさらに鮮度を増し、眩しさに目が眩んだ。命とは脈々と受け継がれて行くもので、決してどこか途絶えたりはしないものなのだろうか。言葉すら持たない赤ん坊を泣き叫ばせるものは、何とかして生き残りたいと言う必死の思い。だがそれは、母親の英気を無神経に吸い上げる寄生生物のようにも見えた。命の存在を赤ん坊が圧倒的な力でぐんぐんと周囲へ知らしめて行く一方で、母親の存在は血液共々儚く褪せて行く。赤ん坊の誕生が女性の存在を食いつぶしてしまう気がした。赤ん坊が生まれたことで、自分は彼女の死を悼みきれなかった気がした。

赤ん坊を心のどこかで恨んだ。

それは胸と記憶のどこかにちくりと刺さり、抜けない小骨となって理性と感情の間に残る。理性と感情の力関係にささやかな狂いをもたらす。

赤ん坊を捨て、剣に胸を貫かれた女性を抱き上げた。その首筋に顔を埋めてがむしゃらに泣く。

赤ん坊の声がわんわんと自分の意識を乱し続けていた。

03：紙切れの神様

†

「父さん」
呼ぶ声にはっと気付いて顔を上げた。
「朝から何やってるんだよ。台所が煙だらけじゃないか」
俺は珍しくエプロンなんかして台所に立つ原典に朝から不快な気持ちになった。顔をしかめ腕を組む。俺の横柄な態度に不快になるそぶりも、注意をする素振りも見せず、原点は決まり悪そうに首の後ろを掻いた。彼は骨ばって痩せた体躯をしている。顔も馬面よりに細長く、傍目には針金のように見える。いつも控えめで浮かれない物腰のせいもあって、年齢相応の威厳は微塵も備えていない。見た目の雰囲気だけでも彼を父親と慕うにはいろいろと抵抗があった。もう少し父親らしくすればいいのにと思った記憶だけがある。
「たまには朝ご飯でも作ってみようかと思ってな」
「なにそれ。まずいならいらないんだけど。ってか焦がしてんじゃん。どうすんのそれ」
「ああ、もうこれは捨てるしかないな」
原典はフライパンの中でくすぶる目玉焼きにため息を吐き付けた。ゴミ箱に丸ごと捨てている。原典は俺の父親だが普段ほとんど会話をしない。原典の帰宅時間はいつも八時きっかりで鬱陶しいくらいに早いのだが、すぐに自室へ閉じこもってしまう。息子の晩ご飯も滅多に用意したことがない。俺は小さい頃から自分で米を炊いて食事をこしらえて来た。そこらの主婦並みには料理を出来る自身がある。だから実の父親がそんな下らない料理の腕前だと情けなくなる。
「父さん、何で俺が父さんに日頃料理しなくていいって言ってるかわかってる？　フライパンちゃんと洗っといてよ」

「そうだな」
原典は骨張った顔をひっそりと俯けてたわしを握った。水道の蛇口をひねる。勢いよく水が飛び出す。水滴が流しのシンクを飛び出して周囲に淡い虹を作る。
炊飯器の中を覗いたら、ご飯が全くなかった。原典がご飯を無駄にしたのだと悟る。チャーハンでも作ろうかと思ったんだけどな、と言い訳がましく口を出してきた原典を無視して食パンをトースターにセットする。牛乳を温めてインスタントコーヒーを混ぜた。椅子につきトーストをかじる間、ずっと右足で貧乏揺すりをしていた。原典が近くにいるせいだろう。片時もくつろいだ気分になれない。朝特有のすがすがしさも、原典の駄目さ加減をフォロー出来ず卵の焦げたにおいと一緒によどんでいる。リビングから見える裏庭では、くしゃくしゃの洗濯物が物干し竿に揺れていた。皺も伸ばさず干したらしい。部屋の中央には掃除機が転がっている。朝から騒々しいと思ったら、家中の家事に手を付けていたのか。コーヒー牛乳を飲んでマグカップをテーブルにぶつけた。その物音に背後に立つ原典がびくりと肩を緊張させる。原典は最近俺の顔色をうかがっている節がある。俺の好物だろうと百グラム五千円もする牛肉を持ち帰って来たり、ハードもないのに流行りのゲームソフトを買って帰って来たり。押しつけがましい気遣いが俺の神経を逆撫でているとも知らずうっすらと酒の入った赤ら顔でそれらを冷蔵庫やら俺の部屋の前にやら置いておく。牛肉は近所の犬にくれてやったし、ソフトは叩き割って燃えるゴミと混ぜて捨てた。今更そういった行為をされてもただ煩わしいだけだと気付かないのだろうか。色々考えていたら、自分でいれたにも関わらずあまったるい牛乳のにおいで気分が悪くなった。朝のリズムを崩されたせいか食欲が湧かない。コーヒー牛乳だけは無理矢理飲み込んで歯を磨き、無言のまま家を出た。俺はあの家に一人暮らししている物と考えている。
いつも通りの風景がそこに広がっていた。
昨日見た物はやはり現実ではなかったのではないか。顎に指を添

え、俺は通学路を歩く。歩みに合わせ眼下を黄色い点字ブロックが流れ去る。全くリアリティのない光景だった。人にあふれていた街が例え一時とは言え無人に帰す事などあり得るはずがない。ましてや、見ず知らずの少女に殺されかけるなど。俺は自信の首に触れた。昨日の記憶と重なる辺りに、固まった皮膚の盛り上がりがある。糸のように細いかさぶた。夢にしか思えない光景が、現実味を帯び始め、心臓が勝手に速度を上げる。どういうわけか、俺は興奮していた。かさぶたを指の腹でなぞり、俺はマフラーを忘れたことに気付く。いつも制服の隣にかけておくマフラーだったのだが。

「要君、歩くの速いです。ちょっと待って下さい」

鞄を引かれ、俺は歩みを緩めた。名前を呼ばれたから。それだけの理由でぼんやりと振り返る。鼻の頭を火照らせ、真っ白いイヤーマフをした佐藤麻里弥がいた。眉をしかめ、おどおどとした上目遣いで辺りを伺っている。俺の腕にしがみつき、ちぢこませていた肩の力を抜いた。その怯えようは普段に比べてさらに大げさで、俺は安心させるために空いている方の手で彼女の頭を撫でてやる。

万引き犯と疑われたことをまだ気にしているのだろうと思った。

「要君、今日登校早いですね。もしかして今朝のニュースが原因ですか？」

「今朝のニュース？」

「ニュース、見なかったのですか？」

ポカリと口を開けて俺を見る。瞬きもしない。俺は無防備に開いた白い歯と歯の間に指を突っ込んでみたくなる。

「俺だってたまには見ないよ。今朝は親父が家事をやっててさ。することないからさっさと出てきたんだよな」

茉莉耶がニュースを毎朝確認している事の方が俺にとっては珍事実だ。彼女はあまり世間に対して関心を向けているような性格をしていない。

「要君のお父さんが？　よかったですね」

「ああ。いいことだとは俺は思えないけどな。で？　ニュースって

何だ？」
「あのですね」
表情を曇らせて彼女は前方を真っ直ぐ指さした。誘導に従い茉莉耶から正面へ視線を移動させる。
「この先の三叉路でですね、事件があったんですけど、それがですね、ひどい事件だってキャスターの人が言ってまして、あたしもびっくりしちゃったんですけど、一番びっくりしたのはそこじゃなくて、ええと、キャスターの人が驚いたのは事件の凄惨さで、あたしはそうじゃなくて、事件が」
「ああ、うん、そうか」
なかなか肝心部分にたどり着かない説明を適当に受け流す。あまり事件に近づきたそうにない茉莉耶を引きずるようにして歩く。俺の好奇心が先へ急ぐのか、この先の三叉路であったという事件が茉莉耶の接近を阻むのか、俺はその両方だろうと見当をつける。事件と聞き、喉が渇いて掠れた音を立てている。角を曲がってみればその先に二重三重と人垣が出来ていて、彼らが注目しているものが何なのか知る事は難しい。人垣は通学や通勤途中に立ち止まってみたという風体のスーツ姿や学制服姿で構築されている。どうにか人をかき退け事件の一端でもうかがい知れないかと彼らの背後をぐるぐると歩いた。隙間を見つけて方から割り込む。俺の横で、茉莉耶が呟いた。
「あ、そうか、要君はニュースを見たからこっちの道を歩いてるわけじゃないんですね」
「え？」
俺は茉莉耶がぶら下がる左腕に顔を転じる。その時、思いがけず彼女を押し退けるようにして野次馬の群がなだれ、俺達は円の中央に放り出された。空間が開け、力のやり場を失った足はたたらを踏む。
突発的な頭痛が襲って、視界が電撃に打たれたように割れた。鼓膜が急激な気圧差を感じたみたいに痛む。

既視感。
月のない夜道が朝日に照らされた現場と二重写しになる。ピントのぼけた二枚の写真。ゆっくりと重なって、くっきりとした一枚の絵になった。
俺はこの風景をまざまざと覚えている。
昨日俺は、ここに来たのだ。
「ああ、こら駄目だよ入ってきちゃあ。そのガードレールよりこっち側は立ち入り禁止。まだ鑑識の仕事が終わってないから」
寒々しい紺色の制服を着た警察官が白い手袋をはめた手で俺の肩を押す。後ろ髪を引かれる思いで首だけを巡らしざっと調べる。ドラマの中でしか見たことのない格好をした人たちが忙しく動き回る路上。何か物騒な事件があった気配。番号のかかれた札。白墨に切り取られた路面。風が吹き、ブルーシートや人々の衣服がばたばたと大げさな音を立てる。
なにがあったのだろう。
俺の疑問に答えるように、誰かが噂話をしている。
「頭と体がばらばらに転がってたってホントー？　こっからじゃ何も見えない」
「本当らしいよ。ほら、あっちの歩道迂回路出来てるでしょ。あそこ、まだ血がびっしりこびりついてるんだって」
「なあ、食い千切ったみたいな跡があったって言ってただろ。あれ、野犬とかじゃないらしいぜ」
「知ってる知ってる。噛み口が小さいしあまり鋭くないんだろ。人間の線が濃厚だとか言ってさ。マジだったらマジ気違いだよな」
茉莉耶の肩を押し、断片的な情報の狭間に潜り込む。俺はまだ事件の内容をほとんど把握せずに、人垣を抜けた。
頭部と胴体がばらばらの、人喰い殺人。
またしても、冗談みたいにファンタジーな。
だいぶ離れた場所まで歩いた時、ようやく興奮が冷めたのか、茉莉耶が弱々しい笑いを浮かべて俺の機嫌を取るように言う。

「い、嫌な物見ちゃいましたね」
俺の手を握る彼女の手は震えていた。
通学路へと戻るスクランブル交差点で、赤信号に足止めを食らう。向かいにそびえるビルを見上げた。壁面に、テレビスクリーンが取り付けられている。朝のニュースが報道されていた。スタジオから画面が切り替わり、見知った風景が映る。さっきの殺人現場をカメラが舐めるように撮影していた。
「十二月×日未明、××県××市の路上で、死体が発見されました。被害者は××さん、七十二歳。頭部と胴体を何物かによって切り離された姿で見つかりました。現場は車の往来が激しい場所ですが夜間は人通りが少なく、目撃者は今のところいないということです。また死亡の直接の原因は頭部と胴体の切断であり、切断のための凶器はあまり鋭利でない刃物だろうと見られています。野犬に噛まれたものと近い状態の切り口であること、またその切り口に見受けられる歯形が人間の歯に似ていることから、警察は殺人事件の方向で慎重に捜査をしていくとのことです」
画面が現場を緩慢に右から左へ流れ、頭のない死体を映し出す。俺はぎょっとして目を釘付けた。瞼が限界まで開き、焦点をテレビ画面に釘付ける。頭部と胴体の切断面からは、生々しい血液が流れ、地面をどす黒く濡らしている。細くしわがれ老いた体が、人間以外のカマキリやバッタのように節だって土臭い虫のように見えた。ぎゅ、と上着の胸を握る。心臓が体の中から肺を押し、皮膚を押し、握った手を押す。カメラはそのまま遠方に向けてズームし、道路の反対側に転がる休憩の物質を大写しにした。かっと見開かれた目が俺を見る。半端に開いて口腔をさらす唇が、今にも何かを喋りたそうに感じられた。たるんだ頬肉、染みの浮いた額。
首を切り離され、路傍で無惨な命の引き取り方をしたのは、俺が昨日遭遇した老人だった。
「ほら、あの人です」
茉莉耶が腕を伸ばしてスクリーンを示す。画面はスタジオに戻り、

若いニュースキャスターの隣に引き伸ばされた被害者の写真が合成されていた。記憶より幾分若い老人が無表情に町を睥睨している。その目が俺を捕まえて、反省しろといった気がした。

「行こう。遅刻する」

老人を刺す茉莉耶の手首を強引な力で自分の元へ引き、手を握り、俺は先立って足を動かす。事件の毒気に当てられて彼女は酷く青ざめ今にも吐きそうなほど沈んだ顔色をしていたが、俺も自分が彼女と似たような顔色をしていただろう。さっさと事件から離れて温かな教室に逃げ込みたいと思う。冬の風がその冷たさで耳を切り、鼻を切り、首を切る。知っている人間があのような死に方をするということは、例え関係が浅かろうと悪かろうと気分の悪いものだと知った。握り有った手のひらの間だけが気付けるように温かい。

だが俺達は、逃げたその先で事件が待ち伏せ強引に俺達に絡んでくるだろうとは予想だにしなかった。

†

2.

どこの学校にも、七不思議はある。だいたいが芝生青さに作られたおとぎ話で俺はそれを益にならない遊びと心の内で称していたが、俺の通うD高校にもそのたぐいの物はあった。曰く、何年かに一度転校してくる少女の話。全くそれは毒にも薬にもなりはしない内容。だが、転校生というキーワードが含まれているおかげで、この噂話はもっともポピュラーな地位を獲得していた。新学期が始まる度に誰かの口先からそれとなく教室に浮上するためだ。特に、実際に転入生があるクラスでは人キワの盛り上がりを見せた。ただ、その噂話が学期半ばに思い起こされる事は滅多にない。

平穏無事を求めて俺と茉莉耶が教室の扉を開ければ、そこは今朝方の事件の話題ともうひとつ、新しく来るらしい転校生の話題で破裂しそうになっていた。皆が皆生き生きとした表情で何かを話している。耳を傾ける側もむずむずと唇をうごめかしていた。俺は最初彼らが事件の事に興奮しているのだろうと考え、その不謹慎さにうんざりしかけたが、どうやら何か違うらしいと勘づく。そうであったにしても教室内に満ちるハレの日のように不安定な騒々しさは今の俺の気に障った。

最前列の席に座る。窓から二列目の席。隣の一番窓際の席は茉莉耶が使う。彼女もいつもと違う雰囲気の教室に落ち着かないのだろう、変化の根拠を求めて、椅子に座り机に置いた鞄に両手を添えたまま、俺の目を見て説明を求めて来る。ちょっと待ってという代わりに、俺は右の手のひらを彼女に突き出す。真後ろに席を持つ多田野一十の肩を叩く。彼との会話にはほとんどあうんの呼吸というべきものが存在する。

「多田野、何の話してんだ？」
「転校生が来るって」
「こんな時期に？」
「らしいよ」
表面に光沢感がある薄紙を熱心に二つ折りしていた多田野一十が眼鏡のブリッジを持ち上げて肩をすくめる。黒いセルフレーム眼鏡を外し、思い切りよく伸びをした。うーん、と唸る。伸ばしっぱなしの髪が肩に触れた。特別手入れしていないためぼさぼさと痛んでいる。俺は彼が意欲的に取り組んでいた作業内容を一瞥し、俺は鼻でため息をつく。彼の口からたびたび飛び出す何とかという新興宗教のパンフレットだった。彼の母親が熱心な信者だと言うから、その手伝いで折り込みチラシを作らされているのだろう。
「おとぎ話が本当になりそうだからじゃねえの？　どうも鈴木センセエと話してたらしいぜ、その子。確かに噂通りの長い黒髪の美少女だったし。オレも下駄箱で職員室の方向訊かれた時、綺麗な子だなとは思ったんだけど」
頭の回転が速いと言うよりただせっかちなだけだろう、結論から話す一十の話を整理すると、俺のクラスに転入生が来るかもしれないらしい。それも、D高校生なら大半の者が待望する噂通りの容姿をひっさげた少女。長い黒髪の美少女。噂の中で彼女の卒業写真は年度をまたいで何枚もあり、同じ名前で同じ顔をしてアルバムに収められているという。親子と考えるには顔の相似点は多すぎて、年の差は近すぎる。彼女の美貌に心を奪われる生徒の数は計り知れず、彼女に心酔したあげく命を捧げる者までいるという。名前は常に名主ミナ。名主の権兵衛がなまって名無しの権兵衛になったというから、もしかしたらミナという名前も皆のもじりでしかないかも知れない。山田花子と変わらない存在感を放っている。どれもこれもテンプレート的で、数奇な実話に多量の尾ひれが付いてしまった感がきつく臭うD高校の七不思議の一つ。聞きかじった内容をざっと脳内復習して整頓し、茉莉耶に伝えた。彼女は目を丸くして理解の意

を示す。こくりと頭が縦に揺れる。
「多田野、お前転校生と会話したんだろ？　あまり興味ないのか？」
「あるっちゃあるけど、ま、そのうち正確なことはわかるでしょ。後十二分三十三秒。それよりこっち手伝ってくれね？　今日の昼までに仕上げてくれって頼まれたのよ。人手三倍でオレが三人」
一十は机に下げた紙袋から紙束を出し、自身と俺、茉莉耶の机の上に三等分する。紙の角と角を合わせて丁寧に折るよう指導を受けた俺達は、断る理由もなく付き合う。
「このビラ、何に使うんだ？」
「ティッシュに同封して配布すんの」
「バイト雇えよ」
「信徒がやれば安く上がるだろ。家事手伝いだよ家事手伝い」
緑味の強いベージュの背景に、うさんくさい深青色をした十字架のロゴ。灰黄色の読みやすい文字で書かれたコピーが嫌でも目に入った。黙々と指を動かすだけの作業に飽きてそれを読む。
――捨ててしまう前に考えて下さい。
生きる事の意味を考え続けて下さい。
生きる事は尊いものです。
たった一つだけのものです。
捨てたら二度と拾えません。
結論を急ぐ必要はありません。
もう一度よく考えてみて下さい。
「捨てる神あれば拾う神ありって事か？　ティッシュと抱き合わせで？　ただのブラックジョークだろ」
吹き出す俺に、一十は唇の片端を持ち上げてにやりとほくそ笑む。言いたい事があるのにうまく理解されない事を確信している時にする彼の癖だった。俺は少し鼻白む。
「それ、うちの南無阿弥陀仏」
「これ唱えれば救われんのか？」
「オレらがね」

折ったビラを将棋のように積み上げて、俺は心配げな顔を作った。
「お前、言ったら悪いけど、最近毒されて来てないか」
今度は一十が気を悪くする番だ。んなことねぇって、と折り目をつけながら口を尖らせる。声が低く、目は半眼になる。オレはな、と次の句を次いだ所で十二分三十三秒経過し、ホームルーム開始のチャイムが鳴り響いた。時間に正確な我らが鈴木先生が待ってましたとばかりに廊下から入場する。食べてないのに太って仕方がない嘆く老人に連れられて、話の種が現れた。転校生を噂通り凛と伸ばした姿勢に絵に描いたような大和撫子だろうと想像していた俺は、いささか肩すかしを食らう。今時流行りの量産型アイドルのような少女だった。高嶺の花かと思ったら、人並み以上の親しみやすさを備えている。悪く言えば庶民的だった。けれども、彼女が美少女である事は間違いない。どこを探しても欠点の見当たらない均整の取れた顔貌に、リカちゃん人形を少しだけ発育よくしたようなスタイル。ほどよく肉の付いた形のいい長い足の踵を合わせ、彼女はキラキラとした瞳をクラスにばらまいた。
「学期の半ばだが、私達のクラスにもう一人生徒が増える事になった。親の転勤だそうだ。名前は」
そこで鈴木老師は言いよどむように語尾を濁らせる。一瞬真顔になる。黒板に向き直った彼はチョークを握る際小さくガッツポーズを取って気合いを入れる。最前列で頬杖をつきながら俺はそれを眺めている。カツカツと小気味よい音が流れ、背後で全生徒が息を呑む空気の停滞があった。パラッと砕けたチョークがリノリウムに落ちる。俺は黒板の文字を読み、頬杖から顔を浮かせた。
「彼女は名主ミナさんです。みんな、名主さんが困っていたら、困っていそうだったら、助けてあげるように」
わっと教室中が湧いた。

3.

†

名主ミナはよく調教された笑顔を顔面に張り付かせていた。悪い意味ではなくて、不運に会しても心を折られない芯の強さを持った、強靱な笑顔。彼女は新しいクラスとの出会いが嬉しくてたまらないらしく、よろしくお願いしますとお辞儀した時勢いよく髪が跳ねさせた。窓際の一番後ろの席を鈴木先生は彼女に指定する。彼女が俺のの横を通る時、しっかりと互いの目があったような気がした。友好的な笑顔の中にあって異質な、だからこそ胃袋がただれそうなほど強調される、敵対的な視線。すぐに彼女は目をそらしたが、俺は頬杖をついたままその背中をじっと目だけで追っていた。視線の意味を考えていた。

「ね、ちょっといい？」

昼休み。学食に向かおうと財布を取り出していると、ミナが俺の前に立つ。

「何？　校内案内？　学食なら今から俺たち行くけど、一緒に行く？」

「ありがと。校内案内はいらない」

顔がくしゃくしゃになる寸前の笑顔で彼女は首を振る。唇が常に弓形に持ち上がっている。

「勘違いだったらごめんね。さっき私を睨んでなかった？」

「睨む？」

朝礼での事が思い出される。

「睨んでた、俺？」

「自己紹介の時、下からずっと。だからもしかしたらどこかで悪い事してしまったのかもって」

「ああそれで、ここ歩く時も俺見てたんだな。別に睨んでないよ。眠たかっただけ」
あくびをして見せる振りをして俺は舌打ちする。どうにも口実臭かった。
「よかったあ」
胸の前で固めていた拳を弛緩させ、安堵を示す。作り物めいた、行き過ぎる寸前の笑顔が自然な柔らかさを取り戻した。机に両手をつき、俺へ身を乗り出す。彼女の肩から長い髪が一房しなやかな弧を描いて落ちた。俺は思わず身を引く。ミナの唇が再び景気のよい弓なりになっている。
「ね、さっき面白い話聞いちゃった。首なし死体って何？　どんな事件？」
ほら来た。俺は一十と顔を見合わせる。一十は困ったみたいにへらりと笑った。彼が仕方ないなという表情をすると、空気が軽くなったような気がする。一十は清涼飲料水だ。彼の傍にいると鬱屈した気分も簡単にすぐれる。それはおそらく、俺が彼の人の良さと人を見る目を信用しているからだろう。
「俺は聞いたことのない事件だよ。その話は食前に向かないから食べた後にしよう。名主さんはお弁当？」
皆は首を振る。
「何かパンでも買う予定」
お弁当派の茉里耶と一十を同伴に、俺は魚定食をミナはカツ丼を携えて長テーブルに向かい合った。まずは湯呑みに入れたそれぞれの飲み物を口に含む。
「俺、朝のニュースちゃんと見なかったから詳しく知らないんだよな。多田野は？」
「無理。オレんち、今テレビ映らない。佐藤さんは見た？」
「み、見た、のは見たですけど」
皆の視線が集中する中、茉莉耶は歯切れ悪く目線を逸らす。
「茉莉耶」

ミルクキャンディの包みをちらつかせると、顔を赤くしわずかに眉をひそめた。お菓子で扱われたのが屈辱的だったのだろう。それでもしぶしぶと口を動かし始める。やはり茉莉耶の説明は要領を得ず、所々強靱な人的情報網を持つ一十口を挟まれ、伝達内容に補足と要約をされてしまう。説明をするに従って茉莉耶の顔色は羞恥に赤らみ瞳が行き場を求めてうろつき始めた。大任を仰せつかった事とそれを全く果たせない事に精神が磨耗して行くらしい。だが残念ながら、茉莉耶の自己肯定感と引き替えに得た情報は、現段階では事件のことはほとんど解明されていないと言うぱっとしない物だった。情報の大半が今朝の一連の出来事の枠をはみ出ない。

「どうも、不思議だって何度も繰り返してたんですが、生きながら食べられちゃった感じなんだそうです」

「早く犯人捕まると良いな」

言えば、涙が溢れそうな目で茉莉耶は頷く。ミナがどんぶりに箸を置いて拍手した。

「すごい！　ありがとう。ものすごく興味深い事件ね」

「目が生き生きしてますね、名主ミナさん」

「だってこんなの滅多にない話でしょう」

「滅多にないって言うよりまず、日本っぽくないよねえ。アメリカとかヨーロッパの田舎村でひっそりこっそり起きてそうな事件」

言いながら一十は大きな口でポテトサラダを咀嚼した。ほとんど何も食べる事が出来ていないのは茉莉耶だけ。じっと卵焼きを箸でほぐして炒り卵を量産している。ミナはどんぶりについたご飯粒を丁寧に取り除き、茉莉耶の陰気っぷりをひと睨みしてから突然、俺に鼻先を向けた。

「どうして犯人は人を食べたのか、気にならない？」

「別に。食べたかどうかもまだはっきりしてないんだろ」

「食べたと仮定しての話よ」

「仮定を二乗するのか？　面倒くせえ」

「想像力が足りないっ」

「痛い、箸で耳を摘むな」
「亜種、想像することは人類を救うんだぞ」
「多田野、それ意味わかんねーから」
眼鏡を外し両手を広げ、イマジン、と歌いだした馬鹿を無視して、ミナは、亜種君だったらわかると思ったのにな、と残念そうに箸をそろえた。期待はずれだと言いたげにため息を繰り返す。
俺がわかる分けないだろ、と言いたい気持ちを飲み込む。団子が喉に詰まったような消化不良にコツコツと机を叩いた。茉莉耶が俺の感情を察して水が入った湯呑みを差し出して来る。一気に飲み干して喉の通りを改善した。
「犯人でも捕まえる気なのか？」
右腕をテーブルに、左手を膝に当てミナへ顔を突き出す。鏡合わせのように彼女も俺と角をつき合わせ、唇を突き出して大げさに頷いた。
「そうよ」
「マジでか？」
「大真面目よ。亜種君には理解できない話でしょうけど」
「理解なら出来る」
「本当に理解できる？」
「ああ」
売られた喧嘩を買い立てる勢いで肯定した俺の右手を、ミナが両手で挟んで持ち上げた。
「じゃあ、一緒に捕まえよ」
「は？」
拝む形で捕らえられた俺の右手は堅固にその場を動こうとしない。俺はミナの発言の妥当性を求めて首を巡らしたが、苦笑いする一十と頭を懸命に横へ振っている茉莉耶しか見当たらなかった。俺たちは三人とも同じ言葉を聞いて、三人とも非現実的だと考えているらしい。
だが俺は、日常を破綻させかねない申し出を断りたいと思えなか

った。受け入れたいと願っていた。彼女の手の内から自身を引き抜こうとしたが、痺れたように力が入らずかなわなかった。ミナの手が俺の手に絡まる。彼女は一心に俺だけを見定めていて、一十や茉莉耶に関心を向けない。ミナの期待は俺だけにかかっているのがわかった。彼女に見つめられると愉快になる。自分が赤面していることは上昇し続ける体温から知れる。茉莉耶が俺の腕にしがみついて来る時のような収まりの良さとこの感覚は酷似している。

「それともやっぱり、理解してもらえないの？」

彼女の瞳から期待が消えて、がっかりと切り捨てる冷たさが宿った。俺の体温も一気に冷める。足下に開いたブラックホールに落下しそうになって、慌ててミナの手にしがみついた。彼女の手が俺を手放す寸前にその指先を摘む形になる。

「協力する」

撤去されたミナの笑顔が、徐々に俺の前へ再生する。ミナと手と手を握り合う。

「ありがとう」

とっても嬉しい。

俺の首に抱きついてミナは囁いた。

†

4.

「危険、だと思う」
夕日が射し込む図書館で、俺の隣に座った茉莉耶が意見した。いつもは怯えているかぼんやりと弛んでいるかどちらかしかしない彼女の表情筋が今は引き締まっている。細長いテーブルに今朝の新聞を置いて、彼女は背筋を伸ばす。両手は拳にして膝でスカートにしわを作っていた。
「危険なのは言われるまでもなくわかってるさ。でも危険だからって避けるわけには行かない。これは俺がやらないといけないことだ」
言いつつその裏に潜むヒロイズムに自分で背筋が粟立つ。
「どうしてですか？　どうして警察に任せておけないんですか？」
「警察は警察でやればいい。警察を信用してないわけじゃない。きっと俺より先に犯人に行き当たるだろうな」
「じゃあ、どうしてわざわざ危険なことをするのですか？」
茉莉耶の目線が俺からテーブルの上へずれる。追いかければ俺の人差し指がコツコツとベニヤ板を弾いていた。規則的なその上下運動を、俺たちはしばらく無言で見守る。いい加減キツツキ音が耳につき始めうんざりした気分になり、俺はもう片方の手で静かに暴れ続ける手を押さえつけた。
「どうしてかって、俺が聞きたいよ」
両手を額に押しつけ、俺は頭から言葉を絞り出す。ずっと泣き続けた後のように鼻の奥が塩辛く耳の奥がひりひりとして重たい。茉莉耶は黙って俺を見ている。酷く無表情だったが、それは彼女の感情がオーバーヒートしている証だった。彼女がその状態に陥ると、俺は、俺が彼女を支えなくてどうする、と重たい冷静さを取り戻す。

現実感が皮膚感触として復活する。俺が取り乱している様が、一番彼女の心理的負担になるだろう事ぐらい重々承知しているのだ。いつまでも答えを引き延ばしている事が良くないことだと言う事も。ガラガラと干上がっていた喉が潤いを持ち、俺はまともに声を出せるようになる。

「名主さんが俺を巻き込もうとした時、正直腹が立った。茉莉耶が思ってる通り、犯人探しなんてくだらない。幼稚なことだ。どうしてそんな低次元な物事にかかずらわらされなければいけない？　そう思った。全くふざけてる」

「低次元……ううん、とても危険だと思う」

光の射さないうつろな瞳のまま、茉莉耶は首を振った。腹部をかばうように両手を添え、心持ち首を傾げて俺へ目を合わす。

「でも、要君は」

「危険って程じゃないだろ。そんな深入りしなければ」

「そう、かもですね」

「あいつの目が俺に言ったんだ、期待に応えてくれないのか？　とんだ見込み違いだったなってさ」

「そんなことを？」

俺は疑問を掲げる茉莉耶にしっかりと頷いて見せた。

「間違いなく言った」

わからないかな、と俺は鞄の中からファイルを出し、その中かから帯状の紙を出した。しわを伸ばし数字が読み取れるようにする。

「成績表？」

茉莉耶が不思議そうに覗き込む。

「知ってるだろ、俺の成績はだいたい一位だ。それに」

「すごい、ほとんど満点ですね」

「そう」

俺は悲痛な気持ちでそれら、数字の群を追いかける。

「もう後がないんだ」

茉莉耶の手から成績表を一つ抜き取ってビリビリと破いた。家に

置いておくことは怖くて、誰かに見つかったらと思うと指が震えて、見つかった後の想像に思考が乗っ取られてなにもてにつかなくなってしまうから、仕方なくいつも持ち歩いていた。保管場所のない紙切れだから、いつか、こうやって切り裂かれる運命だったのだと思う。

「俺の前には誰もいないし、俺が稼いでのばせる点数もたかがしれてる。俺はこの学校にいる限りこれ以上の自分にはなれないし、ここから出て行くことはまだ出来ない」

一枚一枚小さな小さな紙片に変形させていく。茉莉耶が腕にしがみついてきて、その行為は断念された。彼女の小さな頭頂に頬を付けると、温もりが伝わって俺の体を温める。

「寒くないか？」

訊けば首を振って否定する。脱いだ上着を肩に掛けてやり、俺は中途になっていた言葉を継いだ。

「出来ないようなことをやって、それが出来るって証明してみたいんだ。俺の父さんは息子の成績にも学校生活にも興味なかったけど、あいつは興味持ってるだろ？　あいつが一番犯人捕まえたがってるだろ？　だからさ、あいつじゃなくて俺が犯人を捕まえたいんだ」

「捕まえたらきっと名主さんは大喜びしますね。とても嬉しいですよね」

茉莉耶は精密に俺の心をくみ取って見せた。

犯人を捕まえた時のミナの姿を想像したのか、彼女はは小さく笑う。茉莉耶の手がゆっくりと持ち上がって俺の顔を、目鼻の位置を確かめるように触れる。瞼を幾度もなぞり、眉を内から外へ跳ね上げるようにたどった。

「要君」

「ん？」

「あたしも一緒に捕まえます」

「茉莉耶も？」

「はい」

俺は驚いて茉莉耶から身を離してその表情を確かめる。確信を持って彼女は頷いた。俺は彼女がそれほどにまで凛々しい表情をしているのを見たことがない。呆気にとられて自身の瞼を持ち上げる。

「それはいいな」

沸き立った気持ちのまま茉莉耶の温かな首筋に手を回し、彼女の唇に自分の唇を重ねる。苦しかったのか、小さなうめき声を上げた。

「あたしは、要君がやると決めたことは絶対お手伝いします。反対なんかしません」

息を整えながら茉莉耶が言うから、俺はやっぱり不思議な気持ちになる。何でも？　と訊くと何でも、と答える。どんなに危険でも？　危険でも。どんなにバカなことでも？　どんなにバカなことでも。次第に愉快になってきて思い付く言葉を余さず並べ列挙し問いただし合う。何でもかんでもオウム返しする茉莉耶がおかしくて彼女が繰り返せば繰り返すほど愛おしさが降り積もる。図書館を暖める空調のタービンが静かに震えている。ぐらぐらと不安定に膨らんでいた気持ちがいつの間にか落ち着いて、俺は眠気を覚え出している。小さな子供のようだと考え、なぜここまで安心して平和な気分になれるのだろうと疑問になる。茉莉耶の肩に腕を回し、しがみつくように抱き寄せた。

「眠い」

「少し、眠りますか？」

俺は彼女の首から立ち上る甘い匂いを、横隔膜をいっぱいに引き下げて吸い込んで、うん、とくぐもった返事をする。茉莉耶の手が俺の背中と頭を支える。彼女の心臓と呼吸が不規則に速まり、首を巡る動脈が破裂しそうに伸縮し大きな音を立てる。だが彼女は無言を保ち、何でもないかのように俺の頭髪を指ですかす。茉莉耶自身も俺にやや体重を預けるように頭を傾ける。俺は彼女の心臓の音を聴きながら瞼から力を抜き、呼吸を深くゆっくりしたものへと移ろわせて行った。

「大丈夫です。あたしは絶対、あたしは必ず要君の事を……」

不動の眠りが俺たちにのしかかり、意識がすり潰され、闇になる。

０４：化け物の夢

†

夢。

またこの夢だ。

最近眠りにつく度、必ずこの世界に来る。赤くて、真っ暗で、冷たくて、生臭い、死のにおいで充溢したこの世界に。

足下には知らない人間の死体。靴の先がほつれた髪に絡まって嫌な気持ちになる。毎日丁寧に磨いている靴が血を浴びてまだらに汚れる。空には真っ赤な満月がのさばり、心の中には絶望だけがとぐろを巻いている。見てはいけないものを見てしまった。知ってはいけないことを知ってしまった。その場にしゃがみ込み、自身の眼球がよけいなものを移さないように身を丸める。耳を塞ぎ、頭を抱え、意識を放逐しようと努めた。

何も考えたくない。何も聞きたくない。何も思いたくない。息すらしたくない。生きているのが嫌だ。今ここに横たわる死体のように、ただこのまま深く深く眠ってしまいたい。そう切望する程の密度の高い絶望が、内側からこの身体を喰らい尽くす。

少女が、所構わず怒り出したいくらいによく知っている少女が、ここに転がる人間を死体にしてしまった。この人間の喉笛を噛み、ヒトとは思えない程の顎力で、聞いたこともないような音を発してあっけなく。

彼女が行為に及んだとき、泣き出したいような気持ちだった。愛して大切に見守ってきたものが不意の災害に壊されるような、大衆の前で辱められ汚されるような、残酷で酷薄な現実。自分の無力さは呪うしかなく、いたたまれなさは離し飼われる。耳をふさぐことすら出来ず、見知らぬ人間が首を切り取られ分断されてしまうのを

ただ呆然と見つめていた。彼女の長い髪が血塗れて行くのを止める手だてはなかった。

ふ、と。

何かが瞼の裏でチカチカ弱々しく光る。体を丸め怯えていることが、とてももったいないような気持ちが心のどこかで光を発した。立ち止まっている事への焦りが頭の上から両手をどけさせる。

夜空を飲み込むほどに大きな月を見る。彼女が化け物だったことを知っているのは自分だけだと気付いたら、ここで惚けている場合ではないように思えた。

暗黒の闇に飲み込まれすべてを忘れ去りたいとだけ考えていたはずなのに。

彼女が人を喰らう、その惨劇を目の当たりにする中。今は動かねばならぬと言う気持ちが必死の雄叫びを上げ、動けない筋肉が解放を叫ぶ無力感の中。多分、彼女を守りたい、絶対にかばいたい、元の生活に送り戻してあげたいという願望が、欲望が、意志が、芽生えたのだろう。彼女がこれ以上化け物になっていくことを止められるのは自分だけだ。彼女を何も知らない人間たちから隠してあげられるのは自分だけだ、と。

そうだ、何も不幸なんかではない。自分がが彼女を彼女だと信じているならば。信じるだけで日常はいともたやすく取り戻され、保たれる。

絶望してばかりではこの思いも、彼女も、何一つとして守れないだろう。

引きずるようにして足を前へ運ぶ。

今見ている世界が所詮夢でしかないことを知っていても、諦めるつもりは毛頭なかった。

そしてこれは、そう、犯人捜しから始まったこの顛末は、最初は、ただの遊びで暇つぶしだったはずなのだ。

05：不幸ごっこ

†

「ただいま」

玄関の方で原典の声がして、俺はスタンドの電気をつけた。寝てしまっていたらしい。図書館でも充分寝た後だというのに、どうかしている。時計を見れば原典の帰宅から予想した時間よりずいぶん遅い。十時を回っていた。原典が八時前後に帰宅しないなどと言うことはそうそうない。不思議に思いつつも疑問を解決する根拠が特にあるでもないため、途中で放置していた作業に戻る。通信教育の添削済みプリントを見返す。どこかの誰かが書き込んだ赤い文字を指でたどる。俺が通う高校レベルと比較すればかなり背伸びしたランクの教材を選んでいたから、指摘されるべき間違いはそれなりにあった。通信教育だと全国区で成績は集積され上位から並べられるから、成績トップの座は生半可ではたどり着けない。俺の上にはまだ何人もいる。居並ぶ強敵たちを踏み越えることが今の目標だった。原典は息子が通信教育を受講していることすら知らないかもしれない。彼は家計に対しても無頓着だった。死んだ魚のような生気のない虚ろな表情で、ただ日々のノルマをこなしてさえいればいいと考えているような人間だ。何も発展的なことをしようとしない。静かに死んだように生きている。だから、俺は顔を見ることすら気が滅入りそうで嫌煙している。親子として互いに伝達すべき事もあるのかもしれないが、一切の言葉は交わされない。いや、別に彼から俺に言うべき事は何もないのだろう。俺が彼に言うべきことがないのと動揺に。俺は幼い頃の記憶を呼び起こしてしまい、だが、記憶はそれに連なって何らかの感情が浮上する前にずたずたに引き裂いて抹消した。過去の努力など。原典にヒトの子らしくかまってもらお

うとした創意工夫など。両手で頬を張って意識を切り替え、シャーペンの先で赤い文字を追いかける。些細な、それこそ文字の読みにくさなどと言う些末な事柄にまで目を光らせている誰かの存在と熱量を感じる。赤い文字を追いかける目に平生を逸脱した集中力が宿る。腹を空かせた脳味噌が知識を思考をと涎を垂らしているのがわかる。シャーペンを滑らせて間違いを正して行く。

以前、俺に重大な指摘をした小学校の先生がいた。その人は子どもが大好きで教師になったと言う事を惜しみもなく周囲に感じさせる人だったから、俺も大好きでその人にかまってもらおうと周囲をうろついたり勉学にも運動にも励んだりした。その人に、言われたことがある。「亜種には覇気が足りないね」。そのようなつもりは全くなかったから、幼心にショックだった。原典と似たような人間と指摘された気がしたし、それ以上に認められなかった努力がかわいそうで悲しかった。

俺にはどうやら、向上心というものが欠如しているらしい。芸術においてもスポーツにおいても勉強においてもそうなのだ。「何か特別な能力を身につけた自分」と言うべきビジョンを持ったことがなかった。ビジョンを持ったことがないから、当然なりたいと思ったこともない。ビジョンとは、ある人に言わせれば自分探し、ある人に言わせれば理想の自分、ある人に言わせれば目指すべき目標になるのだろう。そういった、今現在の自分以外の自分、よりよい自分というものが、俺には言葉でわかっても頭ではわからない。胸の奥を探って見えるのは、今ある自分への不快感と、周囲の人間に対する劣等感。不快感は常に腹の底で粘ついていたし、劣等感は時折茉莉耶に対しても感じる。俺は劣等感の根元となる感情が何なのかわからなかったが、あまり深く考えないようにしていた。日常生活に関係ないことに頭を悩ますことを、俺は建設的ではない、不必要だと考える人間だった。そして、ただ目標を前に積み立てそれをクリアし、少しでも原典と自分との間に差異を気付こうと躍起になった。

向上心が欠如しているため俺は勉強が好きというわけではなかっ

たが、この赤い文字は好きだった。自分でもその理由はわからないまま、ほとんど愛していると言っていいほどに好きだった。赤い文字と向かい合っていると問題を解くことの煩わしさも、時間も何もかも忘れて満ちた気持ちになることが出来た。

シャーペンを走らし目を走らし思考を走らし、気持ちがすっかりプリントに心酔する寸前、携帯電話が机の上で暴れだして、赤いランプが警告するように明滅した。俺は気持ちを失速させ我に返り電話を受ける。茉莉耶のおどおどとした声がいくつかの同じ単語を何度もループしながら飛び出した。

「要君、どうしよう、あたし、あたしの、どうしよう、悪いの、要君、あたしがきっと、要君、どうしよう、どうしよう」

「わかった。今どこにいるんだ？　すぐそっち行くから」

上着を出し、マフラーを巻こうとする。マフラーがどう言うわけかいつもの場所に見あたらず、俺は諦めた。玄関で靴を履いていると、背後に人の気配が立つ。

「今から出かけるのか？」

「あ？　そうだよ」

顔を見ず質問だけに答える。

「帰ったら風呂、入るのか？」

問いの内容が突飛なくて一瞬動作が止まる。振り返ると、あわてたように洗濯かごを背中に隠した。頼りない、ヘラヘラした笑い顔を顔面に張り付かせている。こんなモヤシみたいなのが父親かと思ったら情けなくなる。

「適当にするよ、ほっといてくれ」

「わかった。バスタオル、新しく買ってきたからな。ほら、擦り切れてただろ」

俺は無視して家を出た。外は寒くて、自然と腹筋に力が入る。電話に向かって茉莉耶の名前を呼ぶ。

「ちょっとは落ち着いたか？　どこにいる？」

「要君！　あのね、ああああたし、あの人の、」

「どこだ？」
ん？　促すように低く喉から音を出す。電話向こうの茉莉耶には
これが一番効果的だった。
「あの人の家の、前です」

†

2.

あの人の家の前。

茉莉耶があの人と言う時、いつもそこには特別な響きが宿った。少しの警戒心と大量の忌避と、謝罪の気持ち。名前を明確に示さない行為には怒りもあったが、ハリーポッターの世界に登場するあの人のケースとは違い、その怒りは彼女自身にのみ向けられていた。あの人とは、昨夜万引きを茉莉耶になすりつけた少女、林悟実を指す。茉莉耶は悟実から被ったいじめの数々を、まるで自分自身が引き起こしたようにとらえていたし、また、悟実へ俺がしでかしたことも茉莉耶が引き起こした物事だととらえ罪の意識にさいなまれているらしかった。俺があの人に対してしたことと言えば、ただ言い逃れできない悪評を広めて、とどめとして少々物理的に懲らしめてやっただけなのだが。そのことで怨みを抱かれるほどには徹底したことは確かだけれども。

悟実の家はよく知っていた。あの人から茉莉耶を奪還するための裏工作として何度か調べに通ったことがあったからだ。だが、しかしなぜそんなところに茉莉耶がいるのだろうか。茉莉耶とあの人の家はそれほど離れてはいなかったが、それでも彼女の家は茉莉耶の生活範囲の外にあった。

呼び出されて向かった先には夜中だというのに大量の人だかり、空には回転する赤い光。物々しさと浮き足だった空気が混ざり合わずに渦を巻き、一触即発を予感させる異様な空気を作り出している。空を回転する光が曇った夜空に映っているパトカーのランプだと即座に理解できても、何が起こったのかはわかるはずもなかった。だから、俺は不用意に人垣へ割って入って、不用意に記憶をほじくり

返してしまった。今回の人垣が、事件直後に出来た者のため結束が緩やかだったのも災いしたと思う。
「下がって！　下がってください！」
地面に伏せられた青いビニールシートの下から、人間の頭部が転がり出していた。血生臭いにおいが立ち上り、喉の奥を焼く。悟実の頭が、俺を恨めしげに見ていた。じっと。こっちを見て、どうしてこんな事してくれたのかと問うている。
茉莉耶を守るためだと、叫びかけた。
「要君！」
俺の腕を温かな手が引いて、ビニールシートから引きはがした。人垣がブラインドカーテンとなり、視界から不快なものを消してくれる。
「どうしたんだこれ？」
息を切らし、怯えたように何度も生唾を飲み込む茉莉耶は目をかっ開いたまま何も言えない。わからない。そう言いたげに首を左右へ強く振る。こんな所に帰宅はなかったと言わんばかりに、人垣から離れる足取りは速い。
「はっろー。私が呼んだの。なーんかね、こっち方向に事件がありそうだなーっておもったらビンゴ！」
親指を立て、ウィンクまでして見せたのは、名主ミナだった。ハンチング帽をかぶり、探偵を気取っている。さっきからいたのか、茉莉耶と手までつないでいた。茉莉耶は彼女の手をすがるように握り返している。
「多田野君にも集合かけたんだけど、んなオカルトなこと付き合ってられっか！　って電話切られちゃった」
自分自身かなりオカルト的なものに染まりつつある癖して、一十らしい言い種だ。
ミナは遠巻きながら爪先立ちしたり置き石に上ったり電柱によじ登ったり、女というか人間を捨てて現場を余さず記憶しようとしている。

「ブルーシートが邪魔ね。何にも見えない。後で人払いの術とか掛けてみよっかな。それとも妥当に刑事さんに質問？　んー、でも追っ払われそうだなあ」
「何嬉しそうにしてるんだよ。人一人死んでるんだぞ」
「要がそう言う？　茉莉耶ちゃんに聞いたけど、あの被害者の以前子ボコったことあるんでしょ？　河原に呼び出して。非道滅多切り右足骨折全治二ヶ月」
「過去のことは持ち出さないでくれ」
茉莉耶が身を縮こませ、小さく震え始めた。俺は彼女の罪悪感を刺激したくなくて、あえぐように抗議する。ミナから茉莉耶を取り返し、腕の中に茉莉耶を納める。
「いい彼氏サンだね」
にっとミナは歯を出して笑う。共犯者の笑みだ、俺はとっさにそう思った。
「私、そういうのとても気になるタイプなのよね。危ない感じに引かれるって言うか。大切な子を必死に守る姿というか」
「事件大好きだもんな」
「違うよ。事件じゃなくて、要。私も守られたいなー」
俺はまっすぐに自身をとらえる彼女の瞳に気圧され、一歩後ずさる。心臓の動きが早くなる。背筋を汗が一筋下る。何か言わなければ、このまま誤解を与えてしまうような気がした。
「変な奴だな。俺は別にあんたが望むような人間じゃないぞ」
腕の中で茉莉耶が身じろぎし、俺とミナを見比べる。茉莉耶の手が俺の上着をつかむ。彼女は何も言えずミナを見ている。
「茉莉耶ちゃん」
唐突に腕を伸ばして現場を指さした。火事かと思うほど、赤々とした夜空。遠巻きにもわかる異常事態。
「あれ、怖い？」
茉莉耶がいっそう俺に身を押しつけ、力加減を間違ったようにがっくりと頷く。

「私、ちっとも怖くない。面白いよ。みんな、そう思ってるから集まってるの。私ね」
ああ、満面の笑顔だ。
満月みたいに満面の笑顔。俺はそこに溢れる蔑視と言う名の感情を拾い集め、拾い集め、茉莉耶には気づかせまいと彼女の体を必死で俺に向けさせる。
「茉莉耶ちゃんみたいな弱虫ぶりっこ、大嫌い。弱虫ごっこしてたら守ってもらえるもんね。でもそんなの、要の負担だよ」
ミナの言葉に衝撃を受けた茉莉耶は、泣くでもなくただうなだれる。彼女は自身に向けられた物事に反射すると言うことが出来ない。全て受け止めて、自身の心は殺す。
「そんな言い方やめろよ。茉莉耶は元からこうだし、俺は別に負担だなんて思ってない。それに、事件を面白いとか言う名主の方が不謹慎だろ」
ミナは茉莉耶から俺に向けてさらに顔を近づけ、俺の顎を下から覗き込む。喉にかみつかれるような感覚。
「ごめんね、茉莉耶ちゃん、私、要をもらうね。茉莉耶ちゃんと要じゃあ、どっちも不幸になるだけだよ。わかってるでしょ、茉莉耶ちゃん、あなたが要に頼りきってるの」
「何勝手なこと」
ミナは目尻をたゆませた。俺は不快感に満たされる。この女を、蛇みたいで気持ち悪いと思う。
「私なら、要を最大限に幸せにしてあげられる。この子には無理よ」
「ああ、ご忠告ありがとうな。名主にとやかく言われたかねえよ」
「でも、絶対、要は私を選ぶの。どうしようもないの」
決まりきった未来を読むみたいに、確信的な言い方だった。それは絶望を口にする時に似ていた。
じゃあね。ひらりと立ち去る寸前、ミナは茉莉耶の頭に手を置き、俺の口の端に唇を付ける。
「今日は私一人で捜査するから！　帰っていいよ！」

言われなくても。
手の甲で顔についた彼女の体温を乱暴に拭う。茉莉耶は不思議そうに自身の頭へ手をやる。
「もしかして、名主さん、撫でてくれました？」
「さあな」
俺には支え代わりにしたようにしか見えなかったが。
弱虫ぶりっこ、と言われたことが気になるらしく、帰り道、茉莉耶は俺から少し離れて歩く。俺と一定の距離を保とうとしてぎくしゃくとした歩き方になっている。ほほえましいな、と笑って見ていたら、彼女の背後で何か、動物の目が光った。
「どうしました？」
茉莉耶が俺の視線をたどって横を向く。電柱の陰で、何匹かの動物が塊となっていた。赤ん坊に似た鳴き声が響き、それは俺を不安定な気持ちにさせる。一個の不気味な生命体となってうごめく黒い塊は、数匹の野良猫だった。
「要君」
状況を察して茉莉耶が俺を呼ぶ。この筋肉のしなやかに引き締まった猫たちの中心に、獲物とされている何かがいるはずだ。おそらく、生命力の低い同族。
意志を超越した感情に引き寄せられ、俺は足を運び、手前の猫をつまみ上げてどかす。予想通り、小さなやせさらばえた猫が、猫どもの餌食となっていた。何度も噛みつかれ、あたりに血が散っている。昨夜から何度も遭遇した生臭いにおいがここにもあった。人間が近くに来ているのに彼らは逃げようとしない。それほどこのいたいけな猫いじりに執心らしい。
「っち」
猫を蹴りとばして追い払う。一匹などはブロック塀にぶつかり胃の内容物を吐いたが俺は頓着しなかった。弱った猫を抱き上げようとして、身動きのしにくさに、まだ最初の猫を手に持っていると気づく。それも道へ叩き捨てようとする。振りかぶった腕に、茉莉耶

が手を回した。
「もう、いいと思います」
「けど、徹底的に追い払わないと」
「大丈夫です。もう懲りたはずです」
茉莉耶は目を訴えるように俺へ向けていたが、焦点はどうにも合っていなかったし、次第に力尽きて地面へ落ちてしまう。それが彼女の限界で、それが彼女を頑張らせておける俺の限界だった。
「……それもそうだな」
俺は言うべき言葉に詰まって、別の言葉を探し、結局無難な言葉を選んだ。地面に猫を置く。猫は一目散に近くの民家へ消えて行った。なぜか、非常に空疎な気持ちになる。そばにいるはずの茉莉耶が遠くに感じられ、俺は現実との誤差にめまいすら覚えた。茉莉耶がミナに影響を受け始めている。
「猫は、茉莉耶が面倒見てくれるか？　俺の家は飼えないから」
「はい」
大事そうに猫を抱き上げた彼女に、俺は己の口端を示してみせる。笑ってみたかったが笑えなかった。おそらく、怒ったような無表情だ。
「ここ」
茉莉耶は首を十五度横に傾ける。
「出来る？」
さらに十五度傾いた。その無邪気な仕草に俺は苛立ち、同時に泣きたくなった。彼女が遠い。
「わかんねーか」
諦めようとした時。
「ごめんなさい」
茉莉耶がようやく理解してくれた。
ミナが口を付けた箇所に、茉莉耶の舌が這う。
「あってましたか？」
「ん。よくできました。ご褒美」

彼女の頭を撫でる。くしゃくしゃにするくらい撫でる。心を込めて撫でる。茉莉耶は無言で目を細めた。
「茉莉耶。大好きだ」
だが、俺の心は、どうしようもなく劣等感にまみれている。

3.

†

子供は親を選んで生まれては来れないが、親も子供を選んで生めないものだ。他人の家の内側に入り込んで知る、どこか不足してなのに余剰でいびつな家族関係。にっちもさっちもいかない程違和が絡まりあってほどけない人間関係は、家族というまとまりが最たる物ではないだろうかと思う。俺にしても茉莉耶にしても十にしても、円満な家庭と言い切るには難しい。家族はその形態の複雑さと多様さから、必ずどこかに潰せない膿を抱えている。パズルのピースが都合よくはまって心地良い家族という物に、一度は出会ってみたい物だとすら思う。家族の中にいる限り、ボタンをかけ違え、掛け違えてしまったことに気づきながら喜劇の茶番を続けなくてはならない。喜劇を悲劇だと感じてしまうのは、いつか正しくボタンがはまるときが来るのだと夢想する甘えがどこかにあるからに他ならない。現実はおそらく、そのまま生身の現実でしかなく、不幸も幸福も超越したものとしてそこにたたずんでいるのだ。

猫を携えて、俺と茉莉耶は佐藤家の門をくぐった。佐藤家には茉莉耶と付き合い出すようになってから何度も訪れている。泊まり込む事も多い。

「ただいま」

茉莉耶が蚊の鳴くような声で帰宅を告げるよりも先に、母親が居間から出て来た。洗い物でもしていたのか、タオルで手を拭いている。

「こんばんは」

俺は殊勝な態度を心がけて頭を下げる。

「おかえり茉莉耶。いらっしゃい、要君。またお父さんと喧嘩した

の？」
　彼女の言い方はあくまでも世間話のそれで、別段気にしている風でもない。娘の彼氏が家に来たのだからその理由くらい把握しておきたいという親の心だろう。原典には根本的に欠落しているものだ。彼は俺に関心を持たない。かといって他の何かにうつつを抜かしているようでもない。言うなれば、現実に関心を持っていない。焦点の合わない目を見ればわかる。彼は心がいつもどこか宙に浮いている。
「今日は喧嘩してませんよ。俺そんなしょっちゅう喧嘩してるように見えます？」
「見える見える。でもそのうちお父さんと仲良くなる日が来るわ」
　彼女の言葉は空疎に響いた。おそらく、彼女自身もわかっているのだろう、意味のない笑い声をあげる。
「こんなこと言ったらうっとうしがられるわね」
　勝手知ったる他人の家で、下駄箱に靴をしまい、洗面所で手を洗った。うがいもする。吐き出した水が流れるシンクはピカピカと光ってくすみ一つない。佐藤家は管理の目が隅々まで行き届き、心地よい居住空間を創出していた。茉莉耶が居心地悪そうに、俺と母親の間をうろちょろしている。
「そんなことないですよ。いつも突然押しかけてすみません」
　指を弾いて水を払っていると、洗い立てのタオルを差し出される。
「ふふ。でも、要君の家出先と言えばうちでしょう」
「いつもお世話になってます」
「気にしなくていいのよ。第二の家と思ってくれてかまわないから。ね、茉莉耶」
　茉莉耶の肩に両手を乗せ、頭部に顎を軽く据えて母親が同意を求めると、娘はさっと顔を赤らめた。恥じているのではなく、困惑しているのだ。茉莉耶を見ていると、母親が何か恐ろしいことをたくらんでいる人に感じられて来る。娘の両親への拒絶反応は、俺としても異常に映った。彼女がずっと愛情を持って彼らに育てられてい

ることを考えれば、なおさらだった。
母親は娘の表情に浮かんだものを逃さず、一瞬悲しそうに顔のパーツを下げる。
「茉莉耶、要君と部屋に行っててもらえる？　今日はその猫ちゃんのことで来たんでしょ？　後で何か必要そうなもの持って行くわ」
居間から遅れて父親が顔を出した。茉莉耶の両親は二人とも、やや肉が崩れた中年の、温厚そうな雰囲気をまとっている。父親は俺たちに向かって「おかえり」とまとめて言う。まるで、ここが俺の家であるみたいに。茉莉耶の手に小さな紙の包みを二つ置いて「いただいた和菓子だ。後で食べなさい」と茉莉耶の目を見る。茉莉耶は耐えかねて目線を逸らす。娘に拒絶の意を示された彼は塩水を飲んだ顔をする。他人の俺が見ていて気の毒だと思うほどだった。
「じゃあ、お言葉に甘えます」
俺が茉莉耶を廊下側へ押しやると二人とも、ほっとしたように全身から力を抜いた。
「お願いするわね」
妻の言葉を失言と見なして、夫は彼女の肩を肘でこづく。
「ゆっくりしていきなさい」
「今日も泊まらせてもらってもいいですか？」
「もちろん」
「何泊でもして行っていいのよ」
「おい」
彼らがようやっと笑いあうのが見えた。
俺はこれほどにも娘を愛している両親に哀れみを覚える。不幸にやつれた顔をして、実際の年頃より何歳も老け込んで見えた。彼らはいつか茉莉耶が娘らしく、お父さん、お母さん、と笑いかけてくれる日を期待しているのだろう。かつての俺が原典に対してそう望んだように。俺が今、彼らが自身の本当の両親だったらと夢想してしまったように。
夢は尽きず、俺は自ら自身を不幸に落とし込んでいる。

†

4.

猫の手当はそれほど複雑ではなかった。どこか骨が折れていたり肉が潰れていたりするのではないかと、最悪の想定もしてみたが、全く馬鹿らしいほどに必要のない憂いだった。もっとも大きかった傷口は、鋭利な五センチほどのもの。どこか路地を逃げる時につけたのだと推測される。傷口に、動物がその牙や爪で割くような粗野な崩れは全くなかった。綺麗に裂けているため、傷口の化膿も少なくすぐにふさがるだろうと思われた。念のため、消毒をし、体を温めたタオルで拭き、乾いたタオルでくるみ、傷には包帯を巻く。興奮状態でフーと空気を噴出する唸り声を振りまき、部屋を歩き回ろうとしたが、足腰が立たないらしい。前足を踏ん張って身を起こすという徒労をしばらく繰り返し、力尽きて眠ってしまった。

茉莉耶の母親はその間に三度部屋の扉を叩いた。まずは猫のけがに必要なもの、次に紅茶とお茶菓子、最後に客室の準備が出来た旨を携えて。彼女の気遣いに、茉莉耶は当然のごとく萎縮して適切な態度をとれなかったため、全て俺が応じる。茉莉耶の母親も、俺も、そのことに違和感を抱く時期はとうの昔に過ぎ去っていた。

「ひとまず安静だな」

風呂を借り人心地ついた俺は、穏やかに脈打つ猫の身を撫でる。まだらになった毛が爪に引っかかって抜けた。

「早く元気になるといいな」

毛を爪から丁寧に取り除き、マグカップのに溜まる冷めた紅茶を飲む。父親がくれた和菓子はゆず風味のカスタードクリームが入ったケーキだった。ほんのりとチーズの風味もする。どちらかと言わなくても洋菓子だ。俺は和紙に似せた包み紙を丁寧に畳む。ケーキ

は頼りないほど柔らかくて甘かった。どっと気持ちが抜けて、疲れが背中に覆い被さって来た。連続殺人犯の存在は、思いの外心に緊張を強いている。

「今日は向こうで寝ようか？」

茉莉耶がしゃがみ込んで猫から顔を上げようとしない事が気になって切り出す。彼女の肉体の七十パーセントは水でなく遠慮が占めているに違いないと常々思っていたが、今はダムが決壊し、怒濤のように遠慮が溢れ出ていた。事件現場まで行った興奮か、ミナの自分勝手な暴言か、ともかく彼女が精神を高ぶらせているのがわかる。俺に話しかけることすらしない。一人になった方が気持ちも軽くなるだろう。彼女はウサギと一緒で、孤独よりも心理的ストレスに弱い。

「ううん」

ようやく茉莉耶は自己主張した。顔の向きを猫から俺に正し、戸惑った表情のまま口を動かす。

「一緒に寝て下さい」

息のかかりそうな距離で言う。顔に血が上って真っ赤になった。見開いた目にうっすらと涙が溜まって行く。

俺が彼女の涙を拭おうと手を伸ばすと、バランスを崩しながら立ち上がった。淡いダイダイ柄のチュニックが裾を揺らす。

「向こうに行って布団持って来ます。いつもやってもらってるから、たまにはあたしが」

「ん。いいよ」

彼女の手首をパジャマの上からつかみ、ベッドの上に引き戻し座らせる。一度、そうせねばならない気がして抱擁し、顔へ斜にかかった髪を正してやる。ドライヤーを当てたばかりの髪は少し湿っていて俺の指に体温を残した。花の香りがする。宣告の結果気が抜けたのか、それとも単に蛍光灯のせいなのか、を受けて白っぽい頬に手を添え、親指で強くこすった。額を軽くぶつける。顔面に落ちた陰に反応して、茉莉耶は瞬きした。

「茉莉耶はいつも通りでいい」
彼女は困った風に笑って首を傾げる。　おびえと恐怖意外における彼女の感情表現能力は希薄だったため、それが困惑であると断ずる事は出来なかった。
ベッドの上で茉莉耶が、そのそばの床に客用布団を敷いて俺が寝る。寝る前の会話は猫の様態についてで、それも二言三言交わすうちに終わってしまった。ベッドの上から軽い寝息がする。俺も大きなあくびをして体の向きを変え、眠りへ入り込めるよう体勢を整えた。明日もいつも通りの朝が来て、いつも通り佐藤家で朝食をもらって、いつも通りの学校生活が始まる。
俺はそれを疑っていなかった。
夢は何も見なかった。

06：みんなの夢

†

この空間にも、もうだいぶ慣れた。いや、慣れた、と言うのとは違うかも知れない。たぶん、肌に馴染んできた、と言うのが　正しい。丁度、通い慣れた道を辿るように。最近目をつむればここに来ている気がする。夜の睡眠はもちろん、昼間のちょっとした休憩や、人でごった返す満員　電車の中、他人との退屈な会話の合間。意識が現実の「今」から乖離する度、この覚めた皮膚感覚は記憶を『逆流して』現れる。夢の中でだけ思考に明瞭が刻ま　れ、世界と自分をコネクトする五感にリアリティが生まれる。「今」を徐々に夢が食いつぶしてきている。

真っ白で人気無く長いのに、妙に薄暗く曇って感じる廊下にたたずんでいた。首を上向けて、赤いランプに照らされた文字を読む。「手術中」。そうか、人喰い連続殺人事件を自分たちは追っていて、ついに、殺害される前に被害者を救出できたのだった。

ぞ。と寒気が全身を駆け抜けた。血管が膨張し収縮する。冷えた血液が心臓に送られる。両の手の平を力無く持ち上げた。途切れ途切れに走る手相。この手の　平が捕らえた命を思い出す。冬の夜空に反してくっきりと熱く、同時に頼りなくすり抜けて行こうとする命。命から生まれた温かみは、即座に夜へ溶け、溶けて溶けて、無くなってしまった。命はこうもあっけない物かと虚脱すると同時に、絶望的に見えたボロボロの体から止めどなく溢れ続ける熱い液体に胸を打たれた。人という物が内側に秘めた執拗とも怨念とも言えるほど強い『生きる』という気持ちに、ほとんど奇跡に近い物を感じた。

被害者を発見する前、夜中、私は彼女が床を抜け出す気配を察知

し追いかけた。頭は真っ白で、今いるここの廊下みたいに細部がぼんやりとしていた。自分が　何をしているのかわからなかった。途中で姿を見失い、彼女の名前を呼んだ。呼んでさまよい歩いている途中、生存者を見つけたのだ。辺りはおびただしい量の　血で溢れていて、一歩踏み出せば靴の裏が溶けたゴムのように粘ついた。

まだ、彼女の姿は見つかっていない。もしかしたら悪魔のような人喰い鬼に食べられてしまったのかもしれない。彼女が身をくらました方向と時間帯、人喰い　鬼が現れた場所と時刻は一致している。十分ありうることだ――そう想像して、頭を抱えた。自分は知っているのだ。記憶が『時間法則に反して』教えてくれる。未来に、彼女が悪魔であったと判明した事を。

「おい、大丈夫か？」

肩に手を置かれて振り返った。厚い骨ばった手だ。

「ああ」

生返事をすると、気遣うように彼は頷いた。それだけでずいぶん気持ちが軽くなる。彼には天性の物がある。人の気持ちをリラックスさせ現実に目を向ける勇気を与える。ずいぶん彼のそういう部分に助けられて来た。

「現場を目撃したんだろ？」

彼に勧められて長いすに座る。長いすは、これまでにここへ希望を預けてきた人たちの重さを表すように、綿がへたってがっしりと堅かった。合皮のシートは所々穴があき、破れている。ない希望にすがり疲れてボロボロになるまでここに食らいついた思いの残滓だと思う。

「ああ」

彼に頷いて肘を両膝に添える。併せた両手に額を乗せた。彼も隣でほぼ同じ姿勢を取る。違いは、彼は額ではなく顎を両手に乗せ前を向いているという事だ。

「それに一人いなくなってしまった」

無言を保つ。目だけを動かしてその言葉の先を待つ。

「お前の大事な奴だ。ショックだろうな。おれの想像を超えて、はるかに」
「ああ」
頷いたもののよくわからなかった。頭が重たい。鈍るように、割れるように、その存在を主張している。頭痛とは違う。思考停止を求める心の声だと、わかっていた。だが、声に従おうとは思わなかった。従ったら、意志薄弱の人非人に成り下がる。必死で抗い、彼女の喪失に対して自身がどう感じているかを探り続ける。不安はある。彼女が無事であるかどうか、胸が裂けそうに心配だ。だが、これはこうであったはずの気持ちであり感覚だ。未来を知ってしまった自分は、現在の彼女の無事を知っている。そのせいだろう、心は凪いで静かだった。同時に、彼女が悪魔である事への衝撃はまだない。たぶん、自分は彼女を信じているからなのだろう。彼女が望んでそのようなことをしているわけではないと、そのように。
「コーヒー、飲むか？」
ホットコーヒーを彼は差し出した。気付けになるようにとの配慮だろう、カフェオレタイプでミルクも砂糖も大量に入っている熱々の缶コーヒーだった。
「いや、いい」
首を振り、手で払いのけまでして断る。今胃袋に何かを入れたら、絶対吐いてしまうだろう。
「だよな。おれもいらないよ」
長いすの中央、彼との間に缶コーヒーは置かれた。砂糖とミルクの割合を少しずつ変えて四本。ここにはいない二人の存在を思い出す。
「あいつらは？」
「いなくなったの放っておけない、探すって言い張ってさ。人喰い悪魔にやられるかもしれないってのに、行っちまったよ」
「そうか」
ふと笑いがこみ上げてきた。胃袋が痙攣して、止まないしゃっく

りよりも激しい衝動が口から溢れ出す。
「なんで俺、ここにいるんだろうな。俺が一番に探しに行くべきなのに」
怒り。唐突に感情が湧いた。そうだ、これは自分自身に対する怒りだ。何も出来ず、ただ事態を見守るしかしない不甲斐なさと無力さと、そして、何度叱咤しても立ち上がろうとしないこの意志の弱さに対する怒りだ。
「仕方ないさ。あんなの目の当たりにして、力抜けない方がおかしいよ。救急隊員だって真っ青な顔してただろ」
飲まない、と言ったくせに一本を手に取った。暖房の弱い病院の廊下、その気温に反して嫌みなくらい温かい。この事件に首を突っ込むまでのぬるい日常生活の温度を思い出せない暗い温かい。そして、今のこの煮え切らない心の温度は。煮え切らないならいっそ冷めてしまえばいい。こんな中途半端な心で誰かを心配するくらいなら、何もかも投げ出してしまえたらいい。だが、それは、出来ない。もう、忘れてしまった。
「慰めの言葉は良いよ。探しに行こう」
コーヒーを持ったまま立ち上がった。友人の顔を見る。彼は、青白い蛍光灯の下で嬉しそうに微笑った。ため息とも付かない息を漏らす。本当は探しに行きたかったのだろう。ここでいじけている自分の狭量さを思い知る。
「ああ、行こうか」
彼は缶コーヒーを置いたまま立ち上がり、腕に抱いていたトレンチコートへ袖を通した。
足を一歩前へ動かすと、希望の光が一条胸へ差し込む。細い、髪よりも蜘蛛の糸よりも細い、今にも吹き飛びかねない光。それは虚弱な生命力ながらも鬱屈とした心に清涼感をもたらす。じっとしていること。堪え忍んでいること。無力だと諦めて生きる事。それは、確かに楽だろう。安きに流される傾向のある自分だが、それでは何も超えられないのだ。前へ進むことが、探し続けることが、この自

分のすべきことなのだ。例え、目にしたくもない、知りたくもない、
そんな現実を突きつけられるだけだと知っていても。

07：ごっこ遊びが終わる時

†

甘い、ゆったりとしたメロディの流れる喫茶店の片隅で、何かの電子音が震えていた。携帯電話の着信音だ。着うたでも着メロでもない、初期設定で組み込まれている単純なもの。黒電話という懐古的なものですらない、ただのアラート音。それは空気を震わせながら拡散して、耳に入り込み直接胸をざわつかせる。

「携帯鳴ってっぞ」

一十に指摘され、無視を決め込むつもりだった俺は鞄から携帯電話を出す。くるりと弧を描いて画面を開け、十桁の数字列を見る。市街局番で始まる知らない番号だった。

「間違い電話」

そうとだけ伝えて携帯を閉じる。着信音はしばらくして鳴り止んだ。ミナが興味深そうに携帯画面を覗いていたのが気になって振り返る。人の携帯覗くなよ、の意を込めて彼女の額を携帯電話でこづいておいた。

据わり心地のいい木製の椅子が囲むテーブルに席を占め、メニューを開く。時計回りに俺、一十、ミナ、茉莉耶の順。通い慣れているけど久しぶりだと言う一十は安いカプチーノをさっさと選んだ。対して残りの二人はメニューを凝視したまま。ミナは両手でメニューを持ちせわしなくめり、あれとこれとと選別している模様。茉莉耶は一ページ目で固まっているからおそらくメニューの豊かさか値段にカルチャーショックを受けているのだろう。ミナがカモミールティーラテとホワイトモカにソイラテにキャラメルマキアートそれからチョコレートチャンクスコーンとと際限無く注文を重ね、茉莉耶がようやく抹茶のソイラテに決める。それまでの間、鞄の中で何

度も携帯が鳴った。最初俺はその度に電話番号を確認していたが、同じ市街局番からの着信ばかりが重なり煩わしさのあまり電源を落とす。何か俺へ向けて用がある人間の仕業だと想像がつくからこそ、電話に出る気は起きなかった。電話が俺からこの空間を切り離してしまう事になるからだ。執拗に鳴る着信音は救済を求める声に似て、嫌でも耳に絡みつく。最初は鳴り止むのを待っていたが、それにも限界があった。

「それで、何があったの？　噂でも何でもあの子が多田野君に特定して犯人扱いできるって事ことは何か根拠みたいなものがあるんでしょ？」

グラスに入ったカプチーノを一気に胃袋に納め、ミナは一十へ話を切り出す。彼女の手の平が話題を促すため、隣の席へ向けて翻った。

「楽しそうですね、名主さん」

「もちろん」

一十のため息混じりの抗議は、ミナの面の皮にぶち当たって砕ける。

「誰かがリークしたんだよ。嘘の噂をな。オレたちの教団が人殺して回ってるんだとさ。ありえねーよ、そんなの。第一それは教義に逆らうことなんだから」

「教義？」

俺が彼のテリトリーに踏み入ると、一十は曇った顔をゆがめる。その部分について詳しく説明する気はないらしい。親指と人差し指、中指を立てた右手首を捻って「その逆。殺すの反対、生かす」と答える。

「まっとうな人間なら他人の命を奪って嬉しいわけ無いだろ」

低く怒りのこもった声で言い、背もたれに身を預けた。ゆっくりと息を抜いて内側で発酵し続ける感情も抜く。怒っていた肩がしぼみ、彼はポケットに手を突っ込んで話を続ける。

「オレの母さんが疑われたんだよ。理由はわかってんだ、毎朝の祈

祷がうるさいとか、変な香を焚くとか、話しかけても会話が成り立たないとか。それは、もちろん、母さんの悪い所だ。昔から自分ばっかりで周りが見えてない」
一十は「けどな」と身を起こした。俺、茉莉耶、ミナ。順にそれぞれの目を覗き込んで行く。口元にかすかな笑いが滲んだ。涙とやるせなさを必死でせき止める、今にも崩れそうな笑いだ。
「だからってなんで、言われもない罪被せられなきゃなんないんだ？」
涙が声の奥の方に膨らみ、彼の顔は羞恥に赤くなった。俺は一十がズボンのポケットの中で握った拳へ力を加えたのを、目の端に留める。拳は細かく震えていた。
「それが、父さんが死んでも必死で生きてる母さんへの裁きだって言うのか？」
茉莉耶がいつもより陰鬱さを増した上目遣いで一十を見ていた。過去、いじめの渦から抜け出すことをあきらめざるを得なかった彼女は、いじめられる事こそが生きる意味だとすら感じられた事があったと言う。むしろ、その頃はそれだけが生き甲斐だったのだとも。そんな彼女に一十の主張は理解できないことなのか、唇がもの言いたげに開いていた。
「近所の人とは限んないんじゃねえの？」
慰めるつもりで口を挟む。一十は首を振って否定した。
「母さんが警察に連れてかれる時、野次馬ん中にいたんだよ。因果応報だとか、通報してよかったとか言ってる奴がね。頭来て、気づいたら自制も何もなかった。手錠かけにきた警察に殴りかかって、乱闘起こして、公務執行妨害でオレもお縄。間抜けすぎる。あんな奴らの思惑にまんまと挑発されて、親に心配させて」
顔の傷は警察に押さえ込まれたとき、コンクリートにぶつけて出来たものらしいと合点する。俺と一十の『親』に対する感覚はずいぶんと違っていたから、俺は丁寧に彼の言葉を噛んで砕いて細分化することしかできない。もしかしたら、俺の茉莉耶への気持ちが一

番近いのかも知れないと思うだけだ。掛けるべき言葉を瞬時に見つけるような余力はなかった。俺は適当に選んだ紅茶を飲んで氷を鳴らした。静寂がテーブルに広がって行く。
「裁きは、重たいよ。人間に出来る事じゃない」
ミナがぽつりと口にした。目の前のグラスはいつの間にか全部空になっている。彼女の表情がいつになく真剣で、深く物思いに沈んで見えた。喫茶店の間接照明が柔らかそうな頬に複雑な陰影を描く。
「私ね、犯人に訊きたいことがあるの。どうして殺すのって。もう殺さなくていいんじゃないの？　何人も殺すのは苦しいよって言ってあげたい」
ミナはスコーンを皿に置き、広げた手を優しく握る。見えない誰かを抱擁するように自身の身を抱いた。
「どうしてそう言いたいんだ？」
俺は沈黙の突破口へ向けて言葉を投じる。
「まるで名主が、」
続く言葉がどれほど無神経なものか気づき、慌てて言葉を飲んだ。向かいの席で、一十が足を組み替える。沈黙は一瞬の躊躇の隙を逃さず再び座を支配した。
「あはは、ごめんごめん、なんか暗いこと言っちゃったね」
ミナが笑顔を作り、俺を見て甲高い声で笑う。
「昔ね、殺したことがあるの。水槽で熱帯魚飼ってたんだけど、病気にかかっちゃって。それが疫病だったから、疑わしい子たち、みんな殺して」
「それは、仕方ないんじゃないのか？」
ミナと一十が俺を見る。茉莉耶も顔の向きは変えないまま、目だけこちらへ動かした。唇を湿らせて続ける。
「生かしてたら、健康な奴らも死んじまうかもしれないんだろ？疑わしいのを殺すのは、苦しいけど仕方ないと思う。もし半端な優しさで生かしたやつ等が疫病にかかってたら、優しさが裏目に出ることになる」

「要は本当にそう思う？」
「なぜ？　だって、名主は飼ってた熱帯魚を助けたかっただけだろ。最善の方法だと思うけどな」
ミナの頬に力が入った。わずか、頬が上気する。
「茉莉耶ちゃん大丈夫？」
「え？」
突然の方向転換に茉莉耶が戸惑う。
「茉莉耶ちゃん、こんな話嫌？」
茉莉耶は不思議そうに目をしばたたいた。
「あたしは」
求められた意見に返すべきものを探す。細い喉が唾を求めて伸縮する。テーブルの下で、握り合わせた手の平が離れ、再び堅固に組合わさる。
「要君と同じ意見です。かわいそうだけど、でも、それが運命だったんだと思います。だから」
一十が大きなため息で茉莉耶の言葉を遮った。
「運命なんてねーよ。名主さん、オレの意見要る？」
「ううん、別に」
ミナは間髪を入れず首を振る。他人行儀な笑顔で上下の瞼を開いてみせる。一十は鼻白んで、一瞬すべての動きを止めた。
「あはは、嘘嘘。ごめんね、なんか私が話乗っ取っちゃって。話戻して。お願い」
「そういう風には思っちゃないけどね。まあ、母さんもちゃんと解放してもらえるっぽいからいいんだけどな、このことは。婦警さんが要ってたんだよね。ほら、学校にパトカーで乗り付けたじゃん。その中で訊いたんだよ。今のところはまだ重要参考人程度で、長期留置する理由がないってことらしい。教団についてもガサ入れ前で特に黒い噂もないし、母さんに疑いをかける根拠はないんだって。警察に連れて来た理由だって所詮、奴らにとっても根拠のない通報だから。法律で言う、疑わしきは罰せずっての？　それみたいなも

んだって」
「まだ、おばさん警察にいるのか？」
「まあね。明日には帰って来るっぽいよ。一晩は事情徴収したいって言ってたから」
襟足まで伸びた髪を手櫛で背後へまとめ、強く引っ張る。こめかみが伸び、目が線のように細まる。軽い声で話していたが、端々にやるせなさが混じっていた。
「名主さん、事件についてなんか発見した？」
話題を転換させるためか、それとも何か意図があるのか、声の調子を戻して一十はミナへ水を向ける。氷だけになったグラスの中身をかき回していた彼女は、ポケットから手帳を取り出した。
「ええっとね、それがねーほとんど何もわからないんだよね。だからみんなが知ってることぐらいしか教えられないよ」
手帳からボールペンを抜き、ページを開く。
「まず、目撃証言がないの。手口はどっちの時も一緒。人の歯形跡が首にあること。歯形以外には特に外傷がないこと。あるのは抵抗した時に出来た擦過傷とか、ちょっとした切り傷や打撲ぐらいということ。即死じゃないこと。死因が出血多量ってこと。流れ出たはずの血液が周囲に残っていないこと。つまり、噛まれたことは死亡の直接の原因じゃないってことね。ふたつの事件はとてもよく似てるんだけど、昨日あった方の被害者は、突然発見されてるの」
「突然って？」
一十がミナへ身を乗り出す。俺も目を見開いて彼女を注目した。
「突然って言うのは、ほら」
ミナが手の平を俺たち三人に掲げて見せる。それを宙で握り、再び開いた。
「わ」
茉莉耶が声を出す。そこにはミルクキャンディがひとつ。ミナは包みを剥いて茉莉耶の口に押し込んだ。
「こんな感じに、前触れなく現れてるの。いないはずの場所に、ど

う考えてもさっきからずっといたみたいに」
「具体的には？」
俺は自分の眉間をもんで、視界を狭めながら尋ねた。心臓の音が途端にくっきりと耳に届き始める。
「発見した人の話だと、自転車に乗ってたらいきなり何もないところで突っかかってこけたんだって。何事かと思って自転車の下を見たら血みどろの死体があったってホラー以外の何物でもないわよね。あの辺りは夜道とは言え一定間隔で街灯もともってるし、門灯つけてる家の多いところだし、その人自身自転車のライトもつけてたから、一寸先もわからないってわけじゃないのよ。むしろ、コンクリートの割れ目もしっかり見えるくらい。発見者の証言によると、夢から覚めたみたいな衝撃があったって」
溶けた氷の水を飲んでミナは続ける。
「それからこれは、ニュースで言われてることね。犯人の動悸は諸説合って、有力な物はこのふたつ。人間の口を精巧に模した刃物で享楽的にやった説と、一種のカニバリズムじゃないかって説。被害者の状態や現場の状況、犯人の動機などから合理性を見た場合、カニバリズム説の方が信憑性があるわね。カニバリズムなら理由があって噛むわけで、意味もなく歯形つけて回ってる人間が入るってよりよっぽど有りうる話じゃない？　でも私は歯形刃物説も疑ってる。ただ殺したい。そういう愉快犯ばっかりよ、この世界は」
「ただ殺したいことは好きじゃないんですか？」
「何を掲げても、人が誰かを殺したいときは、自分の心に愉快を求めるものでしょう」
初めて自ら発言した茉莉耶に、ミナは低い声で応じる。制御された憤りと、もどかしさが彼女の瞳を妖艶に揺らした。色香が蒸気となって立ち上る。一十が呑まれ、俺が呑まれ、茉莉耶が呑まれた。
「でも、」
呑まれたせいだろう、普段誰かに逆らう事など絶対に避ける茉莉耶が反意を示す。ミナの目に溺れないようあえいだと言うよりかは、

自我を底から圧して引きずり出されたように感じられた。
「殺す人は殺してしまいますし、殺される人は殺されてしまいます。それが理屈じゃないのですか？　理屈に良いも悪いもないと思います」
「茉莉耶ちゃんの言い方だと、因が殺人で果が動機に聞こえるわ」
ミナの指が茉莉耶の頬に伸び桃色の輪郭をなぞった。
「因果が逆さじゃないかしら？　もしかして、殺されてしまったんだからそういう運命だった、とか思ってたりするの？」
茉莉耶は考えるように首を傾け、その動作を完了させる前に頷いた。
「嫌い」
言って突然、茉莉耶の頬を引っ張る。餅並に茉莉耶の皮膚が伸びた。頬をもてあそばれる少女の目から色が消えて行く。
「そういう生きる活力に欠けてる子ってジメジメしてていつか本当に死んじゃいそうだから嫌い」
「名主」
俺が腰を浮かせようとした時、小気味良い音が弾けた。
「茉莉耶？」
間抜けな声が出る。
イスから立ち上がった茉莉耶を、俺は唖然と見上げた。まなじりをつり上げた少女がそこにいて、俺はそんな表情の彼女を知らなかった。
「あたしは死にません！」
息をあらげ、茉莉耶がかつてない大声で宣言する。ミナの頬を打った右手を胸に抱き、まっすぐ前を見ていた。
「嘘。生きる理由もないくせに」
頬を打たれたことにいささかの動揺も見せずミナは茉莉耶の視線を跳ね返す。すごまれていじめられ気質が戻って来たのか、茉莉耶がたじろいで後ずさる。
「理由ならあります」

目尻にわずか、気弱さを取り戻した茉莉耶は俺の方を一瞥して答えた。
「あ」
不意に何かの気配を感じ取ってミナが自身の頬へ手を当てる。茉莉耶の指先が擦れたのか、血が一筋伝っていた。
「ば、絆創膏」
途端、茉莉耶の気負いは霧散する。涙声になり、茉莉耶は鞄をかき回し、ポーチを出してひっくり返した。いくつかの専門的な外科薬剤、頭痛薬や腹痛薬、ソーイングセットにガーゼやテープ。救急箱のような中身がテーブルに転げ出る。俺はテーブルの端から落ちようとしたリップクリームを空中でキャッチした。
その間ミナは茉莉耶の仰天ぶりに少々のけぞりつつ、きょとんと指についた血を見ているだけ。
「な、軟膏もありますから、ごめんなさい。そんなつもりはなかったんです。傷つけるつもりなんて、ごめ、ごめんなさい」
「茉莉耶ちゃんの言葉を借りれば、そんなつもりなくても、結果は結果よ」
取り付く島はなかった。切って捨てるように言うその厳しさは、茉莉耶の緩み欠けた涙腺にふたをする。茉莉耶の顔から一気に血の気が引いた。
「名主さん、謝ってるのにそんな言い方ないだろ。ちょっと厳しすぎんじゃね」
一十が取りなすが、動転した茉莉耶は卑屈な声で、謝罪を薬やハンドクリームの上へ垂れ流し続ける。消毒液と書かれた付箋の貼られた小瓶、軟膏、絆創膏意外をポーチに押し込むと、鞄を抱えて店を飛び出した。
「茉莉耶、」
呼び止めようとした時には遅く、衆目をひっさげて彼女は店の外を走り行く。雑踏が彼女の姿を飲み、暮れた空が街路灯を深い灰色で照り返し、たちまちの内に闇の中へ雑踏もくるんでしまった。追

いかけようかどうか逡巡して俺は追いかけない選択肢を取る。イスに尻を落とし、ミナを睨んだ。彼女は涼しい顔でお手拭きを頬にあてがっている。消毒液等を使うつもりはないらしい。
「名主、なんであんなこと言ったんだよ。挑発したのお前だろ」
ミナは答えず、通路へ向けて手を挙げた。ウェイトレスを呼び追加注文をする。
「嫌われた方が都合がいいの」
「は？」
俺と一十は揃って眉をひそめた。
「あの子、誰かを嫌うってそうそうないでしょ」
「ないな」
俺は誇りを持って肯定する。
誰かを嫌わない。それは茉莉耶の美点のひとつだろう。虐められた過去を持つ彼女は、侮蔑と排除の嵐に飲み込まれ、心身ともに致死寸前の状態を経験した。そのせいか限りなく自己評価を低く見積もる癖がある。底辺の人間である自分が誰かを嫌う資格を持つなどあり得ないと考えているに違いない。
「なんかあの子のマイナス思考って面倒くさいよね。そうじゃない？　普通の考え方してないと言うか。あっそうか、あなたには要の彼女でいる資格なんてないって言ったら簡単に譲ってくれるかも」
くすくすと笑う。つやのある長い髪が弾む。彼女の笑い方は常に芝居がかっていて、俺の目にはこれも嘘笑いにしか見えなかった。一十もそう感じるのだろう、真面目にミナの言葉に応えようとする気配はない。それどころか付き合いの我慢も切れたらしく、
「名主さん、オレ帰るわ」
と頭を振り、伝票をもって立ち上がる。
「家、今朝押し掛けられたまんまだし、オレぐらい帰んないと。それからごめん、ウチおやじがリストラされてからあまり金なくてさ。食べた分しか払えないけど」
「いーよー。私の分払うの大変でしょ」

「お前食いすぎだよ。太るぞ」
「あはは」
俺の突っ込みにミナは笑いながら携帯電話を開く。
「もしもし、茉莉耶ちゃん？　さっきはきついこと言ってごめんね」
話の内容に耳を傾けようとすると、一十が俺の肩を叩いた。
「あのさ、上の人に言われたんだよね」
苦み走った一十の口調は俺の注意を引く。彼の上唇が言いづらそうに少しめくれている。
「何を？」
全く話が掴めないまま続きを促した。
「犯人探し手伝ってやれだとさ。お前等のこと母さんに話したら、母さんが話しちゃったみたいで。犯人探しも立派に教義に乗っ取った行いになるから是非ともやって欲しいって頼まれちゃったみたいなんだよね」
「上って？」
「教団のリーダー。教祖とかいうの？　そんな役職の人だよ」
「何でそんな人が関心持つんだろうな」
俺は茉莉耶の置きみやげを片づけながら教祖の人相を思い描いてみた。神々しいと言うより胡散臭い笑顔を浮かべた老人が頭に浮かんだ。
「そうそ。オレも気になったんだけど、教団発足時からの信念だとか言うんだよね。人を悪魔から守るのが原点だとか。その悪魔は人を食べて生きる気力を奪って行ったとか言うんだぜ。まるきりオカルトじゃんか」
腕を組み、冷笑を鼻に乗せてストレスを吐き出す。携帯電話に話しかけるミナへ冷めた視線を向ける。ミナは茉莉耶相手に何事か説得していた。
「マジで悪魔のことなのかね。悪魔ってタナトスとか、そういうもんの比喩だと解釈してたんだけどな。死にたい気持ちから人を守る。殺すの反対。生かす」

彼はくるくると指を回している。
「多田野の父さん自殺だっけ。それでか」
一十はミナを見たまま頷いた。一十は人を生かしたいと願っているらしい。
彼の父親にその気持ちは起源を求める。一十の父親はリストラを内々に決定されたものの、表だってその支持は受け渡されず、自分から退社願いを出させるようし向けられたらしい。過酷な社内での虐め、冷遇。それを苦にして彼らの思惑通りに動いては退職金をもらえない。そこで父親は思いついた。無理矢理にでも退職金を回収する方法。自殺。自己都合で減額されてしまっても、在職中なら退職金は出る。おまけに家族が一人減る、つまり食い扶持も減る。きっと生活保護の申請にも有利に役立つはずだ。そう考えたらしい。ある日スーパーのパートから一十の母親が帰宅すると、居間で首をつった彼の体が揺れていたという。一十がどこかズレた性格の茉莉耶にも隔てなく接するのには、こうしたわけがある。
「オレはさ、何があっても自殺だけはして欲しくないわけよ。無駄に死んで欲しくないわけよ。グレーな熱帯魚は生かす。それがオレのモットー」
「グレーな熱帯魚？」
歯を見せてへらへらと一十は笑った。
「病気にかかったかどうかわかんねー熱帯魚だよ。オレなら、病気をうつされても一緒に生きていたいよ。生きていて欲しいよ。そんなわけで、ま、リーダーに言われてさ、犯人探しって確かに被害を減らす力になるかもしんないとか思ったけど、やっぱオレはいいわ。オレには少し名主さんは疲れる。オレはオレの出来る事だけする。今日もティッシュづくりに励ませてもらうよ」
「オカルトでも賛成はするんだな」
「結果論としてそのオカルトが母さんを救ってくれたんなら、オレはそのオカルトを認めるよ」
一十はアメリカ人のように肩をすくめた。ひらひらとミナへ手を

振って店を出る。俺も茉莉耶を追いかけるために店を出ようかと考える。彼女の行き先は、突拍子もない行動の後でもひとつしかないだろう。俺のシェルターでもある彼女の実家だ。そう考えれば、茉莉耶の生きる空間が余りにも閉ざされていて少し心が寒くなる。

「名主、俺も今日は帰るぞ」

テーブルに手を突いて腰を浮かせると、斜から白い手が伸びてくる。水分を適度にはらんだ柔らかい手の平が俺の手の上にかぶさった。

ミナが俺へ上目遣いに首を振ってシグナルを送る。ちょっと待ってと請われたらしい。俺は元の場所に腰を置き直す。ミナが、手首までしっかり握り込んで手をどけないため、自分の腕がテーブルの上で遠かった。姿勢がきつい。席をミナの向かいへずらす。俺はミナと茉莉耶会話の終了を、どう頑張っても俺の手首を一周するには小さいだろうミナの手を見ながら待つ。ミナの指は細く長く、全く節が見あたらない。化け物じみた優美さを放つ白魚の指。爪は丸く揃えて透明のマニキュアだけが塗られている。手の甲に比べて指の長さが尋常でないせいか、テーブルに指先がぶつかり、俺の手首との間に隙間ができていた。もしかしたらと考えて、彼女の手を持ち上げその手指が俺の手首を一周するに足りるか試みようとしていると、その手が空中で弾けた。

「ごめん、お待たせ」

テーブルの向かいでミナのいつもの笑顔が咲いている。俺の手を払ったパーから、ミナの手が俺の指の間に入り込んだ。

「茉莉耶ちゃん店の外まで戻るって。突然飛び出しちゃったことめちゃくちゃ後悔してたよ。いい子だね」

さっき厳しい言い方で茉莉耶を臆面もなく非難した当の本人とは思えない台詞だ。

「心にあることを言えよ」

手を自分の方に引きながらカマを掛ける。離れるかと思ったが、ミナの手は距離を保ったままついてきた。

「言っていいの？」
喉の奥をさえずらせて笑う。自身の手を追い、追い越してミナの口が俺の耳へ彼女の笑い声を直接運ぶ。
「言ってみろ」
遠慮するそぶりがない事に、若干の不快を覚えた。
「茉莉耶ちゃん危険だよ。あれじゃ、人殺ししても仕方ないって言ってるみたいじゃない」
「茉莉耶を疑ってるのか？」
「そうかもしれないし」
ミナが俺と正面から目を合わせた。
「警告してるのかもしれない」
俺は眉間にしわを寄せ、不快と不可解を主張する。
「別れて」
「何でそんなこと言われないといけない」
「だって好きだから」
ミナの茶色い瞳が店内の間接照明を照り返して、小さな光をぐるぐると散していた。獲物を見る目だと思う。ずっと見つめ合っていると冷汗がシャツを湿らせ体温を奪って行った。喉の奥が苦しくてうまく呼吸できない。
「殺しちゃうかも」
「誰が、誰を？」
「私が、茉莉耶ちゃんを」
泣きそうな声で笑う。ミナの指がいたわるように俺の手の平をなぞった。
「要君！」
背後で名前を呼ばれ、金縛りが解ける。茉莉耶が息を切らせて立っていた。俺は安堵する。
「茉莉耶、帰ろう」
ミナの手を払い、相手を見下ろした。ミナが小さくバイバイ、と言う。俺の心の中は真っ暗で、何も考える事が出来なかった。

殺しちゃうかも。
悪い冗談だ。

†

2.

飛び出しちゃってごめんなさい、すぐ謝ろうと思ったんですけど、電話がつながらなくて。

茉莉耶の言葉に思いだし立ち上げた携帯画面には、やはり知らない市街局番が気味の悪いほど並んでいた。電源を入れるなり新しい電話を着信する。俺は舌打ちして電話を受け、原典が事故で病院に運ばれたことを知った。

「営業周り中に倒れたんだってさ」

「大丈夫なのですか？」

「交通事故で手足骨折したらしいな。二三日入院してないとだめだって。幸い頭はやられてないけど」

原典はトラックと衝突事故を起こしたと伝えられた。新薬のサンプルを携えての移動中だったらしい。普段は研究職と事務の中間みたいな仕事をしている原典は、定まらない役職のせいか融通が利くのだろう、忘れ物をした営業マンの補助という形で外回りにかり出された。事故の現場は俺の学校の近く。原典の運転する車が不意に車線をはみ出したと目撃した通行人が証言している。居眠り運転か、わき見運転か。俺の心の中に呆れが生まれる。車くらい、無事故で運転して欲しい。

俺と茉莉耶が案内された病室の前に行くと、先に来客があるのか、中からくぐもった話し声が聞こえた。俺達は外でしばらく待つ事にする。

「商売の方は順調そうじゃないか」

「商売だなんて言うなよ。オレはみんなの幸せがどうすれば実現できるか、それだけを考えてやってるんだから」

「企業の社長はみんなそんなことを言う」
「亜種。お前まだそんな子どもじみたことを思ってるのか」
「お前には才能があったよ。私にはわかってた。いつか人を束ねる存在になるだろうってな。だけど、私はお前に救われなかった」
「痛い所を突くな」
「……すまない」
会話が途切れ途切れに聞こえた。低い声のとつとつとした会話で、原典も話し相手も何かを懐かしむように声を重ねているが、次第に重苦しい雰囲気が比重を増し、聞いているこちらが息苦しくなる。盗み聞きにならないよう、近くの待合室へ移動した。茉莉耶と肩を並べて座り、時間をつぶす。
「さっき名主が茉莉耶を」
ミナが茉莉耶について言ったこと茉莉耶が殺人を犯した可能性の指摘。ミナの茉莉耶への殺意。これは伝えておくべきだろうか？
隣から茉莉耶が俺を見上げる。そのぼんやりとした口元が、やや引き締まっているような気がした。
「名主さんが何か言ってたのですか？」
彼女の声に臆病のビブラートがなかった。しっかりとした茉莉耶の声はなめらかで少し暖かく、俺の鼓膜をくすぐる。なぜか心が冷たくなる。
「ん」
俺は茉莉耶の首に右の手を添えた。伝える必要はないだろう。茉莉耶に不用意な心配をさせたくなかった。俺が気を付けていれば問題ないはずだ。右手を茉莉耶の口元へ滑らせ下唇をなぞる。両手でその口を横に引き延ばした。茉莉耶が驚いて暴れる。
「何もない。笑ってみ」
唇を引き延ばされた状態では何を表現するのも難しいのだろう、奇妙なうめき声を上げる。俺は乾燥した笑い声を少し出した。
「嘘。好きにして良いって」
茉莉耶が不満げな目線を送ってきた。遊ばれたことが面白くない

のか、その視線には不穏な物が見え隠れしている。唇を引き延ばしたままその顔を賞味していると、通路から人の声が響いた。男性数人の声と、足音。俺たちはじゃれ合った状態で首のみを巡らせそちらを見る。三人の男性。ひとりは上等そうなスーツを着て、首に上品な毛皮の襟巻きをしている。彼に付き従うように歩くふたりはそ、それぞれ原典も着ているような安っぽい漆黒とグレーのスーツ。先頭を歩く上等スーツの男は野心溢れる実業家ぜんとした面構えで三十代半ばの若々しい肌に生気をみなぎらせていた。尖った鼻が非常さを印象づける漆黒スーツの男が、「次の予定は」、と手帳を開く。光を吸って真っ黒なスーツの上で、何かがキラリと瞬いた。目をすがめて注視すれば、直角に交差するよう組まれた金属片。それが彼の首もとから下がっている。

「次は市の公民館で講演会があるからそのうち合わせに」、と予定を確認しつつ連れだって歩く彼らの背をぼんやりと見送り、そのまま待合い所の端に据え付けられた時計に目を移す。病室に案内されてから半時間が経っていた。

3.

†

原典は寝台に横たわらず腰掛けていた。弧を描くように腕を動かし、俺たちに備え付けの丸イスを示す。座る気はなかったためその所作を俺は黙殺した。

「事故ったんだって？」

俺が口を開くと同時、原典も痩せた口を開く。

「その子が今付き合っている子か？」

原典のまっすぐな目にたじろいだ茉莉耶が一歩後ずさる。原典の問い方は俺に下手なごまかしを許さない威圧感があった。彼にしては珍しい。俺は頷く。

「そうだよ。名前は佐藤茉莉耶」

「佐藤茉莉耶さんか。こんにちは」

「こんにちは」

原典の猫なで声に、茉莉耶が消えそうな音量で返事をする。首から上は茹で上がって真っ赤だった。

「確か、今年の四月からだよな」

原典に、茉莉耶を意識し始めた時期を的確に指摘され、俺は内心驚く。妙な気恥ずかしさが渦巻き、それはこのタイミングで何を、という反発心へ変質する。

「要は大切にしてくれてる？」

茉莉耶の首が赤ベコになる。

「嫌なことされたら私にいつでも言ってくれてかまわないよ。たまにそちらにお世話になっているみたいだが、いつも感謝してる。茉莉耶ちゃんって呼んでもかまわないかな？　茉莉耶ちゃんは大人しそうだから、要みたいな乱暴な奴だと落ち着きのなさにはらはらす

るときもあるんじゃないかな。要のことは好きかい？」
頭をゆらゆらと上下させて答えていた茉莉耶は、最後の質問に答えたところで頭の血管が沸騰しきったのか、体を揺らめかせた。倒れそうになる彼女を支える。
「父さんは関係ないだろ。今まで何も言わなかったじゃないか」
原典は、病院の備品である安っぽいプラスチックのカップに入った紅茶を飲んだ。
「息子がお世話になってる子だからな、いろいろ聞きたいこともあるんだよ」
「怪我して意識不明になったんだろ、大人しく寝てろよ」
頭に巻かれた包帯を鼻で示しながらぼやくと、原典は青白い顔でひっそりと笑みを浮かべる。彼の手に持たれた白いカップが磁器のように熱をはらんだ。
「せっかく紹介してもらえたんだ、そういうわけにもいかないよ」
つ、と面を上げる。
「こんな形とは言え、茉莉耶ちゃんに会えておじさんは嬉しいよ。今後も末永く息子と付き合ってくれるかい」
父親面を、と思った。あまりにも陳腐で駆け足な言葉の奔流。茉莉耶を連れて来た事を胃壁が溶けるほど後悔した。ふわふわと頼りなく頷いた茉莉耶に、それでも原典は満足したのか皺の寄ったスーツの下の背筋を伸ばす。
「ところで要」
「何」
目尻に皺をいくつも蓄えた彼へ、挑発的な返事をする。
「この子とはどこまで、」
「おい！」
俺の大声に原典は目を見開いて瞬きした。間を置いて何かを理解したのかゆっくりと口元を緩める。骨折した足に負担がかからないようにだろう、しめやかに喉を揺すって笑う。
「どこまで真剣にお付き合いしているんだ？　やましい質問ではな

いと思うけれど」
「逆に清純過ぎてうざってぇよ。どうでもいいだろあんたには」
「どうでもよくはないと思うけどなあ」
煮えきらない調子で原典は食い下がる。
「彼女の前ではっきり言えないくらい適当だと思われるんじゃないかな」
俺は舌打ちする。
「真剣だよ。大まじめだ」
「将来のことは考えたことはあるのか？」
「なんでだよ？」
「私は、茉莉耶ちゃんさえよければ結婚してくれてもかまわないと思ってる。いや、かまわないと言う気持ちではなくて、もっと、真剣に望んでいる」
「はあ！？」
驚愕が胃袋からほとばしり、俺は慌てて自身の口を塞いだ。
「何なんだよ、いきなり。何考えてんだ。こっちの都合ももっと考えろよ。結婚とか、いきなり……バカじゃねぇの。じじぃ。頭も骨折したんじゃね？」
俺は矢継ぎ早に悪態をつきながら丸イスを蹴飛ばした。派手な音をたてて倒れ、転がる。その様を眼球に映しながら、俺は自分の内側でざわめくものに名前を付けかねていた。怒りか。違う。もっと複雑な感情の集合体。ただ立っているだけのことが途端に不安になって、病室を歩き回る。壁に背中を預けることを思いつき、入り口の扉の横に身を定めた。ゆっくり息を吐いて呼吸を整える。人心地を得ると、原典のおめでたい発言が憎らしくてたまらなくなった。
茉莉耶がさっきの位置からじっと俺を見守っている。原典は転がったイスへ腕を伸ばして立たせようとしていた。
「おい」
原典を呼ぶ。
「あんた、何様なんだよ。父親面なんかすんなって。そんなことし

ても寒いだけだからさ、いまさら」
投げつけた拒絶が、ブーメランとなって俺に突き刺さった。俺は病室の壁を爪で掻く。いまさら。その四文字に込めてしまった自分の気持ちに悪い意味で涙が出そうになる。後頭部を壁に打ちつけて気を静めた。耳鳴りが押し寄せる中、無理矢理にこの茶番を終わらせる。
「茉莉耶、もういいよ。十分わかった。こいつはピンピンしてる。帰ろう」
イスを起こしていた茉莉耶が弾かれたように俺へ寄った。
「父さん、後で下着とかいるものだけ受付に届けるから」
「待て、要。今日は」
「いいっていいって。俺のことはほっとけって。な、今まで通り、気楽にやろうぜ」
原典の目から一気に感情が抜け落ちて行った。透き通って何もない瞳が音もなく俺へ向けられる。俺は彼に好青年に似せた嘲笑を与える。
もう、何もかも手遅れだ。原典に俺は何も期待させないし、俺も原典に何も期待していない。何も、ない。
劣等感だけが虚無と仲良く転がっている。
「じゃあな」
「おじゃましました。お大事にです」
茉莉耶がお辞儀をした。
俺は無性に心臓が痛くて、しばらく病室の前から動けなかった。

†

4.

タンスの中から下着類を三日分出して揃える。原典の部屋は整頓されてはいたものの、部屋の隅という隅に埃が溜まり、そばを歩く度に灰色の綿毛がふわふわと漂った。長い間、掃除されていなかった事が伺える。それも一ヶ月や二ヶ月という単位ではないだろう。俺は、持ち主が死んでしまった後のように生気を欠いた部屋を暗澹とした気持ちで見回した。畳まれた布団、タンス、古ぼけたテレビ、ベニヤ板をつぎはぎして作った本棚。ベニヤ板の本棚がこの家に誕生したのは、俺がまだ小学校に上がる前だ。よく晴れた夏の日。陰である屋内と、太陽のある屋外の明度差は両極端なほど大きく、リビングから裏庭を見れば、そこに光の壁があるようだった。俺は、牛乳に浸した不味いシリアルをスプーンでひとすくいひとすくい地道に口の奥に押し込んでいた。原典は家の中にはいなくて、時折光の壁から顔をこちらに突き出して俺と目を合わせて笑ったり、暑そうに手ぬぐいで首元を拭ったりしていた。途切れ途切れに聞こえていたのは柔らかいが高く澄んだ打撃音。彼がその時作っていたものがこの不格好な本棚。あれは、後にも先にも原典が人らしい営みをしていた、俺の中にある唯一の記憶だ。絵に描いたみたいに、不出来でアットホームな日曜大工の記録。

本棚はいびつに右へ傾ぎ、上辺が短く底辺が長い台形をしている。右側に重たいものを乗せると崩れてしまうのか、本棚の役割を果たしているのは左半分だけだった。軽く押すと軽く傾斜が加速してその不安定さを如実に物語る。本棚の下三分の一は棚が取り付けられ中身が見えない。俺はその棚を無意識に引き開けていた。おそらく、幼い頃の記憶にその蓋が付いた引き出しがなかったからだろう。あ

るいは、本棚の周囲だけ埃が四角形に切り取られて、きれいな床が露呈していたからかもしれない。引き出しを開けると、さっき棚を押して傾がせたためか、中から菓子箱が転げ出て中身をぶちまけた。ほこりの積もった床に転がるは、細長いガラスの瓶。床に散らばった瓶が一本割れ、さらにその中身を辺りに散布する。きつい、鼻の奥から粘膜をめくりとるようなにおいが立ち上って、俺は慌てて自身の鼻を覆った。菓子箱から瓶と一緒にこぼれた紙を拾う。原典が勤める会社の社名が書かれ、薬品名が筆記体で記されている。研究職でもない彼がこのようなものを家に持っているというのは一見不可解だが、彼のコウモリじみた役職からすると全く理由の見あたらない事でもない。きっと例によって預けられたサンプルか何かだろうと瓶を集める。菓子箱へ納めようとして俺は手が止まった。菓子箱にはまだ、空の瓶や脱脂綿、スポイト、ビーカー等、およそ理科の実験でしか使わなさそうなものが収まっていた。嫌なものが思考の端をちらついて、俺は強く目を閉じ頭を振って追い払う。サンプルの説明に必要なのかもしれないだろう？　薬品のにおいが強く、頭の芯がどことなくもうろうとし始めた。菓子箱を棚に戻そうとして、俺の体は衝撃に痺れた。本棚からとんでもない物を発掘してしまったのだ。俺には掘り出してしまったもの対するどんな理由付けも思い浮かべることは出来なかった。そこにあったものは既に捨てられたはずのもので、本来そんな使われ方をされるはずのないものだった。

そっと伸ばした手がそれをつかむ。優しいがややごわごわとした手触り。

酸化して黒い血液痕のある、原典と俺の、バスタオル。

5.

†

原典が連続殺人鬼だったのか。血の痕が付いたバスタオルはどんなに思考を逸らせようとしても、その一点へ俺の意識を集中させてしまう。ここ最近原典が急にそわそわと家事を行い始めたことの理由付けにもなってしまう気がして、俺はいたたまれなさに家を飛び出した。腹の底が静かに波打っている。波打たせているのは、シンプルな驚愕ではない。俺は自身のわき腹を服の上から押さえて認める。悔しさ、悲しさ、失望。裏切りへの怒り。怒りが証明する、そこにあったはずの期待。

畜生。

俺は電柱のぐるりに立てかけてあった犬猫避けのペットボトルを蹴り払う。

俺は原典に期待してしまったのだ、ひっそりと半ば幽霊のように日常と日常の間を浮遊する彼が、俺のいる世界に来てくれることを。俺と同じ世界で生きてくれることを。しかし、現実は違った。原典は浮遊する事をやめたかもしれない。俺に背を向けて生きる事をやめたかもしれない。だが彼が選んだのは俺のいる世界ではなく、もっと遠くのすさんだ空間だった。奈落の底へ自らを放擲するに等しい、後戻りの効かない人外の道だった。何かを叫びたかったが、喉は何の音も結ばず、ただ呼気の叫びだけがほとばしる。

向かいから来た女性がオーバーコートの襟をかき合わせていた。身震いした彼女と目が合う。瞬間、彼女は痛ましいものを見たように目を逸らす。それからまた、そっと視線をこちらに送る。哀憫の情を示されて、俺はますます行き場を見失った。背筋を伸ばし、ポーカーフェイスを装って胸も張る。その裏では女性の態度に劣等感

が刺激され、憎悪にも近い濁って熱いものが脳内を渦巻いていた。額に汗がにじみ、鼻の頭からこぼれ落ちる。どうしてこれほどにも俺には居場所がないのか。その問の答えは明らかだった。俺がどこにも居場所を求めて来なかったからだ。ただ一カ所、『家族』という空間以外には。体温がさらに上昇し視界が揺らめいた。

俺は択一で今現在目指すべき場所を決める。

茉莉耶。

彼女が持つ居場所のなさは、俺のそれと似ているから安心するのかもしれない。そうだったとしても、俺が彼女を求める最大の理由は別の点にあった。

気持ちが良いくらいに安定して噛み合うのだ。俺の持つ劣等感と、茉莉耶の抱える自虐心が。

俺はまだ、劣等感と自虐心が噛み合う理由を考えたことはなかった。二つのつなぎ目を探ろうとすれば、必ず頭が割れるように痛くなり、深い眠気に襲われる。無気力感が心肺を飲み込み、思考停止を余儀なくされてしまうのだった。

†

6.

「白菜はね、親戚に農業やってる人がいて送ってもらってるの。とてもおいしいわよ」
「野菜ばっか食べてないで肉もどんどん食べなさい」
「何か食べたいものがあったら行ってね。まだいっぱいあるから」
「食後にはアイスクリームがあるよ」
もうもうと天井に向かう湯気の向こうで、佐藤夫婦が俺に鍋を勧めて来る。俺は原典の事で全く食を受け付けなくなった体内の生命管に無理矢理鍋の中身を押し込んだ。茉莉耶の母親は、俺の皿だけでなく茉莉耶の皿にも野菜やら豆腐やら豚肉やらを山盛りにする。茉莉耶は俺の隣で窮屈そうに箸を動かしていた。ご飯は粒単位で口に入れて、鍋物は無意味に何度も箸で突き崩している。彼らの実娘の挙動が余りにも食欲不振であるため、来客である俺まで憂鬱そうに振る舞うわけには行かない。いつもの自分を必死で思いだし、その動きをなぞるように箸を動かす。食卓には質の揃った豪勢な食材に加え、ごまだれやゆずポン酢、塩ポン酢など種々並べられたが、全く味の違いは関知できなかった。もったりと重たい糊を食べているような気分ばかりが続く。糊を一心不乱に食べる。機嫌を損ねた食道に食べ物を通す度息苦しさに襲われ、そのたびに愛想笑いが途切れる。食べることに注意を傾けて表情にまで気が回らない俺でも居ると居ないでは、夫婦の気の持ちように大きく変化をもたらすらしい。夫婦は終始朗らかで活発に口と手を回転させていた。おそらく、茉莉耶に緊張を味わわせまいという気遣いも含まれていたのだろうが。
食べ過ぎてそろそろ本格的に苦しくなった。食前に催した吐き気

が再来した辺りで、夫妻の気分も落ち着き始める。話の方向も俺の皿の中身から、佐藤家の内輪話へ流れを変えた。
「そう言えば、最近田中さんのお宅、事業が成功していい感じみたいよ」
声のトーンを低めて母親が話題を持ち出す。
俺と茉莉耶はうつむいて黙々と箸を食卓と口の間で往復させていた。夫婦の会話という物は、縁遠いだけに興味深く、耳が自然とそばだつ。
「田中さん？」
「ほら、斜向かいの隣の。以前破産申告寸前でものすごくカリカリしてたでしょ？　うちの家の前に訳の分からない張り紙したり」
「ああ、お向かいさんは鉢植えを全部ひっくり返されていたなあ。無事だったのは植木だけで。かわいそうなことをするよなあ。その田中さんが今？」
「そうなのよ。お詫びに少しでも愛想良くしてくれたらいいのに、今度は居丈高に無視よ。昨日偶然見かけたんだけどね、ちらって奥さんとお子さん、まだ幼稚園ぐらいの男の子よ、そのふたりがこっちを見た時の目といったら。冷たい目でぞっとしたわ」
「お金で人生左右されるなんて情けないなあ」
「ほんとに」
「でも、少しうらやましいね。うちの会社も景気になってくれればいいんだが」
俺の隣で茉莉耶が箸を食卓にぶつけた。イスを鳴らして立ち上がる。
ぎょっとした風に夫妻は娘を見る。茉莉耶の反抗的な態度を経験するのが初めてあるのが手に取るように理解できた。彼らは不思議なものを体験したみたいに、どこかぼんやりとした表情をしている。
「お母さん、お父さん、そんな会話、要君の前で止めて下さい」
俺も佐藤夫妻と大差ない表情で茉莉耶を見上げた。
「ごちそうさまでした」

茉莉耶は粛々と手を合わせ、食器を流しに運び、そのまま自室へ消えてしまった。
「あなた、」
感極まった声で母親が父親を呼ぶ。
「ああ」
父親は、それより幾分か冷静さの残る声で応えた。
「茉莉耶が私たちのことちゃんと呼んでくれたわ」
「ああ」
「ちゃんと言ったわよね。聞き間違いじゃないわよね」
「ああ」
ふたりはしばらく見つめ合い、母親が泣き崩れ、その肩を父親が抱きしめる。
俺は茉莉耶が何の前触れもなく彼らを両親呼ばわりした事に衝撃を受けて、口の中にあるものの咀嚼を忘れた。口の端から白菜がまろび出る。慌てて拾って口に入れた。茉莉耶が、彼らを親と認めた。頑としてに彼らにくつろいだ姿を見せようとしなかった茉莉耶が。その頑なさは岩よりスッポンより山より堅固だと思っていた。血のつながった実の親をわざわざ他人のように扱うほどに根深かったのだから。俺は何があったのか理解できないまま、急いで茶碗の中身を口に詰めると、不明瞭なごちそうさまを感涙している夫妻に伝え、茉莉耶を追った。彼女に質問を重ねてみたが、茉莉耶は自身が両親をお母さん、お父さん、と呼んだ事のきっかけについては曖昧に言葉を濁して答えない。しばらく雑談をして茉莉耶の変化を検分しようと試みたものの、俺自身、心の中が千々に乱れていて茉莉耶どころではなかった。
「要君？」
猫を膝に乗せその背骨をたどるように撫でていると、茉莉耶が俺の耳に口を寄せて呼ぶ。突然大きな声を投げかけられて、俺は肩を跳ね上げた。
「そんな大声で呼ばなくてもいいだろ」

「すみません。要君ぼーとしてました。さっきから少しおかしいです。お父さんが病院にいるの、心配ですか？」
「心配じゃねぇよ、あんな奴」
「あんな奴って、あんまりですよ」
とがめる風は全くなくて、むしろ愉快そうに身を折る。俺もちょっと言い過ぎかもな、と口先だけで笑った。それから茉莉耶の宿題に付き合い、茉莉耶は解けない数式に、俺は溶けない茉莉耶の頭に疲れはて、なし崩し的に就寝することになった。いつものようにベッドの上と下に分かれて寝る。部屋の端にある電気スイッチを切り、冷たい布団の中に潜り込む。暗闇に、天井の蛍光灯が青白い輪になって残った。天井を周遊する光の残映が、ぐるぐると回るメリーゴーランドと重なった。茉莉耶がかつて俺に話してくれた事を思い出す。彼女が遊園地で風船を追いかけていて迷子になったときの話。遊園地のキャラクターは確かウサギだったと言う。茉莉耶の興味関心は風船だけに注がれていたから、ぬいぐるみの子細までは記憶していない。青い空に浮かぶカラフルな風船の群。風船に見せられて追いかけているうちに、茉莉耶は帰り道を見失った。自分の家のイメージを失い、自分の両親がどんな姿だったかを忘れ、自分が誰だったかを忘れた。美しい色彩に心を奪われ、迷子センターに保護されてからも、自分の名前一つ言えなかった。茉莉耶がまだ二歳か三歳くらいの頃の話。以来、彼女にとって原始的な母親父親というべきイメージは喪失されたままだ。現在の両親を実の両親と認識することも不可能なまま時は無為に積み重ねられている。もしかしたら。もしかしたら、茉莉耶は自分が誰なのかもわからないまま今に至っているのかもしれない。そのために外界から与えられる役目に安直すぎるほど従順に自己同一性を求めてしまうのかも知れない。例えば、いじめられる事こそが自信の存在意義だと勘違いしてしまったように。
けれども、誰だってそういう瞬間はあるだろう。自分が誰なのかわからなくなったり、自分が繋がっているべき場所がわからなくな

ったり、周囲の環境に合わせて自信を擬態したり。なんてことは、むしろ、当然のように。

呼吸が深く長くなり、意識がレム睡眠層に差し掛かる。体がふわふわとたゆたうように夢へ溶け込む頃には、布団の中の空気は程良く温まっている。

7.

†

――被害者を発見する前、夜中、私は彼女が床を抜け出す気配を察知し追いかけた。

眠る俺の体を誰かが揺する。激しく揺する。頭がぐらぐらと前後左右に倒れ、耳鳴りが両の鼓膜を圧迫する。

「要君！　要君！　目を覚まして下さい、お願いします、要君！」

「うるさいなぁ」

腕を引く茉莉耶の手を振り払った。

「ひっ」

茉莉耶が短い悲鳴を上げて、弾かれ重たい音を立てる。しりもちを付いたのだろうか。俺は全身を撫でさする冷たい空気に違和感を覚えゆっくりと瞼を持ち上げた。視界が次第に明瞭になり、街灯に照らされた青暗い屋内が広がる。密やかな雨の音がしていた。一つ一つの滴は小さく細かいが、降雨量は通常。幾重にも重なる雨の筋。見たことのない炊飯器と電子レンジ、テーブルがぼんやりとその輪郭線を浮かび上がらせる。俺はシャツの袖で目をこすった。湿ったものがべっとりと顔につく。糊だろうか、ただ顔に付着するだけでなく、徐々に乾燥して皮膚を突っ張らせている。

喉が気持ち悪かった。水を飲みたい。それよりも胃袋がざわついて落ち着かない。まるで大型の甲虫を何匹も飲み下した痕のような感覚がする。胃袋の内容物が派手にうねった。俺はとっさに吐き気を処理しようと流し台へ駆け寄る。

「要君、駄目です、待って、待って下さい！　まだここでは吐かな

いで！　逃げましょう、早く、ここから逃げないと！」
茉莉耶が俺の背中にとりすがり、声を押し殺して叫ぶ。
「やめろ、揺するな……」
吐き気を舌の付け根辺りで懸命に押しとどめて茉莉耶へ向き直った。茉莉耶の背後からぼんやりと街灯が差し込んでいる。俺は部屋の間取りに疎外感を覚えた。そう言えば俺は布団の中で寝ていたはずなのに、なぜこんなところに突っ立っているんだろう。街灯が雨の幕を受けてゆらゆらと光を明滅させる。胸の中でうごめく不安の正体を突き止めようと部屋を見回した時。
大気がビリビリと振鳴した。半拍遅れて雷光が部屋の中を明と暗にコンマ零点零零零一秒単位で分かつ。三半規管が狂わされて俺はふらつきたたらを振んだ。こめかみを手のひらの付け根で押さえる。足が何かを間違えて踏み、俺は転倒した。
「大丈夫ですか？」
大丈夫、そういいさして、口から鼻から進入する異臭に目を見開いた。
俺は人間の上に倒れていた。人間の体にはやや冷たくて触り心地が悪かった。俺はその人間のつま先を目を凝らして見た。つま先が白い輪郭線を闇に映じている。俺は目をすがめてさらに遠くの気配を探知しようとする。人間の頭部らしき物があった。そう、四日前の夜と同じく、人相の悪い髑髏が転がっている。奇妙につり上がった口をして、光を反射する瞳をこちらに向けている。
床をまさぐってみれば、死体の数は一つではなかった。男性、女性、そして幼い男の子。茉莉耶が男の子と俺の間に割って入り、接触を奪った。彼女が着ているパジャマの襟も血に塗れていて、抱きつかれると俺の頬の上で不快にぬめる。
「いったいこれはどういうことだ？」
「なにも心配しなくていいんです。早く逃げましょう」
「逃げる？　何から？」
俺はカタカタと身を震わせる。全身が血に染まっているためだろ

う、服に体温を吸い上げられているのだ。奥歯同士がぶつかり軽い音が口の中から漏れ出す。

「要君」

茉莉耶が気遣わしげに俺の目をのぞき込んだ。その透き通った瞳がおぞましくて反射的に突き飛ばす。吐き気がぶり返し、よろめきながら立ち上がった。口の中に粘つく違和感。ざらつく舌に残る臭み。奥歯に挟まる肉片。喉の奥に指を突っ込んで、この胃に鎮座する痛みを取り除きたい。全身を覆う不浄な液体の痒みを洗い流したい。

もう一度、夢なのかもしれないと言う期待を抱えて足下を確かめる。そこにあったのは紛う事なき現実、阿鼻叫喚の地獄絵図。雷が瞬き、部屋を照らし出す。転がる、首のない人体、手が不自然に曲がった人体、壁際へ逃げ、虚空へ救いの手をさしのべ絶命している人体。窓からの光を受けて白っぽく浮かび上がる茉莉耶、彼女の瞳はこの状況を憂うことなく、俺に向けてただ一つのことだけを指示する。

「逃げ、」

皆まで聞かず、俺はその部屋から飛び出した。大量に酒を浴びた後のような胃袋の据わりの悪さが走ることで増す。体内の熱が胸を圧迫し、重力とは無関係に回転する平衡感覚による酩酊感が吐き気を助長する。おぼつかない足取りで知らない家の洗面所を求め、そこで胃の中身を吐き出す。どす黒い液体が大量にシンクに溢れ、下水管へ飲み込まれて行った。噛み砕き切れなかった骨片や、丸飲みしたらしい肉片も口から飛び出す。舌を這う生臭く柔らかい肉の感触に、昨夜食べた鍋が思い出されて、胃腸がいびつによじれた。胃液と血液の中に、未消化の白菜やキノコも紛れている。俺は喉に指を差し込み、夢中で胃の中身をたぐり寄せた。ほとんどのものを吐き捨て、喉の痛みと胃袋の収縮に冷や汗が滲み始めたあたりでふと気になり顔を上げる。そこには、濡れそぼった髪が細く捻れて額に張り付き、顔一面に他人の血を塗布した自分の顔があった。目だけ

がやけに白く目立つ。水晶体が周囲に散らばる微細な光を集めて発光している。焦点は怯えるように定まらず、飢えた鬼の容貌で禍禍しい。俺は鏡に手を突く。指がぬめって、血の跡を五本付けた。鏡に映る青白い光点に、他者の存在を関知して、のろのろと首を回す。俺は卑屈で虚ろな目で彼女を見た。彼女が俺を見捨てず、また怯える風も見せないことが、俺から幾分の現実感を奪い、同時に、これは何かの間違いであるという希望的観測を持たせてくれてもいた。

彼女は、胸の上、鎖骨のあたりで両の手を合わせ、眉尻の垂れた不安げな表情で俺を伺っている。俺は洗面台から離れ、ふらふらと左右に大きく傾ぎながら近づいた。近づきすぎて逃げられることを恐れ、彼女から一歩の距離をあけて停止する。

肩を落とし、やっとの思いで真偽を問うた。

「俺が、やったのか？」

茉莉耶が緩慢に、かつ重々しく頷く。

肺から息が落ちた。膝が崩れ、虚脱した身を支えるため脊髄反射だけで前に手を突く。閉じない視界の中で、手の平があらがうようにゆっくりと、血にまみれた拳を固めた。

08：愛した人の夢

†

「見つかっちゃった」
彼女はそう言って笑ったが、そこには絶望と悲しみしか表されていなかった。彼女は、地面から秋桜を摘み取り、花弁を風に散らす。そこは墓地の近くで、誰にも刈り取られることなく野放図に繁殖した曼珠沙華が燃え盛る紅煉の命を灯していた。曼珠沙華が揺れると、炎が揺らめくように風景が幻想的な熱を持つ。
「どうして追いかけてきたの？」
彼女に向けて首を振る。酷く要領を得ない動作だと、自分自身で苛立った。彼女を責めているわけではないのだ。彼女を苦しめたいわけではないのだ。何とかしてこの気持ちを伝えなければならない。
「俺はっ」
彼女が自分の前から消えてしまうんじゃないかと不安で、必死で言葉をかき集めた。地面に足を踏ん張り、愛してやまない少女の姿を見据える。彼女は自分の口に付いた血を無造作に手の甲で拭った。物の怪の姫のように凛と透き通って美しい仕草。
「わたしは人を殺さずには居られない生き物よ。たとえあなたとは言え、食べずにいることはできないわ。本能がわたしを呼ぶの。食べなさい、食べなければおかしくなってしまうよって」
首を思いっきり振って否定した。彼女の眉間に皺が寄り、不審を示す。彼女はこれ見よがしに指にこびりついた血を嘗める。赤い舌がチロチロとうごめいた。黒く長い髪が、彼女の紅色の頬に怪しい影を落としている。
「違う。君は、殺したくてそんなことをしてるんじゃない。君はそんなことをしなくてもちゃんと人間として生きていたじゃないか。

だから、こんなのは一時の間違いだよ、これからは気をつけてさえいれば」
「あなたは、わたしを否定するの？」
「え？」
虚を突かれ、口がぽっかりと空いてしまった。瞬きをする私に、彼女は今度こそ本物の笑顔を見せる。
「あなたはいつもそうね。自分の頭の中でばっかり考えて、保守的で、行動を可能な限り先送りして」
風がそよぎ、彼女の髪を揺らす。
「わたしを一番に見つけたのがあなたでよかった。あなたなら、きっと黙っていてくれるでしょう？　わたしが悪魔だってこと、可能な限り秘密にしてくれるでしょう？」
彼女にじりじりと近寄る。なかなか距離がつまらなくて、彼女が陽炎のように遠ざかり続けているような気分になる。
私の視界の中で、赤く濁った風にもてあそばれながら、彼女は自身の腹を優しく撫でさすった。彼女の腹部は、細い女子高校生の体躯に似合わず、豊かに膨らんでいる。
「私は、もう何人も殺してしまったの。食べてしまったの。だけど、私がここに預かっている命は別よ。この子は私とは関係ない。母親が犯した罪とは。それは、わかっていてね」
念を押すように低い声で言って彼女は髪を耳にかける。曼珠沙華が傲然と揺れた。
「あなたがどんなに言葉でごまかしても、わたしはもう、元のようには生きられないの。元のように生きると言うことは、自分のしでかしたことを、否定することだから」
ううん、と彼女は首を振る。長い髪が大気に濃密な黒の弓形を描く。
「悪魔であることも、わたしの一部なのよ。嫌なことも、醜いことも併せて、全部」
彼女は人差し指を唇に当てた。

「だから、否定しないでね。あなたに否定されたら、悪魔のわたしが泣いてしまうわ」
「逃げよう」
私は、どうにか彼女のそばまでたどり着き、その手を引いた。逃げなければ、彼女は法で裁かれる。いや、彼女におそれをなした人間の心によって裁かれ、彼女の存在は抹消を望まれるだろう。
「無理よ。あの子が気づいてる。あの子は優しいから、わたしが自分で自分の命を絶つ時を待っているわ」
あの子が誰を示すのか、尋ねるまでもなかった。わたしは知っていた。未来の記憶が、過去の記憶に干渉して呼びかける。逃げろ。あの子から逃げろ。どこまでも、可能な限り。
「生きるんだ。自殺なんてさせない」
「そうね、この子が、生まれるときまでは、自殺なんて、しないわ」
力強く握り返した彼女の手に反して、その声は弱々しくエコーをかけて消えて行った。

09：ホントウになる方法

†

原典は全身にびっしりと汗の粒を浮かべて目を覚ました。見慣れない天井が視界に広がっている。夜の色、深く濃い藍色を写し取った真っ平らな天井。そろそろと腹筋に力を入れて身を起こす。自動車事故の激痛が背中を駆け抜けた。

「寝ている場合じゃ」

布団を腕の力だけで払いのける。下半身に布団を巻き付かせたままベッドから落下した。強かに膝と肩、顎を打つ。

原典は夢の続きを記憶をめくって再現する。彼女は言ったではないか。「自分の腹の中の子と、彼女自身は無関係だ」と。なぜ、今まで、そのことを思い出せなかったのか。違う、ずっと思い出していた。ようは、割り切れるかどうか立った。彼女の子どもがこの世に生を賜ると同時、彼女自身はこの世を去ってしまった、その不条理さを因果関係のない事象であると。そして、彼女に死を与えた者の呪言を、戯言だと。

丸イスをひっくり返し、同僚が持って来てくれた花が生けられた花瓶を倒し、牛歩の速度で病室の外を目指す。骨折した右足が恨めしかった。汗が瀧となってリノリウムに落ちる。

初めて要が血みどろで帰ってきた夜。

自分のすべきことは一つしかないと知っていた。要の体から血の臭いを、人外であることの証拠を一掃し、何も気取らせないこと。興奮状態にあった要を、自分のために常備していた向精神薬で眠らせ、記憶が飛ぶことを願った。要を、一人の人間として育てることに、初めて実感を持った。心と身の結びだけで、何らの形式的な結びを持たなかった彼女の名前を心の中で念じて、気持ちを奮い立た

せた。要を、彼女の二の舞にはしない。絶対に、悪夢に気づかせない。絶対に、彼女と同じ世界には生かせない。

病室の扉にすがり、苦労して開いた。廊下に転げ出ると、控えた暖房のせいだろう、冷えた空気が全身を取り囲む。

原典はこの体で進むには気の遠くなるほど暗く長い廊下の先を見た。大丈夫だ。行ける。壁に腕をかけ、片手に力を込め、筋肉をはちきれんばかりに振動させながら膝を起こす。体から流れ出た汗で、寝間着はびっしょりと体に張り付いていた。手の平が濡れて滑る。後少しで膝立ちになれる、その寸前につんのめり、前歯で窓枠に噛みついた。嫌な音がして、前歯が一つ弾け飛ぶ。何とか体制を維持し、ゆっくりと前へ進み始める。

顔面からだらだらと流れるものが血なのか汗なのか、はたまた涎なのかはわからなかった。死の淵からはいでる気持ちでようやくたどり着いた廊下の角を曲がる。その先にも果てしない道が続いている。

はずだった。

「おまえは、」

原典は夢見心地で顔を上向かせる。白桃色の腿が覗くスカートよりも上。闇に溶ける長い髪を悠然と揺らす眉目秀麗。

記憶の中の彼女と寸分違わない姿の少女がそこにいた。

「あなたはいつもそうね」

彼女はきれいな歯並びを光らせた。

「自分の頭の中でばっかり考えて、保守的で、行動を可能な限り先送りして」

ああ、そうだ。自分が何もかもを胸の内側に閉じこめて、誰にも策を求めず、要と向き合う事からすら逃げ続けていたから。抜き差しならない状況になるまで過去に生き続けていたから。

「待って、待ってくれ。お願いだ、まだ、やるべき事が」

すがるように手を伸ばし、少女の足首をとらまえる。彼女は悲しむような笑顔のまま、ほんの僅か、首を傾けた。

†

2.

俺は茉莉耶と共に自宅へ戻り、熱湯でシャワーを浴びた。あれだけあからさまな痕跡を現場に残して明朝まで警察に捕まらないでいる自身は全くなかった。おそらく、前二件の人喰い殺人事件も俺がしでかしてしまったのだろう。そう考えれば、全てにつじつまが合うような気がした。家の風呂場にあるシャンプーもボディソープも、無香料のものだったが、洗浄力は殺人的で、するするとおもしろいように髪や爪に絡んだ血液も肉片も分離させてしまう。品揃えの良さは原典が俺のために買い揃えたのではないかと思うほど。しかしこれらは俺が幼い頃からずっとこの家で使われ続けてきたように思う。原典に見透かされていたような気がして、背筋が薄ら寒くなった。知らぬ間に彼に風呂に入れられていた可能性に関しても、おそらく確定した事実だろうが、思考しないようにする。彼の手の内にいるという発想からして耐えられなかった。今まで俺は全くの野ざらしだったのだから、いまさら飼われていることに気づけと言われても嫌悪感しか覚えない。もうもうと湯気を風呂場中に充満させる。外は激しい雨で、傘もなく移動した俺も茉莉耶も濡れ鼠だった。冷えた体が徐々に温まる。全身に張り付く他人の血肉を下水管に押し込むと、ほんの少しだが身が軽くなった。もっと長い間湯を浴びていたかったが、茉莉耶が凍えて待っている。俺はきっと娑婆の世界で最後になるであろうシャワーの栓を、音を鳴らして絞めた。

茉莉耶にはまだ使われていない原典のバスタオルを用意する。女物の衣服はないから、俺の中学時代のシャツとズボンで我慢してもらうしかない。雨と血を吸った、さっきまで俺と茉莉耶が着ていた服は原典の部屋にあったバスタオルとともにまとめて置いた。バス

タオルを棚から引きずり出すと、濃紺の布が絡まって出て来る。なくしたと思っていたマフラーだった。それにも大量の血液が付着していて、正視に耐えない。俺が着ていた制服も一見しただけではわからないが、そうと意識して見ればぬぐい取られた血液の跡が大量に見つかった。制服も証拠品としてバスタオルなどとまとめる。俺は自首するつもりでいた。合計五人もの人間を無意識とは言え殺めてしまったという罪科は、人生の外に放逐するには重た過ぎるものだ。今は努めてなにも考えず意識を煙に巻いているが、すぐに俺は俺という得体の知れないものにうなされるようになるだろう。視界の縁が痺れたように滲んでいる。意図的に作り出した視野狭搾の世界。思考を「今すべき事」だけに集中させて、一時的に現実から目を背けている。

上着の染みを辿る自身の指が細かく蛇行する。彼方へ逸れて行こうとする指を引き戻そうとして引き戻せず、初めて、俺は自分が震えていることを認識した。認めたら怖くなった。寒い。歯の根を合わせる事すら出来ないほどの強烈な凍えが、皮膚感覚を支配する。胃と言わず、腸と胃わず、肺と言わず、体内の全ての臓物が急激に活動温度を下げていく。恐怖が止めどなく口唇から溢れる。俺の体内には人間が取り込まれてしまっているという非常識への嫌悪感が脂汗に混じって滲む。俺は自分が殺人鬼になってしまった事を拒絶しているのではなく、自分が汚れてしまった事を拒絶しようとしていた。死んでしまった人間の命を憂うのでもなく、殺す力を無作為に振るう自分を忌避するのでもない。ただ、自分が変わってしまった事を憐れんでいた。もう、戻れない。今まで通り学校へ通う事も、一十やその他の友人とつるむ事も、原典に嫌味をぶつける事も、茉莉耶に触れる事も出来ない。大切な物事に関わるには、俺の手はあまりにも破壊に染まりきっている。破壊しか招かないこの手の平で、誰かと平和に安穏と関わっていくことなど滑稽の極みでしかないだろう。それは非常に無粋で恥を知らぬ行為だからだ。

そう考えて、俺は自分を支えていた巨大な柱が砕け散るような感

覚に襲われた。それは、俺の存在意義が、自己同一性が、俺が誰であるかを決定付ける最大の要因が、失われた瞬間だった。甲高い悲鳴がこだまし、あたりが真っ白になって、膝から力が抜ける。筋肉に力が行き渡らず、このままだと床に倒れるなと予感した。だが、なかなか床に到達しない。ただ、底抜けの墜落感が心臓に冷たい風を吹き付けているだけ。

「毛布、いりますか？」

背後で、落ち着いた声がした。彼女の声はしっかりと地に足を着けていて、どこにも無理をしているような気配はなかった。彼女特有のビブラートもない。不意に裏返ってしまう不安定感もない。吃音が混じる様子もなく、あくまでも穏やかで、俺の心に凍み入る。

向き直ると、俺の部屋から持って来た毛布を肩からかけてくれた。俺と目線を会わせるように茉莉耶も床に座し、興味深そうに唇の端をかすかに綻ばせる。

「瞳孔が」

茉莉耶の瞳が上下左右アトランダムに周回する。俺の瞳を追尾しているのだ。

「定まってません」

茉莉耶が右の人差し指だけを伸ばして俺の鼻先に掲げる。

「大丈夫、怖くなんかないですよ。要君は要君です。何があっても、要君です」

それでは。人差し指の先に焦点を合わせようと、冷や汗混じりの苦心をしながら思う。

それでは、俺が人殺しをするような人間だったと見捨てているようなものではないか。

この発想は卑屈だと思った。実際問題俺は人殺しをする悪魔なのだから、人殺しだと思われる事を負の烙印だと感じる事自体おかしい。

はは、と乾いた音が部屋に散らばった。俺の喉から勝手に飛び出す笑い。平静と恐怖のせめぎ合う音。

「わたしは、要君を信じてます。要君が今、どんな人であっても、わたしを救ってくれた要君は、今ここにいるあなたです」
茉莉耶の指が俺の額に据えられる。彼女の真剣な瞳が、どこまでも俺を追いかけて来る。
俺は恐る恐る、実際はがむしゃらに、茉莉耶の腕を掴んだ。体を抱き寄せ、自身の胸にあてがう。手加減が出来なかったせいで、茉莉耶の口から呻き声が漏れた。その音は俺の耳朶を熱くひっかく。茉莉耶の首もとに顔を埋めた。むさぼるように湿った髪の奥へと鼻をはわす。無香料の石鹸のにおいがした。オリーブ油の瑞々しく澄んだにおい。気持ちを安らげる効果を持つ清純な香りの粒子。
「茉莉耶」
顔を埋めたまま呼ぶと息がくすぐったかったのか、くつくつと彼女の体が震えた。
「いい？」
何がいいのか、具体的に尋ねずとも、茉莉耶は俺の心中を的確に汲み取る。
「いいですよ」
許可を得て、俺は彼女の首に舌を這わせた。人の肉を咀嚼して、この上なく汚れてしまった舌で、茉莉耶の肉体を愛撫する。うなじから顎の付け根、喉、瞼、鼻。さすがに躊躇って彼女の唇の周囲だけに口付けていたら、茉莉耶の方から口を開いた。舌と舌が交わる。
リビングで、暖房もつけず、一枚の毛布の内で俺たちは互いの体温をむさぼり合う。
「なあ、知ってるか？　俺がお前を好きな理由」
薄い布一枚をまとった柔らかな体温に直に触れたくて、シャツのボタンを外しつつ問うた。今この瞬間まで、俺自身理解出来ていなかった事実だった。俺が無性に茉莉耶に心を惹かれた理由。恋心の種を明かしてみれば、殺風景なものが一つぽつりと残った。明かされたマジックの種のように、幻想的なものはかけらもなく、ただ人のサガと称すべき物理的なものだけがある。

「知ってましたよ」
茉莉耶の返答は意外なものだった。俺は思わず指の動きを止める。彼女の胸にぴたりと頬をつけて、心音だけを聴く。確かに脈打つ心臓の音。彼女の呼気に合わせて、少しだけ速い。
「俺は、弱い存在が好きだったんだ。弱い存在を救って、俺という生き物に存在価値を見いだしてた。お前に感謝されたくてお前を俺の側に置いてた。世間からお前を守り続ければ、お前は俺をありがたがってくれるだろ？　笑っちゃうよな」
彼女の顎骨に沿わせてた俺の手に、茉莉耶の手が重なる。俺は認識した己の醜さに泣くことしか出来ない。情けなくて涙なぞ出やしなかったが、笑う余裕もなかった。必死の演技で笑っている風を装う。
弱者を救う強者の振り。
それが俺のアイデンティティだった。
「要君は、もし、そのことにもっと早くから気づいていたら、わたしを好きにはなりませんでしたか？　いじめから救ってくれたりはしませんでしたか？」
「そんなことは」
ない、と即答出来なかった。心の中にある自己満足や自己陶酔を認識しながら茉莉耶に力をさしのべられたかどうか、あまり自信がない。
「わからない。けど、きっと、茉莉耶を放って置くしかできない自分の情けなさに苛立つと思う。情けない無力でいるくらいなら、自己満足のために同じことをするだろうな」
「じゃあ」
茉莉耶が俺の手首に接吻を一つ落とす。
「要君は正義のヒーローです。私を救ってくれたヒーローです」
「そんな私欲にまみれたヒーローがいるかよ」
「女の子は自分だけのヒーローが大好きなんですよ」
茉莉耶の胸の谷間を、透明な液体が下って行った。

「詭弁だ、そんなの」
茉莉耶は答えない。彼女の熱い心臓の音以外、外界からの刺激は何もなかった。毛布の上でとぐろを巻いていた冷たい空気が、僅かな隙間を足がかりに進入する。床からも冷気が湧きだしている。ゆっくりと冷凍されるような時間。
俺は茉莉耶を床から起こし、振り子の要領で自分が下になる。毛布がずれ、茉莉耶の肩が空気に触れた。
「あ、雪」
淡泊に窓の風景を彼女は描写する。彼女の顔にすだれた髪をとり除けつつ、俺も外を見た。いつの間にか雨は雪に変わっていた。都会の町にふさわしい、水っぽい粉雪。だが、降雨量が降そのまま横滑りした降雪量だと、このまま降り続ければ数時間後には路面に厚く積もっているだろう。いや、いつ雪に変わったのだろうか。もしかしたらすでにうっすらと白い幕が生まれているかもしれない。
茉莉耶は毛布を羽織り直し、小さくくしゃみをした。
「風邪引いた？」
「違うと思います」
茉莉耶の額の温度を自身の額に当てて計測する。いつもとあまり変わらない。
くぐもった声で茉莉耶が唐突な質問をした。
「わたしがあの人たちをお父さんとお母さんって呼んだ理由、当ててみてください」
俺はしばし黙考し、眉間にしわを寄せて答える。
「何？　わからない」
「悟ったんです。あの人たちがお父さんやお母さんに感じられなくても、形式上は父親と母親なんだから、そう呼ばないとおかしいんだって」
それは。悟ったとかいうものではなくて、ただ理性で割り切っただけではないのか。心を無理矢理納得させることすらしていない。
「心に嘘ついてるだけじゃないか」

茉莉耶は満足そうに首を振った。額と額がこすれる。
「要君。これは、理屈じゃないんです。人によって、世界の見え方が違う、それだけなんです。だから、どうせなら、ステキな方を選びましょう」
彼女は俺と目を合わせるために首を引いた。彼女の瞳は真っ暗で、冬の夜みたいに静かだった。吸い込まれそうな瞳に口づけを落とす。再び茉莉耶を押し倒しその柔らかな肌を撫でる。
突然、バリバリという振動音が静けさを貫いた。無視のは音を何倍にも増幅させた振動音はフローリングの隅で踊っている。半瞬遅れて甲高いメロディが飛び交い始めた。俺と茉莉耶は同時に携帯電話へ首を向ける。はかったようなタイミングの着信に俺たちの心臓が早鐘のように跳ねる。茉莉耶はシャツを掻き抱き、俺は左胸を押さえながら携帯電話を拾い上げた。
「誰からですか？」
「着メロだから電話帳に登録してる誰かだろ」
一応確認のために画面を開く。電源を落としておかなかった事を後悔した。待ち受け画面に表示された名前を読み、俺は通話ボタンを押す。
「もしもし」
慎重に問いかけると、
「要か。私だ。父さんだ」
せっぱ詰まった原典が通話口に現れた。

†

3.

待ち受け画面に表示された名前は名主ミナ。電話に出たのは原典。繋がりが見えずただ奇妙な予感だけが出現する。得体の知れない不安が肺を茨でくるんだ。原典が先の茉莉耶と同じ事を俺に忠告する。逃げろ。どこへ逃げればいいんだ、と携帯電話を握る手に力が入る。俺はもう、わかってるんだ。

「あんたに心配されなくてもいいんだよ」

はき捨てた言葉に応えたのは、電話の主、名主ミナだった。

「ねえ、いまから出て来れる？　場所は、そうね、ひとつ目の事件があった交差点でどう？」

「なんでお前に呼び出される理由がある？」

最後の時間を静かに過ごさせてくれないふたりに気分が害された。興醒めた雰囲気がリビングに漂っている。俺は茉莉耶に毛布を預けて部屋の隅に腰を下ろす。

「理由ならあるよ。犯人を捕まえたいの。それで、どうして殺しちゃうのか知りたいのよ」

眉をひそめてしまうほど溌剌とした言い分だった。クリスマスプレゼントを待つ子どもみたいに期待に満ちている。

「ね、約束したでしょ、犯人捕まえようって」

「名主」

息をゆっくりと吐き出して深呼吸する。

「何？」

「最初からわかってたんだな」

「何を？」

「いや、こっちの話だ」

「そう」
「約束したんだっけ」
「約束したよー。一緒に犯人捕まえてくれるんでしょ」
「犯人、捕まえたら嬉しいか？」
「何その質問ー」
電話口であっけらかんとミナが笑う。思わず楽しそうだなと言いたくなるくらい、音の外れた笑い方だった。
「嬉しいよ」
その返事に、俺の唇が歪むのを止められなかった。両端がつり上がって犬歯まで覗く。俺はにやけた顔で通話口に宣告した。
「じゃあ、期待して待ってろよ。お前に最高のプレゼントくれてやる」

4.

†

雪は激しさを増し風も強く、視界が半分以上限定される。家々の屋根にも鉢植えにもコンクリートにも、等しく厚さ一センチほどの雪化粧が施されていた。俺と茉莉耶はコートだけを簡単に羽織り、呼び出された場所へ向かう。家からそう離れた場所ではない。通いなれた道を足早に進む。道中誰ともすれ違わなかったが、俺たちはそれを不思議に思わなかった。よくよく考えてみれば、先の犯行現場から自宅へ向かう道のりでも、人の気配を感じた記憶がないことに気づいたはずだった。町は寝静まっているのではなく、無人の異界と曖昧に融合していたのだ。

「ごめんね、呼び出しちゃって」

前方に直立した人影としゃがみ込む人影のふたりを見止めた時は、安堵すら感じたのだ。それほど、人の気配が消えた町が異常な空間であったという事だ。俺と茉莉耶は手を握りあってミナと原典に向かい合う。原典は地面に膝を突いたままやつれた絶望的な表情で俺を見上げ、瞼を伏せた。息が荒く、吐き出された二酸化炭素が湯気のように彼の姿を覆っている。口の端からぽたぽたと血液が垂れ、雪に赤い彩りを添えていた。

「なんで、来た」

絞り出された問いかけを、俺は鼻で笑った。

「望まれたからだよ」

「私は、来るなと言ったはずだ」

俺は彼の前にしゃがみ、その頭を髪を掴んで乱暴に持ち上げた。

「言っただろ、父さん。いまさら父親面すんなって」

髪を持つ力をいたずらに強めた。汗か雪に湿っていて、酷く持ち

心地が悪い。原典の顔が引っ張られる皮膚に合わせて引きつれる。
俺は、おそらく、茉莉耶よりたちが悪い。父親と見止めていない相手を、平気で父さんと呼んでいる。
「こんなこと、口にするのも反吐が出るんだけどさ、俺さ、あんたに何も期待してねぇの」
原典が閉じていた瞼を開いた。
「期待、してたんだぜ？　俺さ、あんたにいつか認めてもらえるんじゃないかって思ってた。そんなのは石に拝むような見当違いだったけどな。あんたは、俺のことなんか一度もまともに考えようとしなかったし、むしろ存在すら否定してた。そうだろ？」
「その通りだ」
呻くように肯定する。
「さっさと教えてくれればよかったんだ、俺がなにものなのか」
「知らなかったんだ！　お前は関係ないと思ってたんだ！」
「お前は？」
俺は顎に指を添え、目をさらにしかめた。筋のように細い視界で、原典がせわしなく咳をする。
「母さんだ。要を生んで死んだと、そう話していただろう」
「ああ」
「母さんも、要と同じだった。人を食べずにはいられないと、悲しそうに言っていた」
「母さんが？　母さんがもし俺と同じだったんなら、父さんが母さんを好きだったなんて信じられないな。父さんは人殺しを愛せるほど器量が大きくない」
俺は原典を突き飛ばす。母さんを侮辱しているにせよそうでないにせよ、彼の言葉で母さんが貶められて行くのを黙って聞いているつもりはなかった。
「名主、あんたの望むもの持って来てやったぞ」
ミナが長い髪を揺らして俺に抱きついた。茉莉耶が引き離すように俺の腕を引く。

「ちょっとは強くなった？」
「何のことですか？」
「別に。いいのよ」
耳元で聞こえる彼女の声は至近距離にも関わらず遠くから響いているような心地がする。老獪にしゃがれつつも、花魁のように艶めかしい。俺の肩を押し、ミナは距離を作る。指を一本掲げ、小首を傾げてなぞなぞをする。
「犯人は誰？」
「俺だよ」
ミナが首をのけぞらせた。白く細い首が眼前で痙攣している。彼女は手を打ち鳴らし、涙を流して喜ぶ。その狂喜は、俺の内側に共鳴し、俺はまた皮肉に崩れた笑みで顔を歪める。開放的な気分だった。自分の愉悦の根元に自覚的であるという事が、俺のたがを外し、さらなる快感の賞味と悦楽を可能にする。
「ねぇ、ひとつ質問してもいい？　どうして殺したの？」
刹那、達すべき絶頂が急速に遠のいた。俺は腕を組み、足を鳴らして思考する。人差し指が俺の二の腕を叩いている。
「さあ」
間もたせるつもりで首を傾げた。
「理由なんてないな」
「そうかしら」
「要君を悪い人みたいに言わないでください」
茉莉耶が口を挟む。全員の視線がおとなしそうに見えた彼女へ集中した。
「推測だけど言ってもいい？」
「ああ、言って見ろ」
「ひとり目。俺と茉莉耶を侮辱した上に、しつこく犯してもいない罪を認めろと迫ってきた」
ミナが両腕を首の後ろに回す。
「ふたり目。茉莉耶は未だに怯えているのに、あいつはすべてを忘

れたみたいに暢気に生きていた」
右腕だけをゆっくりと頭上に掲げる。その手には、補足長い、硬質なものが握られている。
「さん人目。自分だけ富と名誉を得て幸せになって他人を見下す奴が許せない」
ミナが掲げた腕を下ろすと、聞き覚えのある鈴の音が空間を波動で飲み込む。彼女が放った剣の軌道は易々と俺の肩を切り裂いた。いや、切り裂いたものは雪片だけ。俺は両足を原典に絡めとられ、地面に仰向けに倒れる。慌てて身を起こした。
「逃げろ、まだ間に合う！」
原典が声を張り上げるが、俺は動けない。この交差点であの日の夜感じた恐ろしさが胸を針で突き刺し、地面に縫い止めていた。冷や汗が吹き出して額を伝い降りる。手の平で拭えば、それは汗ではなく鮮やかな血液だった。ミナの持つ剣の先がこめかみを傷つけていたのだ。原典だけでなく茉莉耶までもが身を張ってミナに食らいつき、その動きを奪おうとしている。茉莉耶が俺を助けようと必死になっている。彼女が俺のために身を張ろうとしてくれる様など、想像したこともなかった。今でも信じられず彼女の必死さに実感が湧かない。スクリーンの向こうにある良くできた芝居のように遠い。俺は瞼を伝い降りる血液を拭ってこの遊離感の所在を知った。つくづく、俺という生き物はどうしようもないなと思う。俺を守ろうとする彼らの動きに滑稽さを感じてしまうのは、俺が守られたいと願っていないからだった。
「父さん、放してくれよ。動けないだろ」
原典が弾けるように身を離す。彼の反応速度に苦笑が自然と喉の奥に広がった。それは奥歯を刺激する、甘い味だった。幸福の味。満悦の味。俺はなぜか、今までの人生で一番幸せだとすら感じていた。ああ。今なら原典の気持ちを受け入れられるのになあ。
「名主、俺さあ、そんな嫉妬深い人間だったのかな」
「さあ。教えてほしいのは私なのだけど」

虫でも引き剥がすみたいに彼女は茉莉耶の頭部をとらまえ、地面に投げる捨てる。茉莉耶、と身を起こしかけた俺に、ミナは瞬時に間合いを詰める。冷酷無比に俺へ馬乗りになった。尻を俺の腹部に据え、身動きを奪う。鈴が鳴り、澄んだ音が夜空高くへ突き抜けて行く。

「どんな体重してんだよ。まるで石地蔵じゃねぇか」

驚くべき事に、俺には軽口を叩く気持ちの余裕すらあった。

ミナの持つ剣先が喉元に触れる。微かに食い込む感触があった。彼女は不思議そうに目をしばたたかせ、ゆっくりと上半身を横に傾ける。

「あまり、動揺してないのね。もっと抵抗するかと思ったのに。要、あなた、今から殺されるのよ」

俺はじっと空を見上げた。真っ黒な空。町の灯りをぼんやりと照り返し、かすかに雲の影が見える。月は、どこにもない。満月でなくても三日月でなくても、不格好で構わないから月を見たいと思った。まるで、檻の中に閉じ込められて居るみたいだ。俺の心理を反映したのか、ミナが気を利かせたのか。空が動き、雲が割れ、いびつな月が覗く。丸くない。ジグソーパズルみたいに崩れている。

「茉莉耶と父さんをどこにやった？」

「気づかれちゃった？」

雲が割れると同時、世界も断絶した。俺とミナのいる場所と、茉莉耶と原典の行る場所に。ミナの超自然的な能力をほとんど無抵抗に受け入れてしまえたのは、彼女の能力をやはりすでに何度も経験していたからだろうと思う。体験と言うよりは経験。彼女の能力、人払いの術とでも言うべきものが、俺が事件を起こす度に使われていた事にこの時気づいた。

「名主、お前はいったい誰なんだ？」

「誰でもない。強いて言えば、平和を望むみんなの心」

賛同するようにさらさらと鈴が鳴る。俺達から隔絶された人間の声が鈴に詰まっているのかもしれない。

「いつもはどこにいる？」
ミナは悲しげに柳眉を潜めた。目尻が光って見えて、一瞬涙かと勘違いした。はらはらと落下する雪が彼女の頬をかすめ、俺の耳に落ちる。雪は冷たい。だが、俺の体はかなり冷えていて雪の接地を知覚出来なかった。
「どこでも良いでしょう」
そうだな、と俺も同意する。それから、心の中にある物を吐き出すために、肺の奥底から温めた息を吐く。茉莉耶と原典から隔離されたことが、俺の体感気温をさらに下げていて、唇が強ばっていた。白い息がミナの顔をかき退けて彼方へ溶ける。
「怖い」
「死ぬのが？」
「違う。俺が人殺しだったことが」
「自分が殺される理由を知らないよりは、知っている方が幸せだと思うけど」
「そうじゃない。もっと早くに俺は俺の本性に気づくべきだったんだ。そうしたら、ひとりで済んだ。ひとり殺しただけで済んだ」
「あなたをかばった原典を恨んでるのね？」
「原典も、だ。一番恨んでるのは名主だ」
ミナはふ、と小さく鼻から息を出す。風が吹いて、積もったはずの雪が舞い上がった。ミナの髪は風に乗り渦を巻いて空へ昇る。鈴がさらさらと囀り、奇怪な形の月が天空で揺らめく。
「要、そんなのは都合の良すぎる言い分だよ。要はもっと早く、自分を誰かにぶつけるべきだっただけ。閉じこめていたから悪魔が暴走したの。遺伝もあるけど、遺伝が悪い訳じゃない。要がいつまでも自分を偽っていたからいけないの。原典は関係ない。私は、あなたにそのことを自力で気づいて欲しかったの。どうして殺しちゃうのか知りたかったの。後学のためにね。もう、要みたいな人間の始末はしたくないから」
俺の瞳にミナは人差し指を添え、ほお骨から顎先へ滑らせた。

「悪く思わないでね。私は全ての熱帯魚を平等に愛しているだけなのよ」
ミナは俺から目線を外し、花見をするみたいに空を見上げた。雪が、空からも地面からも舞う。小さな小さな花の弁。
残念ねぇ。要は殺しちゃった理由がわからないのねぇ……。
つぶやかれた言葉が、杭となって俺の胸を貫いた。平静を保っていた心臓が、氾濫を起こす。危ういバランスでせき止めていた感情のダムが、大穴を穿たれて決壊した。
俺はミナの膝元で身をよじって暴れる。虚空へ向けて拳を振るう。
俺はどうにかこうにか、最悪最低の事実の数々を、たったひとつの希望で相殺していた。人殺しである現実も、その攻めを追わなくてはならない未来も、小さな、だけど決して手のひらに収まらなかった尽きせぬ切望で。切望とは認知。ミナに犯人を差しだし、彼女が望むようにかのものを始末させる事。彼女がそれによって得るだろう達成感や快感や喜びを、俺の自尊心の糧とする事。アイデンティティの回復、その新興。
だが、希望は中途で破れた。ミナは、俺に及第点を与えない。百点を取れなかった子どものように胸がつかえた。
苦しい。悲しい。悔しい。
俺がなぜ悪魔の遺伝子を引き継がなくてはならなかったのか。俺がなぜ人を食べなくてはならなかったのか。俺はなぜそんな単純な問いにも自ら答えることが出来ないのか。
自分がもっとも知りたいことであり、どうしても読み解けない難題であるからこそ、ミナに残念がられると悔しかった。
役立たずと言われているみたいで、本当に存在価値がないと言われているみたいで、ただ害悪をまき散らしただけの存在しなかった方がいいような存在で。
なぜ、俺は生まれてきたのだろうか。
胸が張り裂けそうだった。肺の胞子ひとつひとつを幾億万もの針が貫く。涙がこらえ切れず溢れ出した。

「認めなさい。自分の無価値を。その無意義を」
ミナが俺を再び見下ろす。冷徹な瞳に光は宿らず、いつしか月も雲に覆われ辺りは雪明かり以外に真性の闇だった。雪だけが夢幻に舞い散る。
「認めなさい。それでもあなたは生きたいの？」
俺はゆっくりと首を振った。もとよりどんな責めでも追うつもりでここにきた。もしここでミナに殺されることを免れても、俺は自ら十三階段を上る。自分で自分の生きている意味を否定する。自分の死を全面的に肯定する。
己の存在意義は、誰かに与えられるもの。誰かに落ち着かされるもの……。
「殺せ」
そう言えばミナは喜ぶだろう。判断して願ったのに、彼女の表情は一向に晴れなかった。憂いを帯びた表情で虚ろに機械的な動作で剣を持ち上げる。もしかしたら彼女は、俺に別の答えを期待していたのかもしれない。そう考えた。だけど、それだけだった。
喉笛を、研ぎ澄まされた剣が貫く。俺は、俺が殺した人たちと同じように、首を胴から跳ね飛ばされて絶命した。

5.

†

「要君！」

ようやく、雪からなる巨大な竜巻の勢いが収まり、ミナと要のシルエットが現れると、茉莉耶は再度竜巻へ特攻を仕掛けた。今度は弾き飛ばされる事なくすんなりと内へ招き入れられる。茉莉耶が要へ近寄ると同時、ミナがその場から立ち上がり、痩せた少女に場所を譲った。数歩離れた場所からふたりを見守る。

「要君！　どうして！　なんで！？」

少女の悲痛な叫びから目も耳も逸らそうとして原典は道路の隅に縮こまっていた。体は小刻みに震えている。寒さは感じていない。胸を満たす押さえ所のない悲しみに五感を乗っ取られて、あえいでいる。

茉莉耶は要の姿を見て、自分がこの世界でついにひとりぼっちになってしまったと感じる。彼の頭部を左手に、胴体を右腕にかき抱き、無理矢理に繋ぎ合わせて、もしかしたら再生するのではないかという一縷もない望みに意識を費やした。苦行から自分を救い出してくれた少年に、今まで感じていた気持ちはかけらも伝えられていない。感謝も、尊敬も、愛情も、依存も、偏愛も、何も。全ては自分が弱いふりをしてきたから。もうとっくに胸を張って生きるべき更正の機会は与えられていたのに、骨折を装って車いすにすら乗らなかった。彼に気持ちを伝えることすらためらっていた。

「要君、大好きです。なんでこんな事になっちゃったんですか。あたしがぐずぐずしていたからですか？　あたしが要君を」

言葉に詰まる。自分の卑怯さに、茉莉耶は気づく。

「要君を、利用していたからですか？」

愛情だけで人は繋がれないものなのだろうか。人は人を百パーセント信頼できないものなのだろうか。要が何があろうと茉莉耶を見捨てないと信じることさえ出来れば、茉莉耶は彼に思いを伝えられたのに。違う。茉莉耶は自分の目から熱い液体が後から後から溢れて止まらないのを、それこそ、偽善だと思った。自己陶酔だと思った。自分が、勇気を出せばよかっただけのこと。彼を信じる信じないではない。伝えたいという気持ちに、大好きだという気持ちに、勇気を添わせてあげられなかった、その軟弱さこそが問題なのだ。

その証拠に、今となれば簡単に告白の言葉が口から垂れ流れる。怒濤のように。檻から出た鳥のように。

「あたしが、気付いていればよかった。もっと早くもっとたくさん好きって言えばよかった。今から笑っちゃうくらいたくさん言ったら、ひとつでも聞くために生き返ってくれますか。好きです。大好きです。どんな要君でも、生きていてくれたらそれでいいんです。わたしは、なんで要君に救われたんですか？　要君と一緒に生きるためでしょう？　なんで救ったんですか？　勝手に夢を見させて、幸せだけ味合わせて、あんまりです。あたしは、まだ、何も要君に伝えてない。依存して寄生して、要君の幸せを食いつぶしただけ。ねえ、なんでそんな完璧なヒーローのままあたしの前からいなくなろうとするんですか。卑怯ですよ。逃げないでくださいよ。あたし、どこまでだって追いかけますよ」

胸にすがりついて彼のコートに涙の染みを作る。要の衣服は雪を吸ってずいぶん冷たく塗れそぼっていた。要と手を繋ぐ。その手は前のように握り返してくれないし、頭を撫でてくれない。彼に撫でてもらうと、魔法みたいに安心出来たのに。彼の喉が鳴らす、「ん」と言う音を、もう一度、たった一度で良いから聞きたくてたまらなかった。彼が居なければ。茉莉耶は自分の体が砕け散るような気がした。肉片の一つ一つが心を持ち去り、茉莉耶から安穏とした記憶を奪う。代わりに、凍えて麻痺した指先から、何かが激流となって押し寄せた。何年も前、痛みに耐えるために捨て去った感情だった。

怒りも。苦しみも。辛さも。悔しさも。尊厳も。全てを廃棄した時に、共に消滅してしまったはずの感情が連鎖反応し互いを深い眠りから目覚めさす。闇よりも深い絶望がその顎をぱっくりと開いた。
喉の奥から絶叫を絞り出す。悲しみだけが心を支配し、目が見えない。何も聞こえない。何も感じない。絶望はその顎を、茉莉耶の四肢に噛み付かせ、古傷をえぐり、幾重にも布を重ねてしまい込んでいた後悔を引きずり出す。何年も閉じ込められていたために、それはもはや化け物の中の化け物だった。黒々として天にも届かんばかりに巨大な体躯を嗽々とよじり、茉莉耶に覆い被さる。後悔は失われた望みを、論理と現実を強引にねじ曲げ無理矢理に作り出す。創出は神の御技に似て、その実悪霊との契約でしかない。蜘蛛の糸より細い望みに茉莉耶はすがりつく。
「要君」
茉莉耶は飛び出した眼球をぎらつかせ、要の名前だけを呼び、胸に去来した後悔を口にした。弱い立場を装っていては決して口に出来なかった言葉だった。
「要君、よく、がんばりました。犯人、発見お手柄です。悪い奴、成敗されて、みんな平和に暮らせます。ありがとうございます。要君はやっぱり、とても、とても、とても強いです。あたしの、一番大好きな、」
剣が宙を落下した。茉莉耶の背中に突き刺さり、精確にその心臓を貫き停止させる。ミナは無表情にもう一度別の角度から茉莉耶の心臓を切り割いて、剣についた血液を払った。鈴が淡々と所作に合わせて一度ずつ鳴る。辺りが血の色に染まる。それは原典がかつて見た、血みどろの惨劇に酷似して美しく悲しかった。
「なんで、茉莉耶ちゃんまで殺したっ……！」
「なんで？」
当然の事に質疑を差し挟まれ憤慨したようにミナは原典へ切っ先を向ける。
「あなたは知っているでしょう。この娘を生かしておいたらどうい

う事になるか。あなたの息子と同じ過ちは起こしたくない、それだけよ。私だって好きで殺したいんじゃない！」
「信じられるか。このっ、あの時要を殺せなどと平気で呪いじみたことを言うような奴だっ」
原典はむせ込む。体に無理を言っているため、体力が消耗されていた。
「この子達の絆は危険だった。とても深く絡み合っていた。何度も警告したわ。別れなさいって。でも、駄目だった。それに、あなたが言う呪いはただの警告であって呪いではないわ。要を愛しきれなかった原典、あなたの愚かさに責めがあるのよ」
茉莉耶のほつれた髪を丁寧にただしながらミナは語る。母親がごとく慈愛に満ちた表情であることが、原典を薄ら寒い気持ちにさせた。彼女を、まともな人間の心を持ったものとして解することが出来なかった。本能がそれを拒否した。平気で人間を殺して、平気で人間を差別して、平気でそれらを愛していると宣う。常軌を逸して狂っている。
「その剣で、さっさと私も刺せばいいだろう！」
呼吸をする度口に飛び込む雪を煩わしく感じつつ、原典はシャツの胸ポケットから最後の手段を出す。それは昨日、会社から拝借した薬品を混ぜ合わせて作ったものだった。
ミナは静かに雪を踏み固めて原典に歩み寄る。風だけが狂ったように吹き荒れて、要と茉莉耶の姿を見えづらくした。雪のせいか、血のにおいもほとんどない。夢うつつの中にいる気分がした。とても、心許ない。
「あなたを刺す理由がない」
ミナはとんでもない、と肩をすくめる。
「私は悪魔を裁くだけ」
「悪魔を、裁く、だと！？」
原典は声を張り上げる。怒号する。ミナを有らん限りの言葉で罵倒した。だが、彼女は切なそうに黙り込み、身動きひとつ瞬きひと

つしない。彼女が徐々にこの空間から身を引きつつある事を原典は悟る。彼女の足は透け、向こうの空間が見えていた。ノイズが彼女の周辺を取り囲み、雪をはらんだ暴風とない交ぜになる。
「裁く理由があれば人を殺すのか。殺しても良いというのか。それなら、」
拳で堅いコンクリートを殴りつけた。手応えは雪が緩衝材となり柔らかい。間抜けな音を立てて粉雪が飛び散る。
「それなら、名主ミナ、お前こそが悪魔だ！」
その声はミナが掠れて消える直前に発せられた。彼女に届いたかどうかは全くわからない。砂糖のように細かい雪が、小さな竜巻を作っていたが、それもすぐに消滅する。原典は竜巻へ手を伸ばし、空を掴んだだけだった。なにもかもが、常に後手後手だった。
原典は。胸ポケットから出した畳紙を開く。そこにある、桜色の薬剤を一気にあおった。

†

6.

一十は目覚ましがなると同時に寝床から這い出した。眠たい目をこすりつつ、未明の夜空を窓の向こうに睨みながら歯を磨く。私服にダウンコートを羽織り、部屋の隅に積まれてあった紙袋を四つ携えて玄関を出た。紙袋は四つ葉のクローバーをイメージした淡いグリーン。今日は国道沿いの人通りが多い箇所で配ろうと決めている。紙袋の中身は、要と茉莉耶に手伝ってもらった配布用ティッシュだった。

アパートの階段を、滑らないよう気をつけながら一歩一歩確かめるように降りる。真夜中、一時過ぎから降り始めた雨がいつの間にか雪となり恨めしいほど積もっていた。運動靴のゴム底が、完全に雪に沈み、ジクジクと冷たいものが染みて来る。ブーツか長靴を履いて出るべきだったと思った頃には、靴下は完全に水没し、足の裏は凍てついて痛く地に足をつけるのもおっくうだった。

「おねがいしまーす！」

組合の名前を叫び、通行人にティッシュを差し出す。通勤通学、朝の用事に忙しい人々は大半見向きもせず、だけど確実に一十を避けるようにして流れて行く。彼も、これから学校があるためこのような時間にしか活動できない。それが一十にはもどかしい。お願いしますと吐き出した息が虚しく白くたなびいて消える。

「きゃあ！」

まだまだばらな人波の向こうで、短い悲鳴が起こった。連鎖するように驚声がそこかしこでいくつも立ち上る。一十は配布の手を止めて爪先立った。悲鳴の起きた下へ視線を凝らす。だが、距離が離れていて、何も見えなかった。誰かが救急車を！　と叫ぶが誰も

動こうとはしない。嫌な予感が胸中を砲丸となって突き抜けた。持ち場を離れ、ふらふらと人垣に寄る。唖然と立ち尽くす彼らに、すみません、通してくださいと謝罪を重ね人垣の前へとくぐり抜けた。

一十の手から紙袋が落下し、白い雪面に緑の色を足す。

「嘘、だろ……？」

膝から力が抜けて、がっくりと重力に引き落とされた。雪にひざを突き、放心したまなざしを彼らに向ける。全員よく知った人物だった。背中から縷々として赤い血を流す茉莉耶。安らかな表情で彼女に腕を回す原典。そして、頭部と胴体こそ離れているものの、茉莉耶が大事そうに抱きしめているのは、要以外の誰でもなかった。あの、飢えた獣のように寂しげな目を、見間違えるわけがない。

「んでなんだよ。なんでまた、こうなっちまうんだよ……」

脱力した一十の手から、ティッシュが離れ、血を貪欲に飲み込んだ雪と混じった。ごくごくと、渇望していたみたいに赤を吸う。一瞬で白かったティッシュペーパーは血の色と同化し、そこに印刷された文字は読めなくなった。

10：ほんのちょっと昔

†

佐藤茉莉耶は幸せな気分に浸っていた。深呼吸をすれば、図書館の古びてどこか懐かしい本の香りに、要の優しいにおいが混ざっている。静かな空間に大切な人と一緒にいて、この上なく、平和で満ち足りた気分だった。ほんの少しある未来への不安すら、甘みに添えられたちょうどよい塩味に感じられる。つまりは、最高に幸福だった。

要が肩に掛けてくれた上着に、ほんのりとほおずりをする。自分の胸に顔を預けて眠りに落ちる要を、愛おしいと思った。絶対に愛し尽くしたいと感じていた。彼の髪をすく。さらさらとした手触り。直接はためらわれ、手触りが残る自身の指にキスを落とす。それだけで体の内部から熱が湧いて燃え盛る。自身の手を舌でゆっくりとなめた。

事件が起きた翌日の、図書館での記憶。

「要君、あたしは、要君のこと、絶対絶対嫌いになったりなんかしません」

彼の頭を抱き、今度こそ直接口づけて宣言する。これは、要に贈る、茉莉耶の精一杯の愛のあかし。決してほどかれることのない愛の呪文。届けられなかった愛の文言。

「あたしは、要君の努力を知っています。要君の気持ちを知っています。だからどんな時でも、どんな事でも、あなたが何かを成し遂げたら、一緒に喜びます」

11：永久

†

——捨ててしまう前に考えて下さい。
生きる事の意味を考え続けて下さい。
生きる事は尊いものです。
たった一つだけのものです。
捨てたら二度と……

………………………………
………………………………
………………………………
……

e
nd.

………………………………
………………………………
………………………………
……

11：永久（後書き）

†

誰もいないパラレルワールドに生きる女の子。
そんなものを考えてみたらできあがった物語です。

それから、ただ「お前が悪魔だ！」って言わせたかっただけとも言う。

個人的な判断としては、初めて書くバッドエンドです。
どうして要は、茉莉耶は、原典は、死ななくてはならなかったのか。
その答えはちゃんと書いてみたつもりです。

また、「裁き」という物についての増岡なりの見解も表現してみました。
作中に書かれたことがそっくりそのまま増岡の意見というわけではないです。

ただ、多分、ラストで伝えてみたかったことは、一十が伝えたかった言葉と同じだと思います。
裁きに対しても、命に対しても。

ここまで読んで下さりありがとうございました！
感謝です。

２０１１．０６．３０

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7465s/

DEVIL'S TRIAL

2011年7月23日03時14分発行